
メビウスという欲望の輪のなかで

佐武 辰之佑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メビウスという欲望の輪のなかで

【Nコード】

N4354E

【作者名】

佐武 辰之佑

【あらすじ】

日本の社会になじめない主人公の「ナガ」は小説を書こうと思ってバリ島に行く。そこで文化や人々と出会い、バリ人の人妻と恋に落ちる。作者の実体験にもとづいた作品です。

二部完結の第一部 2003年執筆

僕は時々海外に行くことにしている。日本にしていると毎日のように日本語を使う。テレビでも、新聞でも、外に出てもほとんど日本語しか見当たらない。あらゆるものが日本語に置き換えられ、日本というところは日本語というもので縁取られた世界である。そういったものに僕は時々とても疲れる。僕は作品を書くにあたって日本語でものを考える。無限の言葉の組み合わせから僕だけの世界を削り出さなくてはいけない。だけど日本にしていると他人の考えや、他の人が作り上げた世界が言葉となって僕の中に流れ込んでくる。はつきり言ってそれは僕にとって非常に邪魔なものなのだ。考えるのは僕一人でたくさんだ、と想着てしまう。

というわけで僕は今バリ島に來ている。なぜ僕がそんなところにいるのか？それは僕にもわからない。たぶん僕が何かの筋道を選び、そして偶然辿り着いただけなのだろうと思う。

日本からみると南に位置したこの小さな島は暑くて、いろんな匂いがある。いろんな人々がいる。のどかで退屈に満ちている。風は真っ直ぐに草を揺らしながら進んで行き、ブルーの海が反射した光が空を似たような色に染め上げている。夜になれば澄んだ空に無数の星が浮かび上がり、虫の鳴き声が明け方まで続く。日光浴なんてしなくてもここにいればだんだんと僕の肌は浅黒くなってくる。町の至る所では犬や猫が町中をうろつきまわり僕と同じように居心地の良い場所を探し回っている。

朝起きると夜の間に溜まった湿気を吹き飛ばすように太陽が現れ、空気が朝の新鮮な湿り気を拭い取っている真つ白な頭のまま僕はいつものように食堂に向かい朝食を取る。そしてけだるさの抜けきらないまま僕はぼんやりしながら時を過ごし、いつの間にかまた眠気が僕ににじり寄ってくるのを感じる。そして僕はそれに歯向かうこともなく、身を投げ出して包みこまれる。どうせ僕にはこれといってやらなければいけないことなど何もないのだから。

どのくらい眠ったのかもわからずベッドの上でぼんやりと目を覚ますと、カーテンを閉め忘れた窓から切り取られた田園風景が見える。手前にはこの宿の庭にある何本かの木が並び、その向こうには田んぼが広がっている。僕の中の忘れ去られた遠い記憶のような蝉の鳴き声がどこかで聞こえ、下着一枚の体には僅かに風の流れを感じる。

僕はその窓の向こうに行きたいと思う。まだ何もかもがあった甘酸っぱい夏の季節に。水を撒かれたアスファルトの熱気、まだ空けきらない灰色の空がだんだんと朱色から青色に変わってゆく鮮やかな一日の始まり、何も失うものはないと思えるような好奇心を掻き立てくれるどこから吹いてくる風、そして本当に自分の帰るべき場所をわかつていたあの頃の夏がその窓の向こうにあるような気がしてくる。

懐かしさと切なさを感じながら僕は目を覚ますことになる。でももちろんドアを抜けて外に出たところで僕の夏が戻ってくるわけ

もない。夏はもう終わってしまったのだと僕は思う。

切り取られた一面的な世界が僕にとってのすべての世界でありその向こうにあるはずの遠く見知らぬ世界は見捨てられた過去のよう
にそこで途切れてしまっているように思えてくる。

僕はテラスに置かれた竹製の椅子に座り、煙草を吸いながら目の前に広がる風景を見るともなしに眺める。学校のグラウンドぐらい広々とした田んぼにはところどころで鎌を持った人がざくざくと手を動かしているのが見える。時々鳥が空を横切り、蜂が唸りをあげて僕のそばを飛び回り、どこかの地上に縫い付けられた風がぽつかりと浮かんでいる。

遠い空、吹き抜けてゆく風、そして遠い記憶。その中で傾いた太陽の強い光が辺りに降り注ぎ、僕は飛び回る光の粒子たちとしばらく会話でもするように見えない時間の中に身を預け、風に打たれる。燃え上る煙草の煙はゆっくりと風の中に溶けてゆき、僕をもう一度遠い記憶の中に連れ戻してゆく。

しかしどんなにのんびりと平和に暮らしていても僕はときどき自分の中の欠落にどつぷりと浸かってしまうことがあった。それは月と繋がっている女性たちの「生理」のように周期的に僕に襲い掛かってきた。そんな時、僕は目を閉じてベートベンのピアノソナタの「情熱」という曲を聴く。まるで僕が暗闇の中で無意味さという螺旋階段をさ迷っているような感じがする。ある時は死に物狂いで駆け上がり、ある時は休み、ある時は足を滑らせて転げ落ちていた。まるで僕の人生みたいだなと思う。しかし僕はその見えない階段から逃れられないでいた。そこは高さも低さもなく、早さも、焦りも、

生や死すらもないところだった。どんなことをしたところで僕はその永遠に続く階段の上にいるのだと思った。

到着の汽笛が鳴り、僕がどこかに辿り着いたことを告げる。ここはどこなのだろうと僕は思う。流れ着いたその先がどこに向かっているのか僕には知る由もない。

いつの日も意味だけが降り積もる。手に取るとゆっくりと溶けてなくなつてゆく意味。恐る恐る後ろを振り返るとそこには膨大な意味だけが積み上げられている。

いつも意味だけが着いて回る。ぐるぐると僕の周りを回っている。しかしその回転はいつの日か僕から離れてゆくだろうと思う。

意味のないものが多すぎる、そしていつも意味だけが回り続ける……。

僕が空港に降り立ったのは午後の2時ぐらいだった。飛行機は深い緑色の海を眺めながら緩やかに滑走路へと着地した。窓からは膨らんだ空気がたち込める真つ青な空が広がっていた。飛行機を降りたとともに僕は懐かしい匂いに包まれた。アジアの匂いだ。アジアはどこに行っても不思議と同じ匂いがする。きな臭い生活の匂いであり、貧しさの匂いであり、焦げ付いた欲望の匂いでもある。その匂いを嗅いだとともに僕の中に潜んでいた数々の思い出が弾けるように僕の体の中に溶け込んでくる。そして空港を出るとそれはよりはつきりとして僕の中に潜り込んでくる。僕は大きなリュックを担ぎ、そんな匂いと自分の汗の中ではなく立ち尽くしていた。外では新鮮で目がチカチカするほどの太陽の光が世界を焼き、日本のように白っぽくない本当に澄んだ青色の空が広がっていた。ゲートを出るとすぐに何人もの浅黒い男が話しかけてきた。

「タクシー?」「トランスポート?」

僕は首を振ってそれに応え、とりあえずトイレに入った。トイレからも、水道からも強烈な「アジアの匂い」がした。トイレを出てから辺りを見回し、僕を探している人がいないか少し歩き回った。予定では友達が迎えに来てくれるはずだった。僕はガイドブックすらもたず、この地を訪れるのは初めてで、どんな言語が話されているのかも知らなかった。ゲートの出口には30人ぐらいの人が溢れていた。半分がタクシードライバーみたいで出てきた観光客にしきりに声を掛けている。僕は重いリュックを担いだまま地面に座り込み、汗を拭いながら煙草を吸った。

「ヘイ、ミスター」地面の上に腰を下ろした僕にドライバーが英語で話しかけてきた。

「街まで行かないのかい」

「友達を待っているんだ、ありがとう」と僕は答える。飛行機を降りたときはエアコンのせいで体が冷えていたからわからなかったけど肺まで伸びてしまいそうな暑さだった。リュックを担いでいる背中がびつしりと濡れているのがわかる。しかし荷物を体から離すわけにはいかなかった。僕はこの国の治安がどのくらいで、どのくらい人を信頼できるのかまだわからないのだ。煙草を吸い終えても友人の姿は見えなかった。僕と同じ便でやってきた乗客はほとんど姿を消してしまい、残っているのは僕と浅黒い現地の人々だけだ。客を捕まえられなかったドライバー達はうなだれて地面に座り込んでいる。辺りにはもう観光客の姿は見え、周りにいるのは肌が黒くて疑わしそうな顔をした人達ばかりだ。僕はゲートの出口に掲げられたデジタル式の大きな時計を見て、あと10分待ってみようと思いつき、日本で買ってきたセブンスターに火を点けた。座り込んだドライバーたちががががやとしゃべっていたけど、耳を澄ましてみても何を言っているのか全くわからない。ここでこうしていると昨日まで日本にいた自分が遠い昔のことのように思えてきた。時計を見上げて僕が立ち上がると待ちかねたようにあちこちから声がかつてきた。

「タクシー？」 「トランスポート？」

僕はそれらに首を振りながらバス停を探した。とにかく街まで行かなくてはいけない。ホテルもとっていないし、空港がどのへんに位置するのもわからない。待っている間、いくつかのバスが目の前の道路を横切っていったからどれかは街に向かうのがあるはずだろうと僕は思った。しばらく道沿いに歩いていってバスが乗客を吐き出しているのが見えた。僕はそこまで歩いて行って、

「このバスはシティまで行く？」と僕は英語で聞いた。

「行かない」とバスのドライバーは答えた。

「シティ行きのバスはどこから乗れるの？」

「バス、ない、ない。タクシーだけ」とドライバーは答えた。しかたがないのでゲートまで戻ってタクシードライバーに声をかけた。

「シティまで幾ら？」と僕は聞いた。ドライバーは中年の男だったが、どこことなく貧弱そうで、不器用そうな笑顔を浮かべていた。

「幾らならいい？」と片足に体重を掛けて立ったまま彼はそう言った。

「幾ら？」と僕は聞き返した。

「10ドル」と焦点の定まらない目で彼はそう言った。

僕は高すぎると答えて他のドライバーを探そうとした。僕がこの国の物価を知らないとしてもアジアの国で街まで10ドルもしないことぐらいはわかる。

「待て、待て、ヘイ、ミスター、幾らならいい？」と背後から僕に呼びかけた。僕はよくわからなかったので空港を出る時に両替した5万ルピア札を差し出すと彼は頷いた。だいたい800円ぐらいの計算だった。この時は知らなかったけどこれの3分の一ぐらいが標準の料金だった。

僕は荷物をトランクに乗せ、タクシーの助手席に乗り込んだ。とこ

るどころ錆ついたドアを開けると、もあつとした熱気と「アジアの匂い」を感じた。

車が出発すると「バリは初めて？」とドライバーが聞いてきた。

「イエス」と僕は答えた。

「暑いか？」と汗を拭いている僕に聞いてくる。

「イエス」

「どこに行けばいいんだ」

「シテイ」

「宿は決まっているのか？」

僕はシンプルさを心がけて「ノー」と答えた。

「ヘイ、フレンド、俺の知り合いが宿を経営しているんだけど紹介しようか？」

「ノー、サンキュー。街の中心で降ろしてくれればいい」と僕は答えた。

「でも宿は決まっていなかったらどう？」彼はろくに前も見ずにチラチラと横目で僕を見ながら話しかけてきた。僕は彼の肩をちょんちょんと叩いて、

「ミスター、ミスター、ちゃんと前を見て運転してくれ」と言った。

「とりあえずネットカフェに行つて友人からのメールを見ようと思うんだ」

「じゃあネットカフェに行こうか？」

「いいや、街の中心で降ろしてくれればいい」と僕は答えた。

「じゃあ宿に連れて行こうか？」

バリに来て早々こんな会話にはうんざりさせられたけど、エアコンから出てくる冷たい空気は少し気分を落ち着かせてくれた。僕が何も答えないで黙っているとドライバーは道端に車を寄せた。

「ここはネットカフェだ」と言つて、どの角度から見ても僕にはそうは見えないうらぶれた家を指差した。「俺はここで待っているから」と僕に言つた。僕は荷物をトランクに積んだままだったので、

「いいから、シティに行つてくれ」と僕は言つた。対向車線には何台ものバイクが通り過ぎて行つた。車には見慣れたトヨタやスズキのマークがついている。バイクは油っぽい黒煙を吐き、埃っぽい風を群れになって舞い上げている。観光客の姿はあまり目に付かない。けっこう前のことになるけど、爆破テロが起こつたし、最近は新型コロナウイルスが発生しているからバリに来て人は少ないのかもしれない。

10分ほど走つてから車は狭い路地に入り、小さな門を抜けて庭のようところで停まつた。

「もうシティに着いた。ここは友達の宿だ」と淡々とドライバーは言つた。屋根の付いた小さな建物の中にカウンターのようなものが見える。どうやらレセプションのようで向こう側に男がひとり立つ

ていた。

「宿に来たいとは言っていない」と僕が言うと、

「ミルダケ、タダ。ミルダケ」とイントネーションがおかしい日本語でそう言った。

僕はしぶしぶ部屋を見に行ったけど、思ったより部屋は綺麗で悪くはなさそうだった。エアコンはなくて、天井にファンがぶら下がっていたので案内してくれた男にエアコン付きの部屋はないのかと聞くと、エアコンの部屋はもっと高いと答えた。一泊の値段を聞くとこの部屋は15万ルピアで、エアコン付きは20万ルピアだった。15万ルピアという金額にあまりピンとこなかったので、頭の中で計算してみるとだいたい2300円ぐらいになった。僕が高いと言うと、じゃあ13万だと男は答えた。僕はタクシーのドライバーの所に戻って他の場所に連れて行ってくれと言った。

「いやいや、ここはいいところだぞ。部屋も綺麗だし町からも近い。俺のおすすめなんだから間違いない」と彼は答えた。

するともう一台タクシーが庭に入ってきて、僕の乗ってきたタクシーのすぐ後ろに停めた。どうやら着いたばかりでまだ右も左もわからないといった感じの西洋人の中年夫婦だった。

「あのレセプションの男にプライベートな金を少し払えばもっと安くなるから。フレンド、どうだ？」

僕はタクシーの助手席に乗り込み、持っていた煙草を一本差し出した。ドライバーはそれを受け取り、僕がライターで火を点けた。僕も煙草を吸った。僕はゆらゆらする彼の視線を見ながら、できる

だけ丁寧に言葉を区切って言った。

「ミスター、僕はバリに着いたばかりでなにもわからない。ここはいい宿だけど僕には高すぎる。他のもっと安いところへ行ってくれないか？」僕がそう言つと、彼はおもしろくなさそうに頷き、窓を開けてレセプシヨンの男に何かを言つてから車を動かした。

ドライバーは前を見つめてグルグルとハンドルを動かし、僕は黙つて座つていた。すぐに車は別の門を潜つた。なんだかさっきの宿よりもしつかりした佇まいのような気がした。

「値段を聞いてこい」と運転手が言つので僕は車を降り、レセプシヨンの男に値段を聞くとさっきの宿の倍近い値段を言われた。僕が車に戻るうとすると、

「待て、幾らならいい？」と後ろから声が聞こえたけど僕はタクシ―に乗り込んだ。ドライバーは不敵な笑みを浮かべて僕を待っていた。僕はわざと大声で笑いながらドライバーの肩をバシバシと叩くと彼は不思議そうな顔をした。

「もっと安いところへ連れて行ってくれ」と言つと何も言わずに車を出した。車は細い路地をさらに奥のほうへと進んでいった。

「こつちには一人で来たのか」とドライバーが言い、友達がいるんだと僕は答えた。

「女はいないのか」いないと僕は言つた。

「なぜいないんだ」なぜいないのか？と聞かれても僕にはこれといつて理由なんかなかったからわからないと言つた。

「俺の彼女は日本人だ。ユウコっていう名前で、今は日本にいる。日本の女は最高だよな」

そうかもしれないと僕が答えると、車は小さな宿の前で停まった。

「ここ？」と僕が聞くとドライバーは「そうだ」と答えて一緒に車を降りた。フロントには肩ぐらいまで髪を伸ばした20歳ぐらいの男がいた。値段を聞くと今までの中で一番安かったのでこの宿に泊まることにした。タクシーのドライバーは「もう一万ルピア払えないか？」と言ってきたけど僕がもう金は払ったと言うと渋い顔をして去って行った。

フロントの男は僕の荷物を担ぎ部屋まで運んでくれた。僕の大きなリュックを持つと、ティシャツの裾からタトゥーが見え、彼が人懐っこく笑うと前歯が1本ないことに気が付いた。宿はおそらく10部屋以上はありそうだったけど、他の部屋には人のいる気配はなく静まり返っていた。

部屋の中は外観に比べると思ったより綺麗だった。ベットテーブルをはさんでシングルベットが二つ並び、天井にぶらさがったファンと壁に押し付けられた椅子が二つ置いてあった。僕は部屋の奥のベツドに荷物を置き、壁にあったスイツチを入れるとむき出しの裸電球が灯り、ほんの少しだけ部屋の中が明るくなった。バスルームを覗くとわりに広かったけど洋式の便器と、その横にシャワーがぼつんと引っ掛けてあるだけで、鏡も、タオル掛けも、トイレットペーパーのホルダーもなかった。僕は荷物を解き、とりあえずシャワーを浴びた。

体を拭きながら荷物が無いほうのベッドに腰掛けただけでバりに来

たという実感は全然なかった。少なくとも僕にとってここがバリである必要はなかった。薄暗い部屋ではゴオンゴオンという扇風機の回る音が聞こえ、その風にあおられてカーテンがもそもそと揺れ、目の前のベッドの上には僕が日本から持ってきた荷物が散乱していた。ノートパソコン、CDケース、カメラ、洗面用具、衣類なんかなだ。僕はこの時始めて自分が時計というものをひとつも持っていないことに気が付いた。腕時計も、目覚ましも、もちろん携帯電話もない。部屋には掛け時計もない。でも、まあいいかと僕は思った。時間がなくなっただとところで、僕が死ぬわけでもない。

部屋にいてもしかたがないので僕はとにかく外出することにした。短パンに履き替え、パスポートなどの貴重品はウエストバックに入れて持つてゆくことにした。部屋の扉を開くと強い光に打たれて僕は目を細めた。路地のわきには南国っぽい太い茎の葉が茂っている。やっぱり新しい場所に来ると自然とわくわくした気持ちになる。今まで感じたことのない光がそこにあり、空気があり、見たことのない建物や、ちょっとしたことでも僕の心のどこかを刺激する。

僕は煙草が切れかけていることに気が付いたので目に付いた商店に入った。

「煙草ある？」とガラスケースの向こう側にいるドロツとした目をした黒い肌のおばさんに話しかけた。いくつか煙草が並んでいたけどどの煙草がいいのかわからなかったので赤色のパッケージの「カンス」と書かれた煙草を指差して、

「これ、幾ら？」と聞いた。おばさんはあんまり英語ができないらしく目の前にあった紙に7000と書いた。僕は「水もある？」と聞くと古びた冷蔵庫からペットボトルを出してきて紙に2000と書いた。僕は一万ルピアを差し出したけど、それを受け取ったおば

さんは何事もなかったかのように足元の椅子に座った。僕が「1000ルピア、お釣り」と言うとおばさんは眉をしかめて首を横に振った。僕は紙に書かれた7000と2000を指差し、「お釣り」と言うとおばさんは7000を8000に書き直して水と煙草で一万だと言った。それならいらぬからお金を返してくれと言うとしぶしぶわくちやの1000ルピア札を僕に渡した。

僕は大通りに出て中心街に向かった。ヤシの木が道路沿いに等間隔に立ち並び、すす汚れたレストランやホテルが見えた。道路わきには馬車があつてくたびれたバリ人のおじさんがその中で昼寝をしていた。歩道を歩いていただけ、車が通れるように所々窪んでいるし、コンクリートもごつごつして平らになっていないので歩きにくい。何年も同じ服を着ていそうなバリ人の男が5、6人道路に座っていて声をかけてくる。

「タクシー？」

僕は「ノー、サンキュー」と答えて先に進んだ。

僕があるカフェの前を通り過ぎようとしていたところにけばしいアロハシャツを着て、くわえ煙草をした男が店から男が出てきて僕に話しかけた。

「シャチョウ、オンナ、オンナ」と言つて道路に面したテーブルに座っている女の子を指差した。彼女は艶のある黒い髪を肩まで下げ、何かのジュースをストローで飲んでいた。見慣れない浅黒い肌、顔立ちは悪くなかったけど平面的な光をした目を僕に向けていた。僕はかまわずに通るすぎ、少し清潔そうな感じのする店の並ぶ通りに進んだ。マクドナルドの看板が目に入り、透き間なく並んだ店の前にはそれぞれ店員らしき人が立っている。アルマーニやポロの店な

んかもあつたけどおそらくは偽物じゃないかと僕は思った。地図もない僕はやみくもに歩いていただけ、また男がひとり話かけてきた。

「ハロー、ニッポンジン？ドコ、イキマスカ？」僕は無視して通りすぎようと思ったけど、男は僕の横に並んで歩き、早口で話し続けた。

「ドコカラキタ？トウキョウ？オオサカ？ハダ、シロイネー。キタ、バカリ？」

道路では青色のタクシーがクラクションを鳴らし、バリ人が他の観光客にしきりに話しかけていた。

「バリ、ハジメテ？」と隣の男の問いに僕は通りを歩いてゆく白人や、肌の黒くないアジア人が歩いているのを眺めながら頷いた。

「ワタシ、イッパイ、ショウカイ、デキル。ドコ、イキタイ、デスカ？」

「ありがとう、でもいいや」と僕は英語で答えた。やがて丁字路に差し掛かると、

「コッチ、ウミ」と隣の男が左の道を指したので僕はそっちに向かって角を曲がった。確かに僅かな海の匂いがし、道路はさらに砂っぽくなったような気がした。隣の男は当たり前のように僕に付いてきた。お土産屋がずらつと並び、バリ独特のカラフルな小物や、木彫りの置物や、アロハシャツみたいなものが歩道にはみ出さんばかりに置いてある。店の入り口もお土産に隠されてわからないし、隣の店との境目もわからなかった。どの店も同じようなものばかり置いてあるので、どれを見ていいのかわからず、とにかく店に入る気

にはならなかった。隣の男は執拗に僕に話しかけてきていたけど中途半端な日本語を聞いていると脳がだんだんと痺れてくるような気がした。僕は適当に合槌を打ったりしていると道路の切れ端に海が見えてきた。海岸にはお土産のようなものを担いだバリ人のおじさんやおばさんの姿が見え、ちらほらと観光客らしい人もいた。ビーチに入ると早速何かを抱えた黒くキメの荒い肌をしたおじさんが僕に近寄ってこようとしたけど、僕は手を振ってそれに応えた。

ビーチにはたくさんの人がいたけどほとんどが浅黒い肌の若いバリ人のようなだった。それにあまり女の子の姿がない。

「ココ、クタビーチ、サーファー、オオイ。キョウ、ニチヨウビ、ダカラネ。ミンナ、ビーチ、キテ、アソブ」と隣の男が言った。僕は水平線の見えるところまで行って腰を下ろすと男も僕の隣に座った。ビーチは湾のようになっていて遠くまでゆったりとしたカーブを描いて砂浜が延び、丘高くなったところにはちらほらとホテルのようなものが建っていた。僕はバリの海はすごく綺麗なのだろうと思っていたけど、エメラルドグリーンというよりはダークグレーといった感じの海の色だった。

「キョウ、ナニ、シテマスカ？」と隣の男が言ったので

「うーん、友達と会う予定なんだ」と僕は日本語で答えた。

「トモダチ、ニッポンジン？」と男が言ったので僕は頷いた。

「バリ、ドノクライ、イル？」

「たぶん二ヶ月ぐらい」

「ニカゲツ！ナガイネー」

「うん、長いね」と僕は言った。ビーチではサッカーボールを蹴ったり、キャッチボールをしたりしているグループがいたけど、凧上げをしている人もいれば、凧を売ろうとぶら下げている人もいた。でも海に入っている人はあまりいなかった。

「ねえ、どうしてみんな海に入らないの？」と僕は隣に座っている男に聞いた。

「ウミ、コワイ、ダカラネ。バリジン、ウミ、ハイラナイ」

どうして海が怖いのか僕にはわからなかったけどいろいろと聞いて面倒くさいことになっても嫌だったのでそれ以上聞かないことにした。僕は煙草を吸おうと思ってさっき買った煙草を取り出すと、隣の男も欲しそうだったので一本薦めた。

「コレ、ナニ、タバコ？」

「さっき買った、カンサス。バリの煙草じゃないの？」

「シラナイ」と男は言った。煙草はアジアの匂いと葉巻のような苦味がした。

「バリジン、タバコ、サンプルナ、スウ。アマイ、ダカラネ。アマイ、スキ、バリジン。ネエ、オンナ、イラナイ？」

僕はいらないと答えて黙っていると煙草を吸い終えた男はつまらなそうに去って行った。僕はひとりで海を眺めていたけど物売りが声をかけてきてあまり落ち着くことができなかった。太陽が水平線

に向かって下降しているのに気が付き、人々の影が僕のほうに伸びているのを見てそういえばネットに行かなくてはいけないんだっただけだ。友だちからメールが入っていた。

ナガ、バリに着いたか？俺は急に仕事が入って空港に迎えにいけなくなった。悪いけど明日の夕方まで時間が取れそうにない。クダにおまえ向きのゼット・インという宿があるからそこに泊まってくれば会いにゆくよ。明日の再会を楽しみにしている。

ユウ

僕はゼット・インという宿を探してみるけど、わからないといけないので明日の夕方7時に中心街のマクドナルドで待っているというメールを返信しておいた。僕はだんだんと薄暗くなってきた見知らぬ街をひとりで歩いた。道路も狭いし車やバイクが数多く走るのであまり開放感というものがない。そこにいる人々が違うだけでこれじゃあ日本の町と同じようなもんだなと思った。靴屋や衣類店、土産物屋やマツサージの店がずらりと並び、時々西洋風の綺麗なレストランがある。店の前の歩道に葉っぱで編んだような小さな入れ物に何種類かの花とお香が入っている飾りのようなものが落ちていくことに気が付いた。何かお祭りでもあったのかもしれないと思っただけだ。それを踏まないようにしながら僕はハンカチで汗を拭いながらあてもなく町をぶらぶらした。店や道路脇にいる男たちからひっきりなしに声が掛かってくる。僕と視線が会うと手招きするものや、ハンドルの動かす振りをしてタクシーはどうだと聞いてくる。すれ違

うときにマリファナやドラックを見せてくるものもいた。欲望の町、そしてその向こう側には簡単に人々の生活の匂いを嗅ぎ取ることができた。

声を掛けてくる人々に断り疲れてきたので僕は人気のない路地に入ってみた。すっかり日は落ちていて、日本の3分の1ぐらいしか光の強さがない薄暗い街頭が遠くにぼんやりと立っているだけだった。なんだか誰かの夢の中に紛れ込んでしまったような気がした。垣根からはみ出した僕の背よりも大きな葉っぱが闇の中で黒い影を浮かび上がらせ、遠くでバイクのエンジン音が木霊している。道路はアスファルトがめくれ上がって所々に穴が空いているし、そこから小石が漏れていて散乱していた。所々の家からはオレンジ色の光が灯っていたけど、路地を照らすほど明るくはなかった。おそらくバリ島ではまだ人間の力より夜の闇の力が強いみたいだなと僕は思った。僕はゼット・インという宿を探しながら町をぐるっと歩いてみたけど、それらしい宿は見つからず、ティシャツが汗で張り付き、サンダルが擦れて足が痛くなってきたので自分の宿に戻ることにした。宿に戻る前に近くのレストランに入り、ミ・ゴレン（フライド・ヌードル）と書かれた料理を注文した。

がさがさした木のテーブルと椅子がいくつかわかれ、しわくちゃになって黒々としたメニューが置いてあった。夕飯時にもかかわらず客は僕ひとりしかいなかった。レストランの主人も人懐っこく日本はどこの出身だとか、バリは何回目だとか、女はいないのかとかいろいろと聞いてきたので適当に話をしながら傷だらけのプラスチックの皿に盛られた「ミ・ゴレン」という焼きそばをオイスターソースで炒めたような料理を食べた。

宿に帰るともう一度シャワーを浴び、パンツ一枚の姿でベッドに横になった。敷かれている白いシーツは長年使っているものらしく

毛羽立っていて少しざらざらするような感じがした。もう出掛ける気はなかったし、特にすることもなかったので僕は音楽を聴き、日本の空港で買ったウイスキーを洗面用に持ってきたコップで飲んだ。タイル張りの冷ややかな床は不自然なほどの白っぽい部屋の電球を鈍く照り返し、僕の孤独を一層強めているような気がした。僕はわざわざこんなところまで来て一体何をやっているんだろうと思った。僕はいつも聞いている音楽を聴き、いつも飲んでいる酒を飲んで、僕はカンサスという不味い煙草を何本か吸ってから電気を消して、部屋の外から聞こえる僅かな虫の鳴き声を聞きながら抜けきらない感情を抱えて眠った。

朝、目を覚まして部屋を出ると、宿のフロントの前に昨日道でよく見た草で編んだ入れ物にいくつかの花と線香が置いてある飾りのようなものがあつた。僕はフロントの男にこれは一体なんだ、お祭りでもあるのと聞くと、これはヒンドゥー教徒がお祈りのときに使うものだと教えてくれた。バリではほとんどの人がヒンドゥー教を信仰していて、これはお祈りに毎日使うらしい。フロントの男は朝食が料金に含まれているけど食べるかと聞いてきたので、僕が食べるというと奥にあるキッチンでトーストとオレンジジュースを出してくれた。

僕は荷物をまとめて宿をチェックアウトし、ゼット・インという宿を探して町に出た。まだ朝なのに太陽に打たれるとすぐに汗が出てくる。おまけに僕は大きなリュックを背負っていた。大通りに出て道端にいたバリ人にゼット・インという宿を知らないかと訪ねてまわった。タクシーに乗れと言われるかと思っていたけど以外にも丁寧に道を教えてくれた。ゼット・インという宿は中心街から10分ぐらい歩いた小さな路地を入ったところにあつた。チェックイ

ンを済ませると二階の部屋に案内された。二階には中庭を挟んで口の字型にずらつと部屋が並び、各部屋の前には竹製のテーブルがひとつと椅子がふたつ置いてあった。部屋の中は昨日泊まった部屋よりもかなり汚かったけど、料金はその分半額以下だった。おそらくサーファーがよく使う宿らしくバスルームの壁には所々に砂がへばりつき、細かく仕切られたピンク色のタイルは黒ずんで足を踏み入れるのも嫌だったし、糞便と強い潮の混ざった匂いが立ち込めていた。僕は水着に着替えビーチに出てみることにした。

平日だったせいかな昨日に比べるとビーチにバリ人たちの姿はなく、ちらほらと観光客が砂浜の上に寝そべっているのが見えた。僕は物売りに声を掛けられるのが嫌だったので、ビーチに出てから人気のないほうに向かつて歩いた。僕はティシャツを脱ぎ、それを枕にして砂浜の上に寝転んで目を閉じた。体から出た汗のせいで細かい砂が体に纏わり付くのがわかる。僕は夏のビーチで横になるのがけっこう好きだった。波の音が繰り返し聞こえ、強い太陽の光が瞼を焼いて僕の血液を見るように視界が真っ赤に染まる。目を閉じていても僕の上に太陽があることがはっきりとわかる。それはこれ以上ないくらい強い光であり、熱を持ち、世界を焼き、そして生命の源であるのだ。その中に身を委ねていると不思議と暑さというものを忘れてしまう。流れ落ちる汗もあまり気にならない。ゆっくりと目を開けると視界が焼けた瞼のせいで白っぽく霞んでいるのがわかる。そこにはいつものように波があり、小船が波の中に浮き沈みし、見るこのできない深い海の中の世界があり、そして大きな大地があり、ゆったりとした水平線があり、取って付けたような形のいい雲が青空の中で泳いでいた。僕はこのまま太陽の熱に溶かされ、渴いた砂に溶けていって、海の中に流れ込んでゆければ気持ちいいだろうなと思った。

しかしそんな幸せな時間は5分と続かなかった。誰かの呼ぶ声に気づいて首だけを持ち上げるとそこにひとりの青年の姿があった。青年はこのクソ暑いにもかかわらず、ジーンズを履き、ティシャツの上にジャケットまで着ていて、背中にはリュックを背負っていた。

「ヘイ、ミスター、CD買わないか？」と青年は僕を見下ろして言った。僕はいらないうったけど青年は僕の隣に腰を下ろし、リュックの中からCDの束を取り出した。僕が寝転んだまましていると「ミスター、起きて、起きて」と僕に言った。

CDは昔有名だったバンドがほとんどでニルバーナーや、クイーン、メタリカ、レッドツェッペリン、ジミヘンドリックス、ディープパーブル、エリッククラプトン、エルビスプレスリーにビートルズまであった。何十枚も見ただけで僕が欲しいものはその中にはなかった。

「ねえ、悪いんだけどこうゆうのは全部持っているんだ。なんかクラシックのベートーベンとかバッハとかそうゆうのはないの？」と僕は聞いてみたけど、そんな名前は聞いたこともない、どのバンドだと青年は言った。あなたは音楽が好きみたいだから店に来てくれればもつとたくさんCDがあると青年は言っただけで、僕は適当に断った。

僕が砂浜に横になると青年は去って行き、しばらくすると今度はポコンと突き出たお腹に布を巻いたおばさんが近寄ってきた。頭の上や腰に数え切れないくらいのネックレスやブレスレットやキーホルダーをぶら下げて笑顔で僕に近づいてきた。片手で支えている頭に載せたそれらの土産物は頭に乘っているだけでも100個以上はありそうだった。おそらくは50歳近い年齢で麦藁帽子を被って浅黒い顔を影で覆い隠していた。

「ハロー。フェア、アー、ユー、フロム？（どこから来たの？）」
と言った彼女に、

「アイム、フロム、ユニバース（宇宙から来た）」と僕が言うと彼女はぶ厚い唇からはみ出した歯を片手で隠してクスクスと笑った。彼女は持っていた布のようなものを砂の上に広げ、その上にどっかりとお土産の山を置いた。

そのビーズや貝殻でできたネックレスやブレスレットを僕に見せて、これはどうだ、これはいらぬかと聞いてきたけど僕はいいなと言いつづけた。

「ねえ、名前はなんていうの？」と僕は英語でおばさんに聞いた。

彼女は「ワタシ、ナマエ、メリー、チャン」と日本語でいい「クリスマスの日に会ったオーストラリア人が名付けてくれたの、メリークリスマス」と俯き加減で今度は英語で言った。

僕はしばらくそのメリーというバリ人のおばさんと話をしていた。日本はこの出身だとか、バリにはどのくらいいるのか、仕事は何をしているのかといった質問をされ、僕はメリーは何歳だとか、どこに住んでいるのか、子供はいるのか、そんな感じの質問をした。メリーは18歳になる私の娘がいるのだけれど嫁にどうだと言ってきたので、僕はメリーのほうがいいと言うと恥ずかしそうに笑った。会話が少しでも途切れるとメリーは決まって僕に土産物はどうかと言いい、僕はそのたびに冗談を言つてメリーを笑わせた。そのうちにニコライという20代半ばぐらいの同じように土産物をたくさんぶら下げた女性が僕たちに加わり3人でいろいろと話をした。今の時期は本当は観光客が多いはずんだけど、テロとサーズという病気

のせいでぜんぜん観光客が来なくて困っていると二人は言った。一日に何も売れない日もあるのだそうだ。でも毎日場所代としてボスにお金を支払わなくてはいけないから生活はとても苦しいと言った。

彼女たちは3分置きぐらいに土産物を買ってくれと言ってきたけど、残念ながら僕の欲しいようなものはなかった。僕はちょっと待っていてくれと言って近くにあった売店で青い字でAQUAと書かれたミネラルウォーターを3本買ってきてメリーとニコライに一本ずつ渡した。でも二人はなかなか飲もうとしなかった。もしかすると家に持って帰って子供にでもあげるつもりなのかもしれないなと僕は思った。でも汗を掻いていたのは僕だけだったのだ。ただ今は飲みたくなかったのかもしれない。

僕はこれは二人のために買ったのだからとにかく飲んで欲しいと言うとようやく二人は了解したようだった。ニコライはペットボトルの蓋を開けると中の水を少し砂の上に垂らし、それから口を付けて遠慮がちに飲んだ。今のはなんだと僕が聞くと、これはヒンドウの慣わしで最初は神様に水をやってから、次に自分が飲むのだと言った。メリーは蓋を開けると一気に3分の1ぐらいゴクゴクと飲み手で口元を拭った。

僕は皮膚が焼けてきてヒリヒリしてきたのでそろそろ帰ると彼女たちに言った。気が向いたら明日も会いに来ると言うともメリーは本当のバリ人としての名前はニヨマンというだと僕に教えてくれて、

「ニホンゴ、ムツカシイ」と照れたように笑って見送ってくれた。

僕はゼット・インという宿に戻ってシャワーを浴びたけど水風船

を針で突付いたぐらいしか水が出てこなくておまけに水は生温かった。僕は砂が完全に洗い落とせていない汗だくの体でフロントに行き、シャワーの水は冷たいのは出ないのかと聞くと、

「ああ、昼間は暑いからね」と言われた。

僕は友人との待ち合わせのために7時ごろマクドナルドに向かった。不思議とどこの国に行ってもマクドナルドという店の雰囲気はあまり変わらない。大きな写真入のメニューが掲げてあって、銀色のカウンターがあり、ガラス張りの入り口があり、店員や椅子やテーブルは赤と黄色で彩られている。

「おい、ナガ」と嬉しそうに僕の名前を呼んだ僕の友人と僕はしっかりと握手をした。髪を短くして南国向きのヘアスタイルになり、もうずいぶんと日焼けしていた。日本でよく会う友人と海外で会うと、まるで前世で知り合って、そしてまた再会したような気分になる。周りの雰囲気や時間に対する感覚が日本にいるときと比べて違うからだろう。

「おい、おい、おい、ナガ、本当に来たな」と僕が知る限り彼の中で最も素直な笑顔で僕にそう言った。

「まあ、来ちまったもんはしょうがないですね」と僕も少し照れて言った。

ユウは昨日は空港に迎えに行けなくて悪かった、とりあえず飲みに行こうと言ってスイスイと歩き出した。彼に連れて行かれたレストランに入ると、薄暗い店内の中、コの字型になった清潔なソファに案内された。店内はガンガンに冷房がかかっていて、どこかで聞いたことのあるアメリカのロックが聞こえ、ネオン管で何かのビ

ールの看板が掲げてあった。最初のビールを一口飲んだ僕はようやく落ち着いたような気がする」とユウに言った。

ユウとは4年前にオーストラリアのアデレードという町の宿で出会った。その頃は毎日40度を超えるような熱さの続く日で、彼が僕の泊まっていた宿に来たとき僕はパンツ一丁の姿でチャーハンを作っていたらしく、絶対にコイツとは口も利きたくないと思ったら。僕は僕でがっちりした彼の体とウェーブのかかった長い茶色の髪を見て随分ちゃらちゃらしたサーファーが来たもんだなと思った。長い間海と接している人は潮の匂いや、波のリズムのようなものを体から発するようになる。ユウもそんな男だった。

「ナガ、バリはどうだ」

「アジアの匂いがする、それにとにかくクソ暑いですね。24時間毛穴が開きっぱなしです」と僕は言った。

「だいたいなんでバリに来る気になったんだ。俺は冗談半分にバリで小説でも書いてみればって言ったけど、本当に来るとは思ってなかったな」彼は大きくてごつごつした手でグラスを持ち上げたままそう言った。

「うーん、なんだか？予感？のようなものを感じたからかな」と僕が言うと、

「ナガのそういうのって当たるのか」とユウは聞いた。

「まあ、当たる時もあれば、当たらない時もありますね」

「なんだか超能力者みたいなこと言うな」とユウは言って僕のため

にビールのお代わりを注文してくれた。

「ユウさん、スキューバーの仕事のほうはどう、忙しい？」

「テロとサーズがあつたからな。観光客はずいぶん減つたよ。この島は観光客で成り立っているようなもんだからな、客が来なかつたら俺んこのショップもいつまでもつかわかないな」ユウは疲れたように眉をひそめて煙草に火を点けた。日本にいるときと同じく金色のマルボロ・ライトだった。

「おまえのほうはどうだ、小説書いてんのか？」

「いや、いや、ユウさん。全然書いてないですよ。僕はここに来る前にリゾートバイトに行つてましたからね。それどころじゃなかったですね。日本にいますとどうしようもなく下らないことを考えさせられちゃいますからね。とにかく時間の流れが速すぎるんです」

「ナガは頭がいいからな、考えすぎるんだよ」

「いや、いや、ユウさん、僕はべつに頭なんか良くないですよ」と僕は言つて手を横に振つた。「確かに僕は難しい本を読んだりするし、クラシックなんかを聞いたりするし、古いヨーロッパの映画なんかが好きだし、小説なんかを書いたりするけど僕はバカで弱い人間なんです。そんなややっこしいものを必要としなくても元気に生きている人はたくさんいるわけですから」

「でもおまえはそれなりに楽しく暮らしているわけだろ。まあ、俺も日本の社会の枠から外れちゃった人間だからな。人のことは言えないけど」

「でもね、ユウさん、人生ってのは結局楽しまなくちゃそこから意味というのは発生しないんじゃないかって僕は思っんです。そして楽しんでいけば基本的にはオーケーだと思いますが、楽しむということにはそれなりの能力がいるっていうことですね。能力って言うとし大げさだけど、素直に自分の持つっているものを引き出すって感じですかね」

僕がそう言うとうは少し考えるように深く息を吸い、店に架かったネオン管の文字を見つめていた。

「なあ、ナガ。俺は下らないフリーターをして、まだ金も貰えない小説を書いているおまえを多少なりとも認めてはいるつもりだ。でもおまえもいい歳だろ。もう少し現実的なものの考え方を始めたほうがいいんじゃないか」

「それができれば苦労しないですけどね」と僕は言って、ユウの腕にはまっている高そうな腕時計をチラッと見た。

「でも大半の人は気が付いているんじゃないかって思っんです。人生ってものはどう転んだところで下らないものだし、特に意味はないし、考えても結局そこは空っぽだし、正直者はバカを見るってことにね。同じことの繰り返しなんですよ」

「全くおまえは相変わらずだな」と言ってユウはニヤツと笑った。

僕はユウと別れ、宿に戻ったけどレストランで冷房に浸かった体

は外に出るとまた汗を掻き出した。汚いバスルームであまり足踏みしないようにしながら今度は水の出るシャワーを浴び、もう一度体を冷やしてからギシギシと音のするベッドの上で眠った。しかし、しばらくすると何かが僕の意識を揺り起こし、眠りと覚醒の狭間で蚊に刺されていることに気づいた。持ってきた虫刺されの薬を塗り終わるとすべてを失ったようにしてまたベッドに倒れこんだ。

ユウは仕事で昼間は会えないと言っていたので僕はまたビーチに向かうことにした。昨日と同じく喉の奥に砂が絡みつくような暑さだった。昨日メリーと会った辺りまで行くと、ニコライが何人かの物売りのおばさんたちと木の下影になったところ座っていて僕の名前を呼んで手招きした。メリーはどこだと僕が聞くと、もつと向こうにいとさらに左側を指差し、私たちは持ち場が違うのだと言った。僕は波打ち際を歩きながらさらに奥のほうに進み、声をかけてきた物売りのおばさんにメリーを知らないかと言うと、こっちにおいでと言って案内してくれた。メリーは波打ち際から遠く、木の下に置いてあったボロボロのベンチに座って、同じように腰に布を巻いた物売りのおばさんたちとしゃべっていた。

「ナガ来てくれたのね」とメリーは言って僕たちは握手をした。でもメリーはまだ他のおばさんたちとしゃべっていたので僕はティシヤツを脱いで海に入った。しばらく高い波に打たれたり、水面で浮かんだりしてから戻ってきててもメリーはまだおしゃべりを続けていた。僕が木の幹の陰になったところに腰を下ろすと、メリーがこっちに来なさいと言って僕は彼女の隣のベンチに座った。

「メリー、水でも飲まないか？」と僕が言つと、あなたが買いに行くと観光客料金で高いから私が買ってきてあげると言ったので僕は

彼女に一万ルピアを渡した。しかしメリーはお釣りを渡してくれなかった。二人で水を飲んでいると周りにいたおばさんたちや、おじさんたちがやってきて、箱に並んだ指輪を見せたり、タトゥーのデザインを見せにきたけどメリーが現地の言葉で何やら言うとなんらは去っていった。

僕はメリーを相手に下らない冗談を言っただけでしゃべっていた。木の下の影の中にいる僕とメリーの目の前では強烈な太陽に打たれて、みんなが輝いていた。空は青く輝き、砂浜はさらさらと輝き、海は波にあわせてのつぺりと輝き、赤いビキニをつけた白人の女性がトップレスになってさらに白い胸を輝かせて眠っていた。

日本人らしい男がサーフボードを抱えて海から上がってきた。その男にメリーは木でできた灰皿や小物入れみたいな小さな箱を差し出して、

「ヤスイ、ヤスイ」と日本語で言った。サーファーは僕の顔を見ると「こんにちは」と言ったので僕も「こんにちは」と言った。痩せて真っ白い体をした彼は濡れた髪から雫を滴らせながら木の灰皿を手にとると「これ幾ら？」とメリーに聞いた。メリーは大きさの違う3種類の木の灰皿を出して全部で6万ルピアだと言った。

「高いよー、2万、2万」と彼は言ったけど、メリーはもう一度6万だと言った。

「木でできた灰皿って燃えないんすかね」と彼は僕のほうを向いて言ったので、

「さあ、大丈夫じゃないですか」と僕は答えた。

彼はサーフボードを砂の上に大事そうに置くと、その横に自分も座り、大きさの違う3種類の灰皿をまじまじと眺めていた。僕がメリーのほうを向くとメリーは人差し指を縦にして唇の上に当てたので、僕は彼に気づかれないように小さく二回頷いた。

「観光ですか？」と僕は彼に聞いた。

「ええ、一週間だけなんですけど、サーフィンしに来たんですよ。たまたま休みが取れたんっすよね」と彼は灰皿を持ったまま答えた。

「ドラックとかやるんですか？」と僕が言うと、

「いや僕はあんまり」と彼は答えた。「でもこのクタっていう町では買わないほうがいいらしいですよ。偽物も多いらしいし、警察がおとりで売ってたりするらしいですからね。買った途端に手錠を掛けられるなんてこともあるらしいっすね。日本人もけっこう捕まっているみたいですよ。」と彼は僕に言うてから「ねえ、三つもいらないから二つならいくら？」とメリーに聞いた。メリーは二つなら4万だと言った。

「えー、3万、3万」と彼が言うとメリーは3万5千と言った。彼は3万5千をメリーに払うと僕にそれじゃあとと言って帰っていった。

メリーは余った灰皿や小物入れの箱をしまいながら僕の方を向いてふんふんと満足げに頷いたので、僕も笑って頷いた。僕はメリーにこれは幾らと試しに灰皿の値段を聞いてみたら、あなたならひとつ一万でいいと言った。でも僕はいらなと言った。

しばらくするとメリーはこの辺をぶらぶらしなくちゃいけないからごめんねと言って立ち上がった。僕は彼女の腰にぶら下げたお土

産の束からキーホルダーを指差して、これは幾らと聞いた。彼女は「これが欲しいの?」と聞いたので僕が頷くと、彼女は束を揉み解して僕に差し出した。

「幾ら?これ」と手に持ったキーホルダーを指差すと、彼女は首を横に振った。そして僕のライターを取るとそこにビーズでできたライターカバーのようなものをはめ込んでくれた。

「バリ、コンドーム。バリ、コンドーム」と言いながら彼女は笑って「オミヤゲ、オミヤゲ」と彼女は僕にその二つを手渡した。どうやらこれは贈り物みたいだなと僕は思った。僕は両手を合わせてバリ式のお礼をしてから、気が向いたらまた来るよと彼女に言って宿に戻った。

夕方になるとユウが僕の宿に来た。僕は部屋の前に置いてある椅子に座って音楽を聴いていたところだった。

「おいナガ、おまえ飯食ったか?」

「いや、まだ食べてないですけど」

「いつも何食ってんだおまえ?」

「よくわかんないんで、その辺の安そうな店に入ってチャーハンとか焼きそばみたいなもん食べてますね」

「ふーん、まあ、おまえらしいな。今日は違ったものの食べに行こうか」

ユウは僕を屋台に連れて行ってくれて「サテ・キャンビン」というヤギの肉を串焼きにしてココナッツとピーナッツソースを混ぜたようなものをつけて食べた。その店では観光客は僕たちだけでバリ人のグループが何組かいた。

「バリではへたに高いレストランに入るよりもこんな感じの汚いところのほうが飯はうまいんだ」とユウは言った。「まあ、高いせいもあるけど、現地の人間はレストランになんてまず行かないならな。結局どこでもそうだけど、その土地に根付いたものつてのが一番うまいんだ。でもバリ人と違って俺たちはここでも観光客料金を払わなくちゃいけないけどな」

ユウはご飯代を払ってくれて、また昨日と同じような感じのあまりバリらしくない清潔で冷房の効いたカフェに連れて行ってくれた。僕は「ビントアン」という緑色のビンに入ったビールを注文し、ユウはカプチーノを注文した。ユウはカプチーノを一口飲むと「まずい」と言った。確かにバリでカプチーノが有名だとは聞いたことがなかった。

「おう、ナガ、俺は明日から仕事が入った。何日かアメッドというところに行つて客と潜つてこなきゃならん。おまえはどうする？ なんか俺のアパートに泊まってもいいけどな」ユウはバリ人の月間平均収入の4倍ぐらいする綺麗で冷房のついたアパートを借りているらしかった。

「いや、ユウさん、有難いですけど、僕はこのクタつてところを出ようと思っんです。毎度のことですけど僕は観光する気はあんまり

ないですからね。この町は暑いし、人は声かけてきてうつうつしいし、もうちょっと静かなところに行こうかなって思っんですけど、どっかい所知らないですか」

「そうだな、海外に来て一番の贅沢は何にもしないでのんびりすることだって言うしな。うーん、おまえならウブドってところがいいんじゃないか」

「ウブド？ですか」

「ここからバスに乗って一時間ちよつとかな。俺は行ったことはないんだが芸術家が多く集まるところらしいな。画家とかミュージシャンとかそういうの。おまえ向きじゃないか」

「そうですね、そんならそこに行ってみようかな」

「それとおまえ、またガイドブックなんて持ってきてないんだろう」

「あんまり好きじゃないんですよ、そうゆつの。行きたいところは自分で決めるし、旅行なんて気の向いたときに気の向いたところに行けばいいと思ってますからね」と僕は答えた。ユウは持ってきた鞆の中からガイドブックを一冊取り出した。

「俺のシヨップで余っていたやつだ。やるから持ってけ。一冊あると何かと便利は便利だ。それに後ろの方にインドネシア語も載っているからな。少しはインドネシア語でも覚えたらどうだ。ここじゃあ、けっこうまともなレストランとかカフェに行かないと英語も満足に通じないからな」

僕は荷物が増えるのが嫌だったけど、せっかくだから一応そのガイ

ドブックを貰っておくことにした。

「おまえはけっこう旅慣れているから大丈夫だとは思うけど、あんまりバカなことはするなよ。バリはそんなに治安も悪くないけどな。それとな、ナガ、沈没だけはするなよ」

「チンボツ？沈没ってなんですか？」

「よくいるだろインドとかそういうところに。もう日本に帰らなくなつて、そのまま不法滞在してずーっと何十年も住んでいる人とかさ」

「まあ、聞いたことはありますね」と僕は答えた。

「ここバリってところは風水で言えば地球の風穴という場所にあたるところらしい。俺も人から聞いたことだから詳しいことはわからんけどな。でもとにかく行くところに行けばそうゆう？土地の力？っていうものがあるところがあるらしい。密度の濃い体にぴったりと合う水が湧き出るところとかな。それにバリって神々の国とも呼ばれるしな。俺はよくわからんがきつと何か抜け出せなくような力がここにはあるんだろ。そしておまえみたいなまだ光の当たらない芸術家はよくバリに来ると言われる。そしてすでに光に当たっている芸術家はハワイに行くということらしい」

「へえー、なんとなく来てみたけど、なかなかおもしろそうなんですね」僕はビンタンというビールの3本目に差し掛かっていた。確かにドライな感じがして今ここにいる自分とぴったり合っているような気もする。

ユウは最期に母親だけにはちよくちよく連絡してやれよと言って

僕と別れた。

次の日、僕はバスターミナルからウブド行きのバスに乗った。少しメリーのことが気になったけど、二ヶ月もバリにいる予定だったからまたクタに戻ってくることもあるだろうと僕は考えていた。しかし僕がメリーとは会うことはもうなかった。

運命と言う名の齒車は次の齒車をしっかりと捉え、結び付き、そして次の齒車はギシギシと大きな音を立ててゆっくりと回転を始めていた。僕はその時にはそんなことが行われているなんて夢にも思わなかった。しかし、それは我々の知らないところでしっかりと動いているのだ。

バスといってもせいぜい15人ぐらいが乗れるような代物で、すでに20年は走っているんじゃないかというほど古びていた。僕が席に座ると膝が前の座席にぶつかった。僕の他にはヨーロッパ系のカップルと見るからにオーストラリア人というがさつな男の二人組が最後尾の席で窮屈そうに足を広げて座り、アメリカ人ばい瘦せたおばさんが新聞を広げて読んでいた。バスが走り出すと、その振動で僕の隣にあった横開きのガラスの窓がガタガタと勝手に開いた。そこから入り込んでくるいろいろな匂いの混じった風で僕の髪はばたばたと舞い上がった。

バスが進むにつれ信号が少なくなってきた背の高い建物がなくな

り、排気ガスがなくなり、だんだんと視界も広がっていった。野原や、田んぼ、牛なんかの姿も見える。お父さんとお母さんと、子供が二人乗ったバイクが僕の乗ったバスを追い越していった。走っている車は日本車が多かったけど、青い空が、ゆったりとした空気と時間が、そして開けた土地がバリを物語っていた。道路に並ぶ看板も日本のようにでかかとしたものはなく、アルファベットで店の名前が書いてあるだけだ。二車線になった大きな道路の信号で止まると、真っ黒で頬のこけた男が窓の間から新聞を差し入れてきた。

バスは林を繰り抜いたようなくねした山道をしばらく走り、少しかだけ店が立ち並ぶ通りでバスは止まった。クタと比べると町に着いたという印象はあまりなかったけど、どうやらここがウブドラしいと僕は思った。リュックを担いでバスを降りようとするバス出口にはすでに5、6人の男の姿が見えた。案の定、宿の勧誘の男たちだった。僕は彼らを振り払うようにバスを降り、そして町の中心とは逆の南に向けて歩き出した。僕はできれば人の多くない静かな場所に泊まりたいと思っていた。それにユウに貰ったガイドブックで一番安い宿を調べておいたけど、それはずいぶん南のほうにあった。

一分も歩かないうちにまた一人の男に呼び止められた。30台半ば、短い髪はカールして巻き上がり、青黒いダランとしたポロシャツを着ていた。見た途端に頼りなく、困り果てた様子が伺えた。こんな男が東京駅にいたらこっちから声をかけてあげなくなるくらいだった。

「ミスター、宿を探しているんだろう？」言われるまでもなく、僕の担いだ大きなリュックを見ればそれくらいわかるのだろう。でも僕はもう行き先は決めてあるから大丈夫と言って足早に通り過ぎようとした。男は僕と並んで歩き、写真を見せてきた。写真はいつ頃

取られたものなのかもわからないぐらいに色がぼんやりとしていたけど、どうやら部屋の中と部屋から見える景色が写っているみたいだった。

「どのくらいウブドに泊まるんだ？」と男は聞いてきたので、たぶん一ヶ月はいると僕は答えた。

「一ヶ月？一ヶ月も？ミスター、ミスター、とにかく宿を見てくれないか」

僕は「ノー、サンキュー、ノー、サンキュー」と言い続けたけど、男は僕の行く手を遮るように僕の前に立ち、少し前かがみになりながらうちの宿はすぐそこなんだ、本当にすぐそこなんだ、見るだけでも来てくれないかと何回も言った。僕は「ノー、サンキュー」と言い続けながら歩いていたけど、男は僕の腕を取ると「ここ、ここ」と家の間にある路地を指差した。

路地からは小さな商店が見え、その軒先にはメガネをかけ、バリ人にしては珍しいぐらゐに丸々と太ったおばさんが座って葉っぱを編んでいたところだった。僕が「ハロー」と言つとおばさんは顔を上げて「ハロー」と言った。

「ミスター、プリーズ！ミスター、プリーズ！」と男が情けなく言うので、まあ見てみるもの悪くないなと思って僕はその路地に入った。商店を過ぎるとそこからは田んぼになっていて、その間を石で作られた細い道がひとつの家に向かって延びていた。男に呼ばれてその道を進み、田んぼの中に浮かんでいるような家に向かった。部屋はひとつの家を均等に二つに割って、左右対称に二部屋作ってあるといった感じだった。部屋の入り口は一段高くなったテラスになつていて、真っ白でピカピカに磨かれたタイルは太陽の光を反射し、

3畳ぐらいの大きさのテラスは隣のテラスとコンクリートの壁で遮断されていた。また竹でできた椅子が二つとその間にテーブルが置いてあった。彼がサンダルを脱いでテラスに上がったので、僕もサンダルを脱いで裸足でテラスに上がった。部屋の中はクタに泊まっていた宿と比べるとびっくりするぐらい綺麗だった。床の冷たいタイルは裸足で歩いても全く不潔感がないぐらいピカピカだったし、クリーム色の壁はヘラの形が僅かに残っているぐらい塗りたてのような気がした。12畳以上はありそうな広々とした部屋にはキングサイズのベッドと申し訳なさそうなクローゼットと鏡台が置いてあった。なんといっても天井が高いのは開放感があってよかった。竹網の天井には大きなファンがぶら下がっていた。バスルームも綺麗に掃除されているようだった。僕はリュックを下ろしてテラスにあった椅子に座った。男はテーブルを挟んで僕の横に座った。テラスに座ると目の前には小さな庭とその向こうにグラウンドぐらいの大きさの田んぼが広がっていた。遠くにヤシの木が並んで立っているのが小さく見える。深く遠い空が広がり、低い雲が風に流されて右側に進んで行くのがわかった。

「部屋はすごく綺麗だ、一泊幾らぐらい？」と僕は聞いた。

「本当は、6万なんだけど、あなたなら5万でいい、朝食も付ける」と男は言った。

「僕はここなら一ヶ月泊まってもいいと思う。もうちょっと安くならない？」

「オーケー、フレンド。4万、4万でいい」とさらに焦ったように宿の男は言った。

一日4万だとして、30日で……120万。だいたい日本円

で1万8千円ぐらいだった。

「ねえ、朝食はいらないから3万にならない？」と僕は聞いた。僕がガイドブックで調べた一番安い宿は一泊3万で、朝食込みで、さらに長期割引があると書いてあった。彼は両手を膝の上に置き、左足を揺すりながらしばらく遠くを見つめて考え込んでいた。

「オーケー、フレンド。私は日本人が好きだ」彼は少し落胆したようにそう言った。「3万、3万でいい。でも他の人には絶対に内緒にしておいてくれ。あなただけのスペシャルプライスだ」彼は思い切った決断をしたようにそう言った。しかし僕は一ヶ月も泊まる宿をこんなに簡単に決めるもいいものか少し迷った。僕はここの宿は気に入ったけど、他のところも見てみたいので後でまた来るよと言った。

「オー、ミスター、プリーズ」と彼はいじけた少年のような顔つきになってそう言った。僕はしばらく黙って考えていると、彼はまだ足を揺すって落ちつかないそうにしていた。

「ねえ、名前はなんていうの？」と僕は聞いてみた。

「マイ、ネーム、イズ、ニョマン」と彼は答えた。ニョマン？と僕は思った。そういえばメリーも本当の名前はニョマンだと言っていたなと僕は思った。これも何かの縁かもしれないと僕は思って、

「オーケー」とニョマンに言った。

「ナイス、フレンド。ナイス、フレンド」とニョマンは言って笑顔で僕と握手をした。それからしばらく息をするのを忘れていたんじゃないかというほど大きなため息をついてもう一度僕に微笑んだ。

ニヨマンはこの宿のカードだといって名刺のようなものを差し出した。そこには「チンタ・バンガロー」と書いてあった。

僕は早速荷を解き、シャワーを浴びた。昨日のシャワーと比べると丁寧に体を洗ったせいかもしれないけど、幾分水の比重が重く感じられて肌がしっかりと水を吸い込んでいるような気がした。町の様子を見に行ってみようかなと思って外に出ると、テラスにひとりの青年が座っていた。椅子ではなくテラスのタイルの上に直に座り、両手を後ろに下げて体を支えていた。

「こんにちは」と彼は日本語で言った。「こんにちは」と僕も言った。

「わたし、なまえ、パンデイ、です」と彼は言った。何をしに来たのだろうと思ったけど僕も彼と同じようにタイルの上に座った。彼の横顔を見てみたけど、切れ長の涼しげな目元にすっきりした顎のライン、癖毛のないまっすぐな髪は左右に別れて、サングラスを頭に掛けていた。

「おなまえは、なんと、いうの、ですか？」

「僕はナガといいます」僕は彼に合わせてわかりやすい日本語を使った。パンデイという男は見たところ20歳ちよつとぐらいかなと僕は思った。口元には少しクールな微笑が浮かんでいた。バリ人の中ではトップクラスのルックスだろうなと僕は思った。

「わたし、にほんご、べんきょう、したい、だからね。すこし、おはなし、だいじょうぶ？」

「うん、いいよ」と僕は答え、煙草に火を点けた。彼にも一本薦め

てみたけど、頭を少し下げて、手を横に振った。

「ナガさん、バリは、はじめて、ですか？」

「うん、始めて」

「わたし、につぼんじん、ともだち、いっぱい、いる、だからね。もし、ナガさん、どこか、いきたい、わたし、がいど、できる、だからね」

「ありがとう。でも特にいきたいところはないんだ。小説を書きに来ただけだから」

「しょうせつ？ストーリー、ですか？」

「うーん、どうかな、そんなに立派なものじゃないよ」と僕は答えた。

「バリの、ものがたり、かく、ですか？バリは、にほん、と、ぜえんぜえん、ちがう、だからね。なにか、わからない、こと、あれば、わたしに、なんでも、きいて、ください」

僕は「ありがとう」と答えたけど、今のところは何を書くかまだわからないと言った。

「ナガさん、かつこいい、だからね。かのじょ、いる、だともう」彼は僕をにやにやして見ながらそう言った。僕は別にかつこよくなかないし、彼女もいないと答えた。そしてどうしてバリ人はみんな女はいないかと聞くんだとパンディに言った。

「ブンカ、だからね。文化。バリは、すごく、オープン、だからね。オープン。みんな、なかよく、したい、だからね。バリじん、つぼんじん、すき、だからね。はだ、しろい、みんな、すき。バリじん、はだ、くろい、だからね」

「ふーん、別に黒くてもいいと思うけどな」と僕は答えた。

僕がパンディと話していると宿の主人のニヨマンがポットに熱い紅茶を入れて持ってきてくれた。顔には満面の笑みが浮かんでいた。パンディはニヨマンと目が合うと「ラッキー、メン」と言った。紅茶と一緒に砂糖の入ったビンも一緒に持ってきてくれたけど、よく見るとその中には小さな蟻がうじゃうじやと蠢いていた。僕は蟻が入っていると言うとニヨマンはスプーンで蟻を取り除いてくれた。でもさすがにその砂糖を入れる気にはならなかった。

「ナガさん、もう、みじゅあび、した？」

「シャワー？うん、暑いからね。一日に2、3回はするよ」と僕は答えた。

「バリじん、みたいね、ナガさん。バリじんは、みんな、まいにち、さんかい、みじゅあび、を、します。シンコウ、だからね。信仰」

それから僕はパンディという男とずいぶん話をした。パンディはバリのヒンドウーのことや、バリ人の生活のことや、バリの食べ物についていろいろなことを教えてくれた。彼はすぐ近くで木彫りの店を経営しているので、良かったら遊びに来てくれと言って帰っていた。

僕はこんなに長くバリ人と話したことは始めてだったけど、彼を

どのくらい信用できるのかまだわからなかった。彼らの欲望の矛先が僕の何に向けられているのか僕にはわからなかったからだ。欲望というのは時に人を傷つけ、何かを抉り出し、人の？核？のような部分に触れたりする。そして心を閉じていれば閉じているだけ他人の欲望は中に入りにくくなる。でも僕はできるだけ心を開いている。いろんなものを素直に見て、触れて、感じてみたいと思っていた。

僕はスーパーマーケットに出掛けて、トイレットペーパーや、ティッシュや、飲み物、煙草なんかをまとめて買ってきた。一ヶ月この宿にすることを決めたのだから最低限の準備は必要だった。僕は持ってきた本をクローゼットに入れ、服を置く場所を決め、洗面用具をバスルームに並べ、一息ついてからベッドの上にノートパソコンを乗せて電源を入れた。書き物用の机が欲しかったけど、ないならしょうがないなと思った。

ようやく小説に取り掛かる時が来たようだなと思って、煙草を吸いながら画面をにらんだ。暗くなった外からはカエルの鳴き声が絶え間なく鳴り響き、天井からはファンが風を切る音が僅かに聞こえた。僕の吐き出した煙は形を現すことなくすぐに風が部屋の中に溶け込ませていった。カエルは鳴き続け、ファンは回り続け、僕は煙草を吸い続けた。

しかし一文字も僕の中から吐き出される言葉はなかった。

どれだけ時が過ぎようが世界にはほとんど違いというものがない。ただ部屋を灯す裸電球のぼんやりした光は変わることがなかったし、ただ灰皿に吸殻が溜まっていただけだった。電話もないし、テレビもない、時計が時間の経過を告げることもなかった。僕と何かを結び付けるものは何もなかった。夜の闇の中に響き渡るカエルの鳴き声と、僕に降りかかってくる天井からの風、そして燃え上る煙草

の煙だけが僕に時間というものが存在するのだということを伝えていた。そんなシンプルな環境で僕は始めてずいぶん遠くまで来たんだなと思った。そして僕には特にやらなくてはいけないこともないのだと思った。必要があればこそ人間は何かをしなくてはいけないのだ。無理に必要性を作る必要もないと僕は思った。僕はジューズを2本飲み、煙草を10本吸った。

しかしいくらパソコンを眺めていたところで何かが始まるわけではなかった。でも何かをしなければ僕の存在が消えてなくなるというわけでもない。僕はベッドの脇にあった電気のスイッチを押した。永遠に続くかのような風と声は変わることがなく、僕は何も変わらない世界の中心で何も変わらない夢の世界へと導かれていった。

次の日、目を覚ましてから一応町のことを調べてみようかなと思ってガイドブックを見ると美術館があるのでそこに行ってみることにした。宿を出る時にニョマンがどこに行くのと聞いてきたので、美術館に行くつもりだと言うと、バイクで送ってあげるとニョマンは言った。100CCぐらいのカブのようなバイクだった。そのバイクは見事なまでに隅々まで使い尽くされていた。たつぷりと長い時間がへばりつき、あちこちが錆付いていた。シートはめくれ上がって中のスポンジがはみ出し、彼が長年握り締めてきたグリップのゴムは千切れてボロボロになっていた。彼がキーを入れて、エンジンがかかったことが僕には不思議に思えたほどだった。でもその分このバイクは彼の生活をしっかりと支えているのだということがわかった。

僕が彼の後ろのシートに座ると僕の重みでがっくりと車体が下がり、本当に走れるのだろつかと僕は思った。でもバイクは僕と二ヨマンを乗せて元気に路上に躍り出た。風が勢いを増し、僕は前にいる二ヨマンの脇の匂いのような、そしてまた「アジアの匂い」に包まれた。町を駆け抜ける風は軽く、僕の中に溜まった何かをスルスルと奪っていった。

バイクで走り抜けたただけだったけど、ウブドという町はあまり発達していないようだった。背の高い建物もないし、自動ドアもない、ガラス張りの綺麗な店も少ない。うらぶれた商店が並んでいるだけだった。クタに比べると道幅も広いし、車はほとんど走っていないくてバイクばかりが目についた。

美術館に展示してあった絵はあまり興味をそそるようなものはなかった。主にヒンドゥー教の絵が多く、僕にとってあまりひきつけられるようなものはなかった。美術館はがらがらだったけど、そこで中年の男性と女性の二人組みに出会った。女性のほうは30歳前半ぐらいで黒のティシャツに柔らかな生地のジーンズを履き、男性のほうは30後半ぐらいでバリ人ほど色は黒くなかったけど、片目が少しつぶれたようだったのでどこことなくさそうに喋った。どちらも少しふくらした体型をしていた。

僕がぶらぶら絵を見ていると、そのうちの女性に声をかけられた。彼女の肌は色白なほうで、髪が長く、最初見たときは中国人なのかと僕は思った。彼女は学校で絵の先生をしているのだと言った。結構使い慣れた感じの英語を話し、絵の勉強に来ているのだと言った。美術館の庭に出て3人で話していると、彼女はもしかしてあなたは日本人なんじゃないと聞いてきた。僕がそうだと答えると二人は少し驚いたように顔を見合わせて話を始めた。

我々二人は兄弟なのだが、もうひとり下に妹がいて今度日本にこうとしているのだと言った。その二人組みは身なりからしても現地のバリ人よりはきちんとして清潔な格好をしていた。

二人は日本のことについていろいろと聞いてきた。日本に行くのにはどのくらい金がかかるのか、家賃はどのくらいなのか、日本人は英語がどのくらいしゃべれるのか、治安はいいのか、人々はどんな暮らしをしているのかなどについて。我々はバリ人ではなく、ジャワ島から来た移民で決して貧しいわけではないけど、金持ちというわけでもない。でも日本の物価はとても高いと聞いているから心配だと言った。妹は日本に語学留学に行きたいということらしくかった。日本語が喋れるようになれば、日本人観光客相手にお金のいい仕事に就くことができるし、そういう仕事はバリではエリートの種類に入るらなかった。でも妹は日本に知り合いがいるわけでもないし、日本語もぜんぜんしゃべれないと言った。僕は日本ではアパートを借りるにしても外国人ならいろいろと面倒なこともあるだろうし、学校を探すのも大変だろうと言った。僕がそう言うとなんか妹が日本に行くことを母親がとても反対していて、私たちとても心配だと言った。そして申し訳ないのだがこれから一緒に家に来てくれないかと言いだした。あなたが来てくれて母親と妹に話をしてくれば、母親もきっと安心できるだろうし、妹も日本のことについて知れたがつていいるらしかった。日本に帰ってまで迷惑をかけるつもりはないから、話だけでもしてやってくれ、ご飯でも一緒に食べようと言った。

僕はそれについて考えてみた。もちろん僕には予定もなかったし、時間もあつた。でもはつきり言つて面倒くさかつた。僕はちよつと忙しいし、日本人なんてバリにはたくさん来ているし、別に僕じゃなくてもいいんじゃないかといって断ろうと思った。でも彼らは他の日本人は英語が全然できないから僕に来て欲しいと言つた。付け

加えて、私たちも日本語は全然喋れないと頼りなさそうに言った。僕は、まあ、しょうがないなと思った。僕がそう言うとおばさんは携帯電話でどこかに連絡をしていた。

二人は車に乗って美術館まで来ていた。そして家はクタにあると言った。僕は昨日クタからウブドに来たばかりだと言うと、帰りはちゃんと送ってあげるからと申し訳なさそうに言った。

表に停まっていた彼らの車は新車に近い日本車の4WDだった。僕が助手席側の後部座席に座り、ドアを閉めると僕は不思議な気分になった。新車独特のアルコールのような匂いが漂い、そして車内は完全に僕の記憶の中にある日本だった。空港から乗ったタクシーの中ではそんなことは思わなかった。バリの匂いがし、バリの時間を吸い込み、バリの汚れが付いていた。この車に乗っていると窓から見える景色は全然違うけど、シートの座り心地や、エアコンの風、そして清潔さ、バりに輸入された日本という空間だった。僕は日本人として日本に包まれ、そしてまたクタに向けて出発した。

車が走り出すと僕の前の助手席に座っていた女性は僕の隣に座ってもいいかと言って助手席と運転席のシートの間を窮屈そうに潜り抜けて僕の隣にやってきた。

「私はニーナ、彼はジェフィ、よろしくね」と言って僕らは握手をした。アジア人に白人みたいな名前がついているのを不思議に思ったけど、そういうこともあるのだろうと僕は思った。ジェフィが運転する車は細い山道をぐねぐねと走っていた。

「ジェフィはいい歳をして、彼女もいないのよ。日本人が好きだから誰か紹介できる人いない」とニーナが少し上ずった声で冗談ぽくそう言った。ジェフィは一瞬後ろを振り向き、潰れた目でウィンク

をした。僕は「うーん、わからないな」と答えた。

「ねえ、ねえ、ナガは日本ではどんな仕事をしているの？」とニーナが聞いた。色白の彼女は細い金のネックレスをしていた。

「僕は小説を書いているんだ。と言ってもそれでご飯を食べているわけじゃないんだけど」

「小説？どんな話を書くの？」

「うーん……」僕は少し考えたけど、なかなかうまい言葉が出てこなかった。

「ただ僕は？場所？を提供するだけなんだ」と僕は言った。「たとえば……」僕は日本車の窓に映っているバリの景色を指差して言った。

「この車のことや、ニーナのことや、ジェフィのことや、あの空や、この広々とした田んぼのことや、ほら、ほら、あそこにいる自転車に乗ったよぼのおじさんのことや、あのー、ほら、ヤシの木の茂みで遊んでいる色黒で元氣そうな子供たちのこと。世界つてもには必ず中心の軸というものがあるからそれを素直に書くだけかな」と僕は言った。隣に座っているニーナは火星人を見るような目付きをして僕を見た。

でも車内は和やかな雰囲気包まれていた。ニーナは私たちの妹は22歳で痩せてて、すっごくかわいいのよ、手を出しちゃだめよ、などと言って僕をからかったり、僕はニーナがまだ独身であることがわかると「僕と今夜どうだい？」なんて冗談を言い合っていた。

一時間ぐらいすると車は住宅地の細い路地を少し中に入っていつて家の前で止まった。ジェフィがクラクションを鳴らすと疲れた顔をしたバリ人らしきおばさんが出てきて家の門をガラガラと開け、そして中に入った。

家の中は広々とした作りになっていた。リビングには何枚も絵が飾られ、玄関近くにあるテレビの前に置いてあったソファには男がひとり寝ていた。家に入るとニーナが、

「ごめんなさい、叔父が寝ているから静かにしてね」と小さい声で言った。リビングの奥にあった円形のテーブルに腰掛け、3人で食事をした。僕たちが座っているとバリ人のおばさんが料理を運んでくれた。僕は「妹さんは？」と聞くと、今母親を迎えに行っているからすぐに戻ると言われた。叔父が寝ているせいもあって食事中はあまり話をしなかった。叔父は夜から朝まで働いているので、昼間はいつも寝ているのだとニーナは言った。

食事が終わった頃に叔父が目を覚ましてテーブルにやってきた。彼は寝起きで眠そうな顔をして、しょぼしょぼの目を何度も瞬きしていた。ニーナとジェフィが僕を紹介した。妹のために話をしに来てくれたのだと言うと、その叔父はありがとうと言って僕を歓迎してくれた様子だった。

僕がテレビの前のソファに座っていると叔父が隣にやってきて一緒に煙草を吸った。叔父はベンと名乗った。小柄な男で50近い年齢でジェフィやニーナと違って痩せていた。妹のためにわざわざ来てもらってありがとうと繰り返し返した。煙草の吸い方や、喋り方からしてどちらかというと器用なタイプに見えた。一貫してトーンの変

わからない流暢な英語を落ち着いて話し、どことなく何かに対して自信を持っているという雰囲気があった。そしてまた妹のことについて話し始めた。日本に行きたがっているけど母親が反対していること、それほど経済的な余裕があるわけでもないと言った。ベンはクタにあるカジノで観光客を相手にディーラーをやっているのだけど、一ヶ月の給料は70万ルピアだといった。大体一万円ちょっとぐら이다。実は母親は体の調子が悪くて手術をしたいのだとベンは言った。みんな働いてそのお金を稼がなくてはいけない、妹が日本に行つて日本語ができるようになればいい仕事に就けるからお金も入ってくるだろうと言った。妹もそのために日本に行くのだが母親が反対しているから「ほんとうにもう」と言つてベンは白人がよくやるように両手を広げて僕に微笑みかけた。

「どこの国でも母親が子供を心配するのは同じでしょうね」と僕はベンに言った。

「全くだ、しかしあいつは日本に友達もおらんし、日本語もできないんだ。俺だつて心配している。俺は仕事で日本人を相手にすることもあるが、こつやつて話すことはないからな。いや、いや、ナガに来てもらつて本当に助かった」

ベンはリモコンでテレビのスイッチを切った。僕は時間もあるし、全く気にしなくてもいいと言った。ニーナがやってきて僕に缶コーラをくれた。

「これでも飲んで待つてね。もうすぐ妹が帰つて来ると思うから」そう言つて奥のほうに消えていった。ガランとしたリビングには僕とベンだけになった。テレビの隣にある扇風機が首を振つて部屋の空気を循環していた。

「ところでな、ナガ」ベンは新しい煙草にマッチで火を点けた。浅黒い皺の刻みこまれた顔をしかめて煙を吸い込むと話を始めた。

「せっかく妹のために来てもらったわけだから、何かお礼がしたいと言つても家には何かをプレゼントできるようなものはない。それでな、俺はディーラーをやっているんだが、ナガはギャンブルはやるのか？」

僕は昔時々やったけど、今はもうほとんどしないと答えた。

「うん、それはいいことだ。はつきり言つてギャンブルなんてやるもんじゃない。ディーラーの俺が言うんだからこれは間違いない。時間と金の無駄だ。大体のものはそうだが、最終的には絶対に何かをけし掛けた側が儲かるようになってるんだ。これは決められたシステムなのだ。そして俺みたいにディーラーなんかをやっているのもダメだ。上の者だけがごっそりと取り分を持っていくからな。どうだ、それは日本でも同じか？」

僕は日本でもそれは変わらないと言つた。

「そうだろう？だから俺たちみたいなのができるのはそのガチガチのシステムにちよつと穴を空けるぐらいしかできないんだ。？隙間？を伺うぐらいしか。俺の言っていることはわかるか？」僕はわかるというふうに頷き、コーラを飲んだ。そしてハンカチで汗を拭いた。

「ナガ」彼は僕の注意を戻すために僕の膝をちよんちよんと叩いた。「ブラックジャックをやったことはあるか？」

僕はオーストラリアのカジノでブラックジャックにのめり込み、持

っていた金を全部使って途方にくれたことを思い出した。

「俺はブラックジャックのディーラーをやっているんだが、あれはひどいゲームだ。そりゃあ、勝てる時もあるかもしれないが6対4で主催が勝つことになっている。スロットはもつとひどい。あれは8対2で主催が勝つ。絶対にスロットだけはやってはいけない。俺の言っていることはわかるか？」僕はまた頷いた。

「ギャンブルというのは確率で成り立っているビジネスだ。誰かがたまに勝負に勝っても確率に勝てるものはいない。それはやる前から決まっていることなんだ。わかるか？絶対にギャンブルはやるものじゃない。おれは30年ディーラーをやっているが、これは間違いない確かなことだ」

僕は妹はまだ来ないのかなと思いついていたけど、ベンは僕が彼の話の続きを理解するまで真剣に話しているようだった。

「それでな、ナガ。でもひとつだけ必ず勝てる方法がある。それを教えてやろう。それがプレゼントだ」

「必ず勝てる方法？」と僕は言った。

「これは誰にも話してはいけないぞ。ナガは妹のために来てくれたから、特別に教えてやる。ちょっと俺の部屋に来ないか」そう言っ
て彼は立ち上がった。彼の部屋はリビングの奥のほうにあった。部屋の入り口はドアではなくカーテンで仕切られていた。

彼の部屋に行くときにベンがニーナに「せっかく来てもらったんだから、例のやつを教えてやろうと思つてな」と言うと、ニーナはにっこりと僕に微笑んだ。

ベンの部屋は窓際にベッドがひとつあり、中央にテーブルがあるだけというシンブルな部屋だった。彼は壁にかけてあった折りたたみ式の椅子を広げて僕に進めてくれた。ベンと僕はテーブルを挟んで向かい合わせに座った。

彼はランプを一束出して、ディー役になりブラックジャックをやってみせた。裸の女が性器を丸出しにした写真が張ってあるランプだった。

「うん、ナガはブラックジャックができるらしいな」何度かやってみてからベンは僕にそう言った。「それでな、ナガ」ベンはランプを広げたままそう言った。

「我々は次に来るカードというものを知らない。だから勝ったり負けたりする。我々が未来を知らないのと同じように勝負というのはある意味ではその先にある答えを求めるようなものだ。それを知りたいという欲望、次に何が起こるのかわからないという不安と緊張、それがギャンブルの魔法であり、おもしろさだ。俺の言っていることはわかるか？」わかると僕は答えた。

「しかし、俺には次にどのカードが来るのかわかる」とベンは自信たっぷりに言った。「俺も伊達に30年もディーラーをやっているわけじゃない。それなりにテクニクというものがあるんだ。やってみるか？」と彼は言っただけでブラックジャックの続きをやった。僕が次のカードを要求する人差し指でテーブルをトントンと叩くサインを出す、彼は「3」とか「10」とか「5」と言っただけでカードを僕に渡した。実際に彼の言っただけのカードが出てきた。

「どうだ。ある意味では未来というものはすでに存在するものなん

だ。元々それはどこかにあるものなんだ。ただそれを知らないから迷ったり、考えたりする。しかし答えはすでにあるものなんだ。だから次にどんなカードが来るのかわかっていれば勝負に負けることは決してない。必ず勝てる。俺の言っていることはわかるか？」わかると言って僕は頷いた。

「そこでだ、ナガ」ベンは少し身を乗り出してそう言った。「俺とナガとでチームを組むんだ。そして俺がナガに次のカードのサインを出す。他の人には怪しまれないように秘密のサインを決めておくんだ。指一本が2のサイン、二本出すと4、四本出すと8、そこに親指を出すとプラス1だ。例えば手のひらを広げて出すと9のサインだ。人差し指と親指では3のサイン。そして握ってだすと10のサイン。俺の言っていることはわかるか？」僕は実際に自分の手を使ってみて考えた。しばらく頭の中を整理してから片手で1から10までの数字のサインを作ることができたことがわかった。

「どうだ、ナガ。でもな、ここまでではまだ必ず勝てる方法とは言えない。自分のカードがどんなに良くても親のカードに勝たないことには意味がないからな。だから俺は自分のカードもサインする。そうすればお互いのカードがわかってナガは必ず勝つことができる。俺の言っていることはわかるか？」よくわかると僕は答えた。

「これが、ナガ、必ず勝てる方法だ。ギャンブルにおいて勝つためには必ず情報を提供してくれるパートナーが必要だということだ。どうだ、この方法に興味はあるか？」僕はわからないと答えた。

「俺たちは母親の手術のためにどうしても金がいるんだ。そのためにはどんなことでもする。まともにギャンブルなんかやって儲かるわけがない。そんなことをするやつはただのバカだよ、ナガ。こんなことはディーラー達みんながやっていることだ。誰もがやっている

ことなんだ。でもバリのカジノは現地の人間は入ることができない。観光客しか立ち入りは認められていない。どうだ、ナガ、俺の言っていることはわかるか？」僕は黙っていた。

「カジノの中でもゲームを見張る人間がいる。客を見張るためでもあるが、ディーラーも見張られているんだ。だからずっとナガを勝たせるわけにはいかない。時々いるだろう？ドカンと賭けて、それで儲かるラッキーな奴が。それと同じでただラッキーを演出するだけなんだ。4、5回だけドカンと賭けてそれで勝つ。それ以上はしない、すっぱりと辞める。そうすれば誰も怪しまない。俺の言っていることはわかるか？」僕は相変わらず黙っていた。

「ナガが日本に帰る前日にでもカジノに来て、それで儲けて帰ればいい。その掛け金も俺が負担する。取り分は半分半分だ。どうだ、この話しに興味はあるか？」僕はわからないと答えた。

「いいか、ナガ。これはギャンブルでもなんでもない」ベンは目の前に広げられたランプを手にとってそう言った。「これはビジネスなんだ。誰もが同じようなことをしている正当なビジネスなんだ。俺の言っていることはわかるか？」

僕はあなたの意味することはわかるけど、あまり興味はないと答え、ところで妹はまだ帰ってこないのかとベンに聞いた。この家に来てからおそらく二時間以上は経過しているだろうと思った。

「悪かったな、ナガ。ただわざわざ妹のために来てもらったから何かしてあげただけなんだ。興味が無いのなら別に気にすることはない。でも今話したことは絶対に人には言わないでくれ」とベンは言って「ニーナ、ニーナ」と大声で部屋の入り口のカーテンに叫んだ。そしてベンはランプを片付けた。ニーナがやってくると

僕は妹はまだ来ないのかと彼女に聞いた。ニーナは「ちょっと待ってね」と言って携帯電話でどこかに電話をかけた。何語かわからないような言葉でニーナは誰かと話をして、

「もう、すぐ来るから。もう、こっちに向かっているから、ちょっと待ってね」と言ってもうひとつ折りたたみの椅子を出して僕の隣に座った。

「ナガ、ナガ」とベンは言い「妹ももうすぐ来るからそれまで何かゲームをして時間を潰さないか？ニーナも一緒に、どうだ、ナガ」

ベンがそう言った瞬間に、僕はすべてを理解した。なぜ彼らがあんなピカピカの日本車に乗っていたのか、どうして門を開けてくれたバリ人のおばさんがあんなに悲しそうな顔をしていたのか、なぜベンがいちいち「俺の言っていることはわかるか？」と聞いてきたのか、そしてなぜ今僕がここににいるのかということ。

僕は自分の意識の中にドボンと飛び込んだ。僕は目を閉じ、自分の意識の中を泳いだ。自分の血液の中に意識をすべて閉じ込めた。そこは怒りで満ちていた。僕の知らぬ間に僕の心の中に入ってきた泥臭い欲望の根を絶ち切ろうとする怒りで溢れかえっていた。

「ナガ、ナガ・・・・・・ナガ・・・・・・」と誰かが遠くで僕の名前を呼ぶのが聞こえたような気がした。しかし僕はすでに視界もなく音もなく、色もなく、匂いもなく、感触すらない僕自身の暗闇に包まれた怒りの世界にいた。そこには怒り以外のものは何ひとつ存在していなかった。怒りに塗り固められた真っ赤な空が広がり、血の滴り落ちた後の大地があった。僕はしばらくその世界に身を任せた。僕の感情はどこまでも広がってゆき、大地を叩き割り、空を突きぬけ、世界の果てにまで僕を連れていった。

やがて僕はゆっくりと目を開け、そしてゆっくりと大きな息を吐き出し、そしてようやく？こちら側？の世界に帰って来た。そしてベンに言った。

「僕は妹のためにここに来たんだ、それ以外のことをするつもりはない」

僕はずいぶん感情を抑えて言ったつもりだったが、その言葉に含まれた怒りのトーンは間違はなくその音の裏にべつとりと張り付いていた。それを隠すことは不可能だったと思う。

僕は無性に音楽が聞きたくなった。稲妻のように重く、激しく、不条理に対する怒りに満ちたものが聞きたかった。その凶太い音の一言一言が鼓膜をビリビリと刺激し、僕の怒りを脱ぎ取ってくれないことには頭がおかしくなってしまういそうな気がした。とりあえず僕は煙草に火を点け、コーラを飲み干した。

帰りの車内でジェフィとニーナはしきりに僕に話しかけてきた。時々発音のおかしい不気味な日本語を使ってきたので余計に彼らが焦っているのがわかった。要するに彼らの「ビジネス」の話しだったけど、僕はほとんど彼らの話を聞いていなかった。ただ音楽が聴きたいなと思っていた。ジェフィの潰れた片目もニーナの金のネックレスも声も匂いも視線もすべてが欲望にまみれていた。僕は「ああ」とか「うん」とか気のない返事をしていただけだったが、頭の中では全然違うことを考えていた。世界中の日本車の割合はどのくらいなんだろう、バリーに有名な芸術家がいただろうか、どうして日本とバリーの時間の流れはこんなにも違うのだろうか、イタリアで出

会った友達は今頃何をしているだろう。彼らが僕に話しかければかけるほど僕の心は遠く霞んだように離れていった。ウブドに帰るずいぶん手前で僕は車から降ろされた。

「明日もう一度会おう」とニーナが言ったけど僕は「ノー」と言っ
てドアを閉めた。

僕は人間の欲望を否定しているわけではなかった。欲望というのは人間の進化において活性剤となりうる。しかし彼らは自分たちの欲望に勝てなかった。と言っても僕が何かに勝ったわけではない。ただ彼らが自分自身の欲望に負けたただけなのだ。

僕はタクシーを拾い、ウブドまで幾らだと言うとドライバーは最初6万ルピアと言った。僕は2万5千ルピアまで値切った。タクシーが走り出すと、そういうえば襲われ、殺されなかっただけでも良かったのかもしれないと思った。ウブドに着くと僕は運転者に3万ルピア払った。運転手は車をユーザーンさせると僕に手を振り、笑顔を見せて去っていった。

宿に戻ると道路を挟んで向かい側に昨日テラスで話をしたパンデイの姿が見えた。僕の泊まっている宿と彼の店は目と鼻の先にあった。僕は彼のところに行き今日の出来事の一部始終を話した。ジャワ人はバリにやってきてよくカード詐欺やギャンブル詐欺をやるのだと教えてくれた。

彼はコーヒーでも飲もうと僕を誘い、店の裏側にあったレストランに連れて行ってくれた。そのレストランは入り口がギャラリイのようになっていて、パツとみた感じではレストランだとはわかりにくかった。ギャラリイを抜けると木々に囲まれた砂利道になっていてその奥に石造りの二階建ての建物があった。二階建ての建物はこ

の辺では珍しいことだった。クレーンやレッカーなんてものがまだこの町にはなくて全部人間の手で作らなくてはいけないからだ。建物は円形の作りになっていて一階はオープンキッチンで床式の席が二つだけあり、二階にはカウンターがあり、テーブル席がゆったりと10席ぐらい並んで、高い竹網の天井は綺麗な放物線を描いてカタツムリのように中心に向かって延びていた。二階の階段は4つもあり、庭に下りるのや、小さなバーに向かうもの、まるで迷路みたいだなと思った。綺麗な石積みの壁や、テーブルのデザインからして相当質の高いレストランだろうなと思った。一階からも二階からも店の奥に広がる地平線が見えそうな田んぼが見渡せた。僕とパンディは店の奥にあったテラスのテーブルに座った。屋根だけがついた小屋のようなところには南国の鳥が籠に入れられていくつもぶら下げられていた。店のスタッフがいなかったのかパンディがメニューを持ってきて、

「ナガさん、なに、飲みますか？」と僕に聞いた。バリコーヒーというのがあったので僕はそれを注文した。パンディは飲み物を取りにキッチンのほうに行った。僕は木で出来た椅子の上で伸びをして空を眺めた。

青く澄んで抜けそうな青空があった。目の前の田んぼは風の形がわかるぐらいにゆっくりと揺れ、地球がドーム型をしているのがわかるようなゆったりとした青空だった。そういえばこうやって空を眺めるのはいつぶりのことだろうと僕は思った。僕は空を見つめ、空は僕を見下ろしていた。遠い場所の遠い青空の下に僕はいた。なぜだかわからないけどその青空の中に僕は何かを見つけたような気がした。あるいはその向こうにある世界のことを思った。空はどこまでいっても空であり、僕はどこまで行っても僕だった。燃え盛る太陽はいつも僕を照らしていたのだし、空はいつまでも僕を取り囲んでいた。風は僕の元を過ぎ去り、僕の知らないどこかへ消えていつ

た。僕は何かを求めているわけではなかった。ただ吸い込まれそうな空を見上げていただけだった。時々僕に何かを伝えようとするかのように鳥が鳴いた。僕は日本を離れる前に感じた？予感？のようなものが、今この瞬間にあるのではないかと漠然と思った。僕は運命というものが僕をここに連れてきて、そして今それと向かい合っているのではないかと思った。僕は外国でもない、バリでもない、ただの遠い青空の下のことを書いてみようかなと思った。

パンデイがコーヒーを持ってきてくれてしばらく話をしていたけど、ずいぶん蚊に刺されたので僕はすぐに宿に帰った。だけど相変わらず僕は何も書く気にならなかった。僕が見た青空はいつまでも僕の心に居続け、決して去ろうとはしなかった。すべてを溶かし、すべてを吸い込んでゆくようなその青空は、まるで僕の一番透明な部分を映し出すようにいつまでも僕の心の中を覗き込んでいたからだ。僕はどこにでもある遠い青空を抱きかかえ、その中でもう目覚めることはないというほど深い眠りに落ちていった。

それからあまり生活に変化というものはなかった。同じような毎日が現れ、音もなく消えていった。毎日のんびりと過ごしているとなんだか自分の忘れ去った記憶のなかに紛れ込んでしまったような気分になることがよくあった。どこか時間の感覚がおかしくなっていたのかもしれない。

ウブドという町は少し標高が高いところにあるらしく、昼間は暑かったけど、夜になればファンがいらないういほど過ごしやすいくところだった。クタの人々のようにあまり執拗に物売りに声を掛けられることもないし、さらに町全体はのんびりした雰囲気包まれていた。

僕はほとんど観光というものをせず、地元の人々と地元の生活の中に溶け込んでそこにある匂いや泥臭さ、習慣の違いなんかを感じるのが好きだった。しかし僕の付き合う人々はほとんどが英語を話せなくて、もちろん日本語もダメだった。そして僕はインドネシア語という始めて聞く言葉を少しずつ覚えていった。しかしそれは「元氣？」とか「名前は？」ぐらいのものだったし、会話と呼べるようなものにはならなかった。でもインドネシア語ができないからといって特に不便さを感じることはなかった。英語の単語を並べたり、身振りなんかでどうにかなった。それに相手の表情や仕草で大体の

ことはわかるのだ。僕は言葉というものに頼らなくなつてゆき、言葉にならないものに囲まれて暮らしていた。繰り返しの毎日というまた新しい日常が僕の元にやってきたけどそれでもそれは楽しい日々だったと言える。いろんな人と付き合うと僕が知らなかった僅かな感情のブレや表情、そして仕草なんかがあつた。聞いたことのないイントネーションがあり、言葉があつた。

僕は朝起きるといつもの食堂にご飯を食べにゆく。宿を出る時には必ずニョマンが商店のところにいたから僕は「おはよう」とインドネシア語で挨拶した。インドネシアの料理というのは全般的に辛いものが多かった。一年中暑いせいか食べ物腐りやすく、そのためにあらかじめ唐辛子などに浸しておいて保存をきかせるという目的もあるらしい。日本食に比べるとあまり食べ物メニューが豊富ではなく、僕は毎日ミ・ゴレンだとか、焼き飯だとか、鶏肉料理を食べた。僕がいつも行くような食堂はだいたい一食80円ぐらいだった。僕は辛い食べ物に慣れなくてはいけないと思って下痢を我慢して食べていたけど、二週間ぐらい経ってから結局これは慣れないんじゃないかと思ひ直した。食堂に行くと「辛いダメ」と言つて、そういう料理を作つてもらつた。

朝ご飯を食べて帰つてくると僕はテラスに座つて音楽を聴いた。目の前に広がっているゆったりとした景色を眺めてあてもなく時間を過ごしていた。バリと日本は一時間しか時差がなかったから、そういえば今頃は通勤電車に押し込まれている人や、時間を気にしてイライラしている人や、夜勤が終わつて眠りにつく人がいるんだろうと思つた。僕がこんな暮らしをしていて申し訳なく感じることもあつたけど、鳥が優雅に飛びまわる自由な空や、細々としてもたくましく生きる人々に囲まれているとそんなことはどうでもよくなつてしまつた。

とくにもないの僕がよく散歩に出掛けた。大通りに出るとすぐにバイクがぶんぶん目の前を通り過ぎてゆく。この町には電柱というものが少なく、信号もほとんどない。道沿いにずらつとヤシの木が立ち並び、風通しの良さそうな家々の間には田んぼが広がっている。メリーのように頭に籠を乗せ、腰に布を巻いたおばさんたちがジューズや果物を売るためにふらふらと歩き回っている。

最初は驚いたけど、野良犬や野良猫、野良鶏や、野良ダチョウまで道路の真ん中を徘徊していた。僕は道を挟んで向こう側に座っているパンディに手をあげて挨拶し、ギラギラした太陽のほうへと歩く。暖簾のかかった食堂の向こう側から「ナガ、元気？」といったものようにおばさんが声を掛けてくる。僕は「そっちはどうだい」なんて言いながら、ごつごつしたコンクリートの道を転ばないようにしながら進んでゆく。バリ人は一度でも話をするとなんどの人は僕の顔と名前をちゃんと覚えていて「ナガ、調子はどうだ」とか「トモダチ、ドコイク」と親しげに話しかけてくる。僕は用もないけど立ち止まって彼らと話をしたり、時には一緒に地面に座って煙草を吸い、下らない冗談を言って笑い合った。立ち並ぶ食堂やレストランはほとんどが壁やガラスといったものがないため、中にいるスタッフがぼんやりと客を待っている姿とか、料理の匂いなんかがそこから漏れてくる。

しばらく歩くと道はなだらかな上り坂になり、お土産用の洋服や小物、バリ独特の民族楽器を売っている店なんかもある。店の前にはだいたいその店のスタッフがつまらなさそうに座っていて、僕が店に入ろうとするにつこりと微笑んでくれる。僕は長期滞在の予定だったからあまり買い物はしなかったけど、雑貨や衣類なんかを見ながらひとりでぶらぶらし、店のスタッフとちょこちよこ話をした。一度でもそんなふうに話をすればまた通りがかったときには「ナガ、どこいくんだ？タクシーいらないか」と声を掛けられる。ウブドという町はバリの芸術家が多くいるところらしく、店の前に絵

を飾ったギャラリーなんかも時々目にするものがあつた。週に一度ぐらいはお寺のような佇まいの集會場で観光客相手にバリダンスも行われているらしかった。

町の中心まで行くとごみごみとしたマーケットがあり、よれよれの服を着た浅黒い男たちが観光客に声を掛けている。道端ではバイクの煙と砂埃に巻き上げられながらも、お祭りの出店のように団扇でばたばたと焼き鳥を焼いているおじさんやおばさんをよく見かけた。夕方になれば屋台を引っ張り、町をとぼとぼ歩きながら「バクソー」と呼ばれるラーメンのようなものを売るおじさんもいた。町をグルッと回つてくると汗を掻いてしまったため宿に戻ると僕はシャワーを浴びた。毎日がそんな日々の繰り返しだった。何かが襲い掛かってくるわけでもないし、何か決め事をしなくてはいけないこともなかった。

小説は全然書いていなかったけど、あまり書きたいと思うこともなかった。それはおそらく僕が何かを書かなくても僕の溜め込んだ感情が勝手に表に出ていったからだろうと思う。そして僕は小説を書かないことにも焦つたり、苛立つたりはしなかった。僕はあの青空の下で何かを書いてみようと思つたけど、それにはまずバリのいろいろなものを感じてみなくてはいけないと思つていた。そして僕はいろいろな女の子をデートに誘つて遊んだ。パンデイに僕はプレイボーイなんじゃないかと言われたけど、これは小説を書くにあたつて大切なことだと言つた。

観光客がいなくて仕事がありませんいせいかパンデイや店のスタッフはいつも店の前に座りたむろしていた。それでなくてもバリ人の男はいつも朝から晩まで路上でたむろしている。そして観光客に「タクシー？」とか言つて声をかけるのだ。パンデイに言わせるとこれもバリの文化なのだそうだ。でも僕の泊まっている宿はパンデイの

店の目の前にあったから僕が女の子とデートすると必ずあれはここで捕まえてきたとか、もうやったのかと聞かれた。僕はそうゆうオープンな文化に少しうんざりしていた。僕が彼らの輪の中に近づくとみんな僕に煙草をくれと言ってきた。ほとんど配っていたと言ってもいい。ビールを飲むとみんながやってきたし、時々のご飯を一緒に食べた。お金はいつも僕が払った。それでも一日中ひとりで時間を潰すのにはバリの時間の経過は遅すぎた。朝起きて、ご飯を食べに行つて、音楽をたっぷり聴いて、シャワーを浴びて、洗濯物を手洗いして、昼寝してもまだ太陽は空高くから僕を見下ろしていた。必然的に生活はのんびりしたものになっていった。

僕の感情は隅から隅まで一日の時間の中に綺麗に並べられ、その途切れることのない一本の感情の波の中で僕は暮らした。僕はバリ人たちとだんだんと仲良くなっていた。最初は疑っていた人々も毎日顔を合わせ、しゃべっているとどんどん僕の心もオープンになってゆくのがわかった。いくら僕が煙草やビールをあげたとしても彼らはきちんと僕に「アリガトウ」とわざわざ日本語で言ってくれたし、馴れ合つてきても彼らのそうゆう謙虚な態度は変わらなかった。彼らは決して見栄を張ることもなかったし、自分を偽ったりもしなかった。僕が心を開いて接すればだいたいはきちんと向き合つて僕を向かい入れてくれた。そういう意味ではさっぱりとして付き合やすい人々だったとも言える。そしてバリ人というのは一般的に先のことをあまり考えない民族だった。例えば明後日どこかに行こうといつても、明後日になつてみないとわからないと答えた。そして未来を限定する「予定」というものを入れるのをすごく嫌った。3日先のことさえ彼らはほとんど話をしなかったし、彼らにとつては一週間後のことさえ日本人にしたら1年先のことぐらい遠い話のような印象を受けた。でもそのかわり彼らは一日一日をしつかりと生きているように思えた。それは素晴らしい文化だと僕は思った。

のんびりした暮らしをしていたけど、僕は唐突にひどく落ち込むことがあった。女の子としゃべったりして楽しい時間を過ごしているはずなのに何の前触れもなく「それ」は現れた。まるで突然誰かが僕の手を後ろから掴み、僕が振り向くとその「何か」は僕にこう囁くようだった。

「おまえは、まだわかっていないみたいだな。そんなことをしても何の意味もないんだぞ」と・・・・・・・・。

僕はその悪魔の囁きに齒向かうことはできなかった。おそらくは僕の中の欠落と何かしらの関係があるのかもしれない。だからといってどうすることもできなかった。そんなふうにして僕は時々空白の一日を過ごすことがあった。時間もなく、場所もなく、カレンダーを探しても、地図を見てもどこにも存在しない一日。僕はこの地球上のどこにも属さない存在として、ただの浮遊物として流れる日。そんなもの一日とすら呼べないかもしれない空白の一日。

やがて風が匂いを運んでくる。少し油っぽく体の奥にまで届きそうな鋭さを持った匂いだ。そして匂いが視界を広げる。ぼんやりとした視界の先にはやがて見慣れない温かさをもった一枚の写真のような風景が浮かび上がる。霞んだ街路樹が見え、細く延びた街頭がにじんだアスファルトを映し出す。そうする間に遠くから懐かしい音が聞こえてくる。聞こえるか聞こえないかわからないくらい遠くからだんだんと近い音に変わってゆく。幼い頃に聞いたことのある誰かの声のように古い記憶の中からその音は聞こえてくる。そして音が耳元をふわふわと飛び回ったあとに、生臭い自分の口の中の味を

感じ始める。そこには生きる人間の味がする。生きるための生命のようなものがそこにはある。

僕がハツと気が付くと何かが体を打つのがわかった。軽く、でもしっかりと肌に感触を残す他愛のない別れのような感触、雨だ。バイクの走っている音が遠ざかり、人々の話し声が聞こえなくなり、世界中が雨の音に包まれる。アスファルトを打つ強い雨がね返って小さな王冠のような形になっている。そして僕の服が、ズボンが、サンダルが、僅かな重みを持って熱を帯び始めるのがわかる。僕の体と接しているのがわかるようになる。ティシャツは肩のあたりからゆっくりと水分を含み始め、太ももはズボンと張り付き、そしてサンダルは雨を弾いて汚れ出しざらざらし始める。

僕は自分がどこか間違った場所に来てしまったんじゃないかと思いは始める。ここは僕の場所ではないのかもしれないと思う。

僕はそんな気持ちのまま部屋に辿り着き、鏡の前に座る。鏡の中にいる僕が僕なのか、こちら側にいる僕が僕なのか、そんなことを考え始める。思考がゆっくりと回り始め、何かが動きだす。動いてはいけないものも一緒になって着いてくる。

そんな僕の欠落にどつぷりと浸かってしまうことはあった。でも時間が経てばひとりでに元気になったし、おおむね楽しく暮らしていた。僕は新しく学んだ感情を僕だけの日本語の中に次々と詰め込んでいった。それは僕にとってはとても有意義なことのように考えていた。

しかし物事はいつもいつもとても静かなところから始まる。その静

寂が壊れた微かな音を聞くことのできる人はあまりいない。例えば海底深くで起きた大爆発の音はほとんどの場合誰にもわからないのだ。なぜそんなことが起こったのか考えている間に水面に予兆のようなものが現れ、そしてやがては世界をこなごなにしてしまう大惨事になるうとも。

僕は恋に落ちた。雨が大地を洗い、風が汚れを吹き飛ばしてしまふと、太陽は今までになく強く僕を照らした。

情熱・・・それは燃えさかる炎に投げ込まれた一片の花びらのようなものである。

僕と彼女が出会ったのはパンディに連れていってもらったレストランでのことだった。僕が青空を見上げた場所だった。僕がいつものようにパンディと話をしていると、パンディは実は好きな子がいるんだけどその子はレストランで働いていて、レストランは観光客しか入れないためにその子に会いに行くことは自分ひとりではできないと言った。悪いけど一緒に行ってくれないかと僕に聞いた。僕は小説も書いていなかったし、時間は有り余っていたのでべつにいいよと答えた。そのレストランはどこにあるのと僕が聞くとこの間一緒に行ったところだと言った。実はあの時もその子に会いたくて誘ったのだと言った。

その時は夜だった。ウブドという町は全体的に街灯も暗く、店に入っても、宿にいてもどことなくぼんやりとした光しかない。そしてウブドの夜はものすごく静かだ。トラックが走る音もないし、電車が走る音もない。

僕とパンディは「B a g u s」と書かれた看板の横を通り過ぎ、ギャラリーを抜けてレストランの二階席に座った。店自体はずいぶん広いけど他に客は来ていなかった。ここのレストランもそうだけどウブドのレストランやカフェには壁というものがほとんどなくて店全体が屋根だけが付いた吹き抜けの空間に作られているため、客がいないともものすごくがらんとしたイメージになる。高い天井にはところどころにトカゲの姿が見える。昼間見た広々とした田んぼは夜の闇に隠されて何も見えなかったけど、闇の中からは何に急かされるわけでもないというふうなのんびりしたカエルや虫の鳴き声が聞こえてきた。ところどころにスポットライトのような小さく伸びた照明が掲げられ、落ち着いた店の雰囲気とよく馴染んでいた。僕は念のため虫除けスプレーを肌の露出した部分に塗っているとウエイトレスらしき女の子がひとりやってきた。パンディに微笑みかけ何かを言い、メニューを渡してくれた。ウェーブのかかった髪を後ろで束ね、赤色のティシャツをきてジーンズを履いていた。おそらくはひどく人見知りするタイプで強がった部分と繊細な部分を持ち合わせたような感じの女の子だったけど、特にかわいいという感じではなかった。僕はビールを注文し、パンディはコーラを頼んだ。そうすると階段からもうひとり女の子が二階に上がってきてカウンターの方で何やらごそごそとやっていた。パツとみた感じではその子のほうが格段に可愛かったので僕はその子がパンディの好きな子なんだろうなと思った。ウエイトレスの女の子が飲み物を持ってきてくれたので僕が名前を聞くとコーマンだと答えた。コーマン？あまり気の利いた名前じゃないなと思った。少なくとも日本にい

たらずいぶん恥ずかしい日々を過ごすことになるだろう。

コーマンという女の子は僕とパンディの前で立ちながらずっと話をしていた。彼らはインドネシア語でしゃべっていたから話しの内容はわからなかったけど、僕がビールを飲み煙草を一本吸ってもまだパンディはコーマンと話をしていた。僕はパンディに好きな子のところには行かないのと日本語で聞くともうここにいると日本語で答えた。

「どこに？」と僕が聞くと「となり、となり」とパンディはコーマンのほうを見ないようにして答えた。僕はコーマンの不思議そうな顔を3秒ぐらい見てからようやくわかった。それから二人は延々と話をしていたので僕は席を立ち、カウンターにいる女の子のほうに向かった。がっしりとした石で作られた大きなカウンターの前には背もたれのない細長いシックな椅子が3つ置いてあった。僕はその真ん中の椅子に座り、カウンターの中にいる女の子に話しかけた。

「ハロー、元気？」と僕が覚えたばかりのインドネシア語で言うと彼女は振り向いた。取って付けたような澄んだ目で僕を見てとろけ落ちそうな口で恥ずかしそうに笑いながら何かを言っただけ僕には全く理解できなかった。

「イングリッシュ？オーケー？」と僕が聞くと彼女は困ったように微笑んだまま首を横に振り、彼女の肩まで延びた髪がわさわさと揺れた。バリの女性はほとんどの人が長髪でさらに髪を剥いたりしないものすごく重い感じがする。でも彼女はすらっとしてもものすごくスタイルが良かった。バリでは頭の上に物を乗せて運ぶ習慣があるからだろうけど、ほとんどの人は背筋がピンとしていてすごく姿勢がいい。

僕は気が向いたときにいつでも何か書けるようにノートとペンを持っていたのでそこにNAGAと自分の名前を書いて、

「チンタ・バンガロー、チンタ・バンガロー」と僕の泊まっている宿の方角を指差した。このレストランを出ると目の前に僕の宿はあった。彼女は大きな口から見える綺麗に並んだ白い歯を見せて僕に微笑んだ。僕はペンとノートを彼女に渡し、

「ネーム？ネーム？」と聞いた。彼女はそこにDAYUと少しぎこちない左上がりのアルファベットを書いた。僕はノートに「26」と書いて彼女に渡したけど、彼女は少し眉をひそめて首を振った。僕は「1976・8・10」と書いて自分を指差すと、彼女はパツと明るい笑顔になって「1977・3・3」と書いた。僕は彼女が文字を書いたノートをまじまじと眺め、目の前にいる僕よりひとつ年下の女の子を見た。僕が今まで会ったバリ人のなかで間違いなく一番美しい女性だった。おそらくすれ違った観光客の日本人や白人たちと比べてもバリのなかで会った女性の中で最も美しい女性だろうと思った。というよりも僕が強く何かを感じる女性だった。彼女は黒地に赤色で「B a g u s」書かれたダボダボのさえないティシャツを着て、ブーツカットのジーンズという格好をしていたけどちょっとした微笑から漏れてくる感情の幅の広さや、身のこなしや仕草なんかから伝わってくる南国に咲いた力強い花のような生命力の強さに僕の心は激しく揺り動かされた。

僕は彼女の浅黒い肌を見ても彼女がバリ人であるという事実をうまく飲み込めなかった。それまで僕が会って来たバリの女性は悪く言えば原始的で、未発達で、ゴーギャンの絵に出てくるようなタイプの女性ばかりだったからだ。そういう人を好む人もいるのだろうけど僕はどちらかといえば惹かれるほうではなかった。そういった女性たちは粗野で荒削りな欲望を持っていて、がさつな人々であると

という印象を僕に与えていた。しかし目の前の彼女は見事に洗練され、感情のひとつひとつが、何気ない表情のひとつひとつが研ぎ澄まされているような感じがした。僕はなんとか彼女と話したいと思った。

「ジャパニーズ、オーケー？」と僕が言うと彼女は当然のように小さく首を振った。でも彼女は自分を指差しながら、

「ジャパニーズレストラン、クック、クック」といって鍋を振る仕事をした。「カツ、ドン」と彼女は言った。僕は彼女の口から慣れ親しんだ言葉がいきなり出てきたのでびっくりして笑った。

「スキヤキ、うどん、キツコーマン」と彼女は言い、僕は声を上げて笑った。僕が笑うと彼女もまるでそれを待っていたかのように一緒に笑った。

「ナガ、サン、ジャパン、トウキョウ？」と聞いてきたので、

「ノー、ノー、バリ、バリ」と僕が答えると彼女はまた笑った。彼女はカウンターの上に頬杖をつき上目遣いに僕を見た。その瞬間に僕は何かとても重要なことを彼女に見られているような気がした。僕が自分自身では決して見ることでできない死角のような僕の一部分を彼女はまっすぐに見ているような気がした。

僕は限られた言葉の中で考えられる限りの冗談を言い、彼女は生まれて始めて笑うことを覚えた子供のように本当によく笑った。彼女の笑い顔は透明な青空のようにどこまでも明るく、湧き出たばかりの水のように澄んでいて可愛かった。彼女と笑い合っていると地球の回転が止まってしまったんじゃないかというほど静かなバリの夜に、自分が何の違和感もなくびったりと溶け込んでいるような気がした。しかしそんな親密で温かい雰囲気の中に冷たい風が吹き込

むかのようにクールなパンディがやってきた。

「ナガさん、もう、かえる、ほうが、いい」とパンディは言った。僕はパンディに通訳してもらって彼女にここでどのくらい働いているのか、料理は好きなのかといったごく当たり前の質問をしたけど彼女はぎこちなさそうにしていた。たぶんパンディのことをよく知らないのだろうと僕は思った。

僕はパンディと僕の分のお金を払って店を出た。レストランを抜ける暗い小道を歩きながらパンディに今の女の子は彼氏がいるのかと聞いた。

「けっこん、してる、こども、いる、だからね」あっさりとパンディは答えた。それが僕の恋の始まりだった。

次の日に僕はガイドブックを持ってレストランに向かった。本の最後のところにインドネシア語の会話が載っていたからだ。入り口にいた男に声をかけてダユウはいるかと聞くと男は答えた。僕は客のいないがらんとした二階席にひとりで座り、テーブルの上にガイドブックを開いて待っていた。すると女の子が二人やってきた。どちらも20ぐらいだろうと思った。

僕は「ダユウはいないの？」と聞くと私たちはダユウと言った。僕には全くわけがわからなかった。昨日僕が会ったダユウという人はいないのかと聞いたら彼女は休みだと言われた。僕はレストランを出て、パンディのところに行った。

パンディから話を聞くとバリでは生まれたときにもう名前というものは決まっているのだそうだ。バリにはカーストと呼ばれる階級制度があり、どの階級の何番目の子供かということで名前は決まってしまうらしい。僕は後にパンディのほかにも3人のパンディと知り合い、7人のニヨマンと知り合い、2人のプトウとデートし、2人のコーマンに恋人になってくれと言われた。学校で出席を取る時はどうするんだろうと僕は思った。

レストランにいた女の子のひとりは昨日僕が会ったダユウの妹で、ひとりは従妹だった。

妹の方は同じように顔立ちは整ってはいたけどぶっきらぼうな感じだったし、従妹のほうはどことなく僕の母親に似ていたので居心地が悪かった。でもこれはもちろんこれは誰の責任でもなかった。

次の日の夜に出直してもう一度レストランに向かった。相変わらず客は誰もいなくて僕は二階の三人掛けのテーブルに座った。従妹が僕のオーダーを取りに来て僕はビールを注文すると間もなく本命のダユウがやってきて僕の隣に座った。彼女は少し恥ずかしそうに笑って僕を見ていた。

僕は「お客さんはいないの？」と聞くといつもこんな感じだと言った。僕はガイドブックに載っていたインドネシア語を使って「こんにちは」とか「あなたの名前はなんですか？」といった簡単な会話をした。僕は「好き」という単語を知っていたのでノートに絵を書いて山は好きか、海は好きか、バイクに乗るのは好きかとかそんなふうな話をした。彼女はここのレストランは日本人が経営していて少し日本語の勉強をしたいというようなことを言った。僕らは指を折りながら数の数え方を教えあったり、彼女はインドネシア語の単

語を覚えてくれたりした。従妹もテーブルにやってきて座り、3人で話をした。従妹はウエイトレスだけあって簡単な日本語はしゃべることができたけど会話にはほど遠かった。

「ワカル?」「ワカラナイ?」などと言ってみんなで笑った。

「ナガ、サン、コイビト、コイビト?」とダユウが僕に聞いた。僕は「ノー、ノー」と言ってダユウと僕を交互に指差し「恋人になりたい」と言ってみた。彼女は困った顔をして僕と従妹を交互に指差し「コイビト、コイビト」と言った。

僕は従妹に「僕と恋人になりたいの?」と試しに聞くと僕を見つめて従妹は頷いた。母親似の従妹から僕が感じるものは踏み切りで立ち往生してしまったような違和感だけだった。静かな夜の中で空気が固まったような沈黙が続いた。そうすると従妹がダユウをパシッと叩きながら、

「結婚、子供」と英語で言った。

僕はパンディから聞いていたけどショックを受けた振りをしながらガイドブックに載っていた会話集の「けが・トラブル」という項目の中から「医者を呼んでください」という文章をダユウに見せると彼女は声を出して笑った。彼女が笑うと口元のほくろが温かい微笑をさらに演出するようにセクシーに動いた。

「明日、仕事、いつ?」と僕は彼女に聞いた。シフトは朝と夜の二交替制になっていた。彼女は「朝」と答え「明日も来れるの?」と僕に聞いた。

彼女の付けていた金のピアスが光っていた。僕は何もつけないほう

がシンプルでいいのになと思った。でもほとんどのバリ人の女性はピアスをしていたからあるいは宗教的なことなのかもしれない思った。

僕が「明日も来るよ」と言うと彼女は眉をプリッと持ち上げて微笑んでくれた。

それから僕は何度かレストランに行って彼女に会った。世界的にも穴の空いた硬貨というのは珍しいらしいので持っていた五円玉をプレゼントしたり、身振り手振りで彼女を楽しませたりした。他のスタッフとも仲良くなったり、いつも客は僕以外あまりいなかったからインドネシア語を教えて貰ったり、日本語を教えたりして過ごしていた。

僕がレストランに行っても、スタッフのみんなは僕を客としてではなく友達のように気さくに対応してくれた。なんだかスナックに通っているような気分になった。でも僕と彼女が二人きりで話をできる機会はほとんどなかった。彼女はコックでありオープンキッチンの調理場から離れることはなかったからだ。彼女はここのレストランに来る前に4年ほど日本食レストランでコックをしていたらしく「キュウリ」とか「ニンジン」とか他にも少しだけ日本語の単語を知っていた。

僕は二階の席ではなく調理場のある一階の床式のテーブルに座るようになった。4、5回彼女に会いに行って僕は彼女をデートに誘った。彼女は妹や従妹を誘ってあげてと言って断った。でも僕はどうしても君とデートしたいのと言った。彼女は申し訳なさそうに「ゴメンナサイ」と日本語で言った。インドネシア語と違って日本語

で断られることは僕にとって非常に説得力があつた。そしてその日彼女はレストランの出口であるギャラリーまで僕を見送ってくれた。僕は多少ショックを受けたけど、彼女はもう結婚して子供もいるのだし、それに他にも通っているカフェの女の子たちとも仲良くしていたから、まあ、しょうがないなと思つたぐらいだった。

宿の目の前にレストランはあつたから外出するときは嫌でも彼女のことを思い出したけど僕はパンディたちや、カフェの女の子のところに行って一週間ほどレストランに顔を出さなかつた。

でもある日ふらつとレストランに行つてみようかなと思つて中に入つていった。僕は彼女のシフトを知らなかつたので彼女がいるかどうかわからなかつたけど彼女はいた。僕が席に座ると彼女はちよこちよこやつてきて僕の隣に座り、僕の膝の上に手を置いて、

「ねえ、ナガサン、どうして、長い間来なかつたの？」と僕に言つた。僕はわけがわからなかつたのでキョトンとしていると、

「レストラン、長い間、来なかつたでしょ？」と彼女は不安げな顔をして繰り返した。僕は正直に君とデートしたいんだけど君は断つたからもう来なかつたのだと言つた。僕がそう言つても彼女は何も答えなかつたけど、彼女も少しは僕に会いたいと思つていいるということを知つた。それから僕は彼女のシフトに合わせて毎日のようにレストランに通うようになった。

気が付くと僕はウブドに来てから一ヶ月が経つていた。宿の主人のニョマンにそう言われたから気付いただけであつて僕は日付の感

覚なんてまるでなかったから、じゃあもう一ヶ月と言って二ヨマンにお金を払った。その頃にはパンディを含め、近所の人々は僕がダユウのことを好きだということをみんな知っていた。みんな仕事もないし、本を読んだり、映画を見たりとかいう娯楽自体があまりなく暇だから下らない噂ばかりして楽しんでいるのだらうと僕は思った。団地に住む主婦とあまり変わりはない。

僕がレストランに入るときには必ずパンディたちがたむろしている集団の目に留まり、必ずといっていいほどからかわれた。僕の姿を見ると「ダユウ、ダユウ、ダユウ」と言い、レストランに向かつてゆくときには「ガンバレ、ニッポン！」とパンディが叫んだ。小学生が仲のいい男女をはやし立てるような感じだった。

でも僕と彼女は急速に仲良くなっていた。ほとんど会話というものが成立しなかったけど「もうご飯食べた？」とか「シャワーはしたの？」とかお決まりのことを毎日言い合った。僕がもうシャワーしたよと言うと彼女は僕のところに来てクンクンと匂いを嗅ぎ「クチャイー」と言って僕をからかった。彼女は知っている僅かな英語や日本語を交えて僕がわかりやすいように話してくれたし、なんだか波長が合うみたいに僕は他の人よりも彼女のインドネシア語はよく理解できた。

彼女が僕のことをどう考えているのかわからなかったけど彼女の表情や仕草を読み取ろうと僕は心がけていた。彼女は笑ったり、困ったりしたときのアクションが大きいせいもあったけど、僕は彼女が感じている喜びや嬉しさや迷いのようなものをまるで自分のことのように手に取るようにわかった。僕は言葉というものがほとんどない世界で不思議なほどの安らぎを感じている自分を見つけた。僕は彼女が今までどうゆうふう生きてきたのか全く知らなかったし、何を考えているのかもわからなかった。彼女が仕事以外の時間をど

のように暮らしているのかも知らなかった。

僕と彼女の間には言葉がないせいであらゆる社会的な共通点というものがなかった。資本主義もなかったし、国際情勢もなかったし、ニヒリズムもなかったし、とにかく考え方の相違というものがなかった。ある意味では非常に限定されていたけど、ある意味ではとても自由だった。

彼女の妹や従妹や他のスタッフなんかと大勢で話していても、僕には彼らの話の内容をほとんど理解することはできなかった。でも話し方のトーンで笑い話をしているのか、事務的なことなのか、内緒の話なのかということぐらいはわかった。会話の内容が変わる時やみんなが笑って雰囲気が一変と持ちあがった時、相槌が欲しい時、曲と曲の合間のようなテンポが変わるほんの隙間、僕は彼女のほうを見て視線を合わせた。彼女は待ち構えていたかのように僕にっこりと微笑み、僕も微笑み返した。

そしてだんだんと僕らはお互いの体に触れ合うようになってきた。すれ違うときにちよつと手を伸ばしてみたり、ぶつかる必要もないのに肩を擦り合わせてみたりとまるでスパイ同士が秘密の暗号を伝え合うようにして。

僕はサボテンがゆっくりと水を吸い上げるように僕自身の中にあつた「欠落」のようなものが埋まっていつているような気になった。僕の「欠落」というものがぴつたりと彼女の形に合わせてできているんじゃないかと思うほどだった。彼女と触れ合うときに彼女は僕の心の中に手を入れてやさしくそこを愛撫してくれ、何を言っているのかわからないけれども彼女の声は僕の心をふんわりと包み込んでくれた。そして彼女の微笑みは僕にとって何よりも大切なものだった。僕はそこから何かを読み取り、そしてまた読み取ったものを

彼女に返した。それは本当に素晴らしいことだった。アルベルト・カミュもフランス・カフカも塞ぐことのできなかった僕の「欠落」を彼女は微笑みひとつで埋めてくれた。

僕は彼女が料理をする姿や、お祈りを捧げている神秘的な姿を見ているだけで僕はしつかりと何かを取り戻しているのだということを感じた。僕は失ったものを手に入れ、そして僕は懐かしい記憶の中に溶け込んでいった。彼女の匂いは子供の頃に連れて行ってもらった海の匂いや、走り回った野原の匂い、始めて食べるフルーツの甘酸っぱさのようなものに象徴されているようだった。僕は汗を掻いても気にならないほどのさっぱりとした夏の中にいた。何者ももう僕を汚すことはできず、僕はしつかりと何かに守られていた。僕は自分の求めるものに触れることができ、見ることができ、確かめることができた。

僕は言葉では表現できないから一度CDプレイヤーを持っていた音楽を聞かせたことがあった。この曲が僕の中にある彼女のイメージなのだと言った。その時に聞かせた曲はドビュシーの「月の光」という曲だった。簡単に言えばこのバリの静かな一夜のように草原の中をゆっくりと風が吹き通り、そこにいるさまざまな生物をやさしく月が見守っているような美しい曲だった。しかし彼女はその曲を聞いても何も感じていないみたいだった。僕がそう言って聞かせたから彼女は真剣に耳を傾けているようだったけど彼女にはわけがわからないというのは見ていてわかった。それはまるで僕が小学生だった時のようだった。僕が小学生だった頃に音楽の時間でどんな曲をかけられても僕は全くわけがわからなかった。なぜこんなものを聞かなくてはいけないのか不思議だった。しかし今考えてみると僕はその当時にはそういった美しい曲のようなものをまだ自分の中に持っていたのかもしれないと思った。自分が当たり前のように持っているものを他人に「ほら、これ、すごいだろ！」なんて言わ

れてもわかるはずがない。おそらく僕はそういうものをすでに失ってしまったのだろうと思った。だから僕の失った一部として曲という形をしたものを外部に求めるようになってしまったのかもしれない。

しかし彼女はまだそういう美しいものを内部に持っているのだろうと僕は思った。一流のオーケストラのようなリズム感を、静かな夜に浮かぶ月の生命力を、僕の心を溶かしてしまう微笑を、失いようのない完結されたものを彼女は汚れることなく持ち続けていたのだろうと思った。

僕は彼女が朝のシフトだとコーヒーを飲み、夜だとビールを飲んだ。僕が食べ物を注文することはほとんどなかった。僕が注文をすれば彼女が料理を作らなくてはいけないのでそれだけ話をするチャンスが減ってしまうからだ。僕は毎日飲み物だけで4時間も5時間もレストランにいた。でも僕が感じる範囲では誰も嫌な顔をしなかったし、僕はレストランにいるスタッフたちと仲の良い友人のように付き合い、誰とも話をしないときは僕は持ってきた本を読んだり、インドネシア語の勉強をした。彼女が仕事が休みの日は僕はただ次の日が来ることだけを待ちわびて時間を潰した。時折僕は彼女をデートに誘った。しかし答えはいつも同じだった。でも僕ははつきりと彼女も僕を求めていることをわかっていた。それは彼女が僕に向ける微笑であり、感情であった。他のスタッフも僕が彼女のことを好きなことを知っていたし、彼女も少なからず僕のことを思っていることも知っていた。僕はじつくりと時が来ることを待つことにした。

僕がレストランの常連になってくると彼女も少しずつ僕のことを知リたがるようになっていった。「日本ではどんな仕事をしているの?」とか「家族構成は?」みたいな感じに。僕はガイドブックの

会話集を使つてできるだけ話をしたけど、話が込み入つてくるといつもお手上げだった。「ナガ、サン、キリスト教？」と聞かれたことがあった。これはパンディとか他の人にもよく聞かれた。彼らのヒンドウー教は生活の中に密着した習慣として根付いていたから宗教に対しても関心が強いのだろうと思う。パンディやその仲間たちに聞かれたとき日本人は基本的には仏教だけど、僕は違うと答えた。彼らはどうして？どうして？と僕にしつこいぐらい聞いてきた。僕は宗教も芸術もスポーツも酒を飲むのも最終的には同じことなのだと聞いたけど誰も理解していないようだった。だから彼女に聞かれたときも「ちがう」とだけ答えた。

時間は常にあつたのでちよくちよくパンディたちとは会つていた。レストランが閉店する時間になると店を出て近くの商店で瓶ビールを二本買い、パンディたちがたむろしているところに行った。

「ヘイ、社長！」とパンディは僕を呼んだ。いつものように3、4人の仲間に煙草を取られ、一本は自分でビールを飲み、もう一本はパンディや仲間たちにあげた。パンディの隣に座ると彼は僕の肩に手を乗せて、

「ちようし、どう？」と言った。

「まあまあかな。パンディは？」と僕は聞いた。

「もんだい、ある、だからね」とパンディは言った。

静かで暗いウブドの夜の中ではいつものように男たちはたむろし時間を食いつぶしていた。目の前の通りでは静けさを嫌うようにバイ

クがびゅんびゅんと通り過ぎ、観光客らしき人が歩いていると仲間のひとり「タクシー？」と声をかけていた。昼間のじりじりとした太陽が沈んでしまうと、人々はそれぞれの場所に帰って行き、野犬たちが活発になってきて、後には夏の夜のざわめきだけが地上に残っている。

どんな問題があるのかと僕が聞くとパンディが好きなコーマンのことだった。パンディはかつこよくてお金もある家庭なので、コーマンは怖がってなかなか彼に心を開いてくれないらしかった。

「でも、わたし、せいじゅつ、したい、だからね。誠実」と彼は言った。「ナガさん、わたし、じつは、もてる、だからね」とパンディは言い、

「うん、そうだろうね」と僕は答えた。僕はバリに来てずいぶんと経っていたけど彼ほどの男前はあまりみかけなかった。英語も日本語もだいたい話すことができたし、僕が日本人であることにもそれなりに気を使ってくれた。僕から見ても他の粗野なバリ人たちとはずいぶん違って見えた。

「もし、わたし、セックス、したい、すぐ、できる、だからね。でも、わたし、コーマン、すき、だからね。せいじゅつ、誠実」とパンディは言った。パンディはカーストという4つの階級のうちの一番高い位にあたるらしく、そういう人たちは家族に決められた相手と結婚するのがほとんどだった。実際に父親からそれなりの相手を紹介されていると言った。

「でも、あい、だったら、だいじょうぶ、だともう」とパンディは言った。「コーマン、わたし、しんじない、だからね。もんだい、になる、だともう」と困ったように言った。

「コーマンと階級は同じなの？」と僕は聞いた。パンディに煙草を勧めたら彼は珍しく受け取った。ストレスのせいだと彼は言った。そして仲間たちと回し飲みしているビールをラツパ飲みした。

「かいきゅう、おなじ、だけどね。コーマン、の、おにいさん、こわい、だからね」と言った。コーマンのお兄さんは毎日彼女を送り向かいしているらしく、最近はなかなか会えないらしかった。隣に座っていた仲間のうちのひとり恋人が3人いるけど、そのうちのひとりがセックスばかり求めるので嫌になって振られてしまったと頭を抱えていた。僕が知る限り世界は無限の問題に埋め尽くされていた。パンディは隙を見計らってレストランに行き、時々キスをするぐらいの仲らしいけど、お兄さんのこともあってどんなにデートに誘っても断られるのだと言った。

「パンディ、どうして問題っていうのはできると思う？」と僕は聞いた。彼はしばらく考えていたみたいだったけど「わからない」と答えた。

「それは考えるからさ」と僕は言った。僕はパンディの太ももをパンパンと叩き、

「例えば、今、何も考えないと問題はないだろう？」

「うーん」と彼は首を傾げた。彼が髪を掻き揚げると少し髪の毛が薄くなっていることに気が付いた。まだ20ちょっとぐらいなのになと思った。宿命というものは避けがたいものなのかもしれない。

「問題というのはものを考えるから生まれるんだ。例えばお兄さんのことを考える、家庭のことを考える、そしてコーマンに会いにゆ

くでしょ？でもパンディは考えているから会う前から自分で問題を作っている、だからね」パンディと話していると僕の日本語も彼に合わせておかしくなった。

「何も考えないと何も問題はない。パンディ、僕は考えないようにものすごく努力している」と彼に言った。パンディは僕がダウのことを好きだということを知っていたし、もちろん彼女に家庭があることも知っていた。

「男ってというのは理屈の生き物、だからね。でも、女は違う、だからね。男が考えれば考えるほど女性に気持ちは伝わりにくい、だからね。考えることによって気持ちの中に『抵抗』が生まれてしまう、だからね。女ってというのはただ素直に感じればいいんだ。考えるは、感じる、できない、だからね」と僕は言った。夜の闇の中にあつた彼の浅黒い顔はあまり晴れやかになつてはいなかったけど、

「楽しく、生きる、だからね」と僕が言うと無理に笑顔を作ってくれた。

僕が感じる限りあつという間に日々は流れていった。一日一日はのんびりしていて長く感じられたけど、過ぎ去った日々を振り返ってみるとそこには何もなかった。相変わらず僕は小説と呼べるものを全く書いていなかった。日本語さえほとんど使わなかった。青空が続く、星たちが現れ、風が通り過ぎていった。歳を取ることをさえ忘れてしまいそうな日々だった。僕には時間と呼ぶようなものさえなかった。そうしたいと思ったときに僕はご飯を食べ、眠くなれば

眠り、そして彼女に会いにいった。バリ人と時間を共にし、そしてその生活に慣れていった。でも僕と彼らとの唯一の違いは僕には終演の時というものがあることだった。僕が日本に帰らなくてはいけない？時？。見えない時間の中にいる僕の生活はそこで終わり、そしてまた時計が動き始める。秒針が進むコチコチという音が生まれ、そして僕の中の何かが消える。

僕は彼女に心を開いていたし、彼女も僕に心を開きかけているということもわかっていた。僕は何度か彼女に「好きだ」と言ってみただけ、彼女はいつも「わからない」と答えた。特に進展もないまま次第に僕たちの会話はだんだんと僕の帰国のことについて話すことが多くなった。彼女は僕に手紙を出すわと言い、僕は彼女のことを忘れないよと言った。彼女はせっかく仲良くなっただからまたバリに来てねと言ったけど今度は僕が「わからない」と答えた。

僕は帰国すれば気持ちは冷めてしまうだろうし、僕が滞在した2ヶ月というバリの生活は日本に帰ったらたちまち別次元の冷凍庫に入られるみたいにただの遠い「よい思い出」で終わってしまうことは僕にはよくわかっていた。今までもよくあつただけで海外で出会って、そこで仲良くなつた人は日本に帰ってから疎遠になることが多い。同じご飯を食べ、同じ生活をしていたから関係が保たれていたものが全く違う時の流れの中に、環境の違うところにゆけば、自然と心は離れてゆくものだと思っていた。そして数多くあつた今までの出会いと同じように「縁がなかった」と思って忘れ去られてゆくだろうということも。

僕は彼女の生活に僅かの間だけくい込んだただの訪問者であり、今の状況ではそれ以上でも以下でもなかった。周りの人々がどんなに僕と彼女をやし立てても彼女は僕のことを「トモダチ」だと言った。僕が彼女に気持ちを打ち明けても彼女は「トモダチ」のままが

いいと僕に言った。基本的にオール・オア・ナッシングの性格の僕はそんな中途半端なものを受け入れるわけにはいかなかった。

僕は彼女がレストランで妹や従妹とじゃれ合ったり、笑い合ったりしているのをとても遠くから見つめているような気分になった。僕がここにいらなくても彼女はこんなふうに楽しく毎日を過ごすのだろうと思った。

僕は日本にいる家族におみやげを買い、彼女も含めて知り合った人達に僕の持ってきた荷物の中でいらないものを彼らにあげようと思つて整理を始めていた。

ある晩のこと僕は勘定を済ませ、そして他のスタッフが二階に行つていない間僕は彼女と一階のキッチンで少し話をした。話しといつても僕が覚えたインドネシア語はまだまだ不十分だったし、相変わらず僕はガイドブックの会話集に頼らなくてはいけなかった。何万年も前から続いている静かな夜にレストランは包まれ、僕は彼女を前にしていつものように何かを伝えたいと思つていた。言葉にならないものを、言葉にできないようなものを。

「じゃあね」とこのあと何万年も続くかのような素敵な微笑を浮かべて「明日は朝のシフトだから、忘れないでね」と彼女は僕に言い、そして僕の胸の辺りをぎゅっと掴んだ。僕は彼女の腰の辺りに手をあて、そして彼女にキスをした。彼女は特に抵抗もせず僕が顔を近づけると顔を上げて僕の唇を受け止めた。まるで最初から決められていたことをしたような気になった。

次の日の朝にレストランに向かうと入り口のギャラリーでばった

りと彼女に会った。彼女はもうひとりのスタッフの女の子と食材の買出しから帰ってきたところだった。僕は挨拶をするとスタッフの女の子が何やら僕に向かって言った。僕はうまく聞き取れなかったのでダユウのほうを見ると、

「どうしてナガは日本に帰るの？」と聞いていると少し言いくるそうに言った。僕は意味がわからなかったたので、

「日本人だから日本に帰るんだ」とスタッフに言った。スタッフは首を振り、

「ダユウがいるのに、なんでナガは日本に帰るの？」と聞きなおした。僕が答えられず黙っているとそのスタッフは中に入っていた。僕たちは表通りに人がいないことを確認してからまたキスをした。

僕はパンデイのところに行き、滞在を延期したいのだがどうしたらいいかと聞いた。パンデイは知り合いのオフィスに連れて行ってくれて手続きを手伝ってくれた。

「あい、だからね、あい」と彼はにんまりとして僕に言った。

僕はインターネットカフェに行き、

「僕は芸術家としてここでやらなくてはいけないことができたため、もう一ヶ月バ리에います」と、いまいち意味不明なメールを母親に送った。それから本屋に行き日本語―インドネシア語の辞書を買った。

彼女にそのことを告げると弾けるようにして僕に抱きついてきた。彼女の黒く深い瞳を見つめ、抱きしめてキスするときに、彼女の唇

に僕の唇が重なる一瞬手前に、僕はようやく忘れていた彼女の匂いを思い出す。長い年月炊かれたお香の匂い、むせ返るような花の匂い、そして象徴的な「アジアの匂い」。その匂いが僕の心の奥のほうにある記憶に触れ、それと同時に僕たちは重なり合う僅かな時間を共有する。でも僕はいつか、おそらくは近いうちにぶつからなくてはいけない「問題」があることもわかっていた。

しかし彼女に会えばすべてが吹き飛んでしまう。考えるべきことが微笑みに飛ばされ、迷いが触れ合いによって溶かされ、恐怖心が口付けによって吸い取られる。僕はそこにあるのだと、僕の求めるもののものを僕は触れることができ、見ることができ、感じる事ができる。あまりにも簡単で、あまりにも切ない。そのために僕はすべての時間を費やし、それを感じたいと思う。この切なさの向こうには何があるのか、そこにはどんなやさしさがあり、どんな触れ合いがあり、どんなささやきがあり、どんな開放があるのだろうか。二人のためにどんな朝があり、陽だまりがあり、風があり、空があるのだろうか。時間を焼き切ってしまうような熱さがあり、皮膚が剥がれるような寒さがあるだろう。

僕はただ純粹にそれを知りたいと思った。彼女は僕に何を求め、僕は彼女のために何を失い、そして得るべきなのか。そこに理由はない。理由と呼ぶことのできるほど形になるものは何もない。いつも乾きだけがそこにある。一滴の雫によって無理やりに生かされている無残な血の滴りがあるだけだ。

僕はそれからレストランに通い続けたけれど、やっぱりなかなか

か二人きりになって話すことはできなかった。タイミングが合わなくて一言も話せない日もあった。それでも僕は彼女のことをよく見ていたから彼女が長い髪をよく束ねたり解いたりする癖があることを知っていた。おそらくは髪が重いため縛っていてもすぐに解れてしまふのだろう。僕は彼女が髪を縛るのに使っていた輪ゴムをピンピンとひっぱって「これ、気に入ってるの？」と聞いた。

「ちがう、ちがう、他にない」と言って恥ずかしそうに手でパツと隠した。「ちよつと痛い、これ」と彼女は言っただけど、確かにそれはふつうに家庭用で使うような輪ゴムだったから粘着力があつて痛いのだろう。

僕はよい機会だと思つてウブドの町を髪留めを探して歩き回つた。でもあまり良い物を見つけることはできなかった。そういうところにお洒落をするほどまだ全体的な生活の余裕というものがないのだろう。僕は観光客向けのガラス張りの綺麗な店でようやくまともな髪留めを見つけ、それをプレゼント用の箱に入れてもらった。

夕方にレストランに行つて二階の席を掃除していた彼女にそれを見せると「ありがとう」と言つて喜んでくれた。屈託のない、素直な微笑だった。でもなぜか遠慮がちになかなか受け取らなかった。そのうちに他のスタッフの姿が見えたので僕はひとまず自分のバックの中に入れてしまった。まあ、帰るときに渡せばいいかなと思つた。彼女は席に座っている僕の横を通り過ぎるときなんか「ちよつとまってね」と言つてにつこりと微笑んだ。

僕はいつもそうするように彼女の妹と下らない話をしたり、本を読んだり、インドネシア語の勉強をしたりして時間を潰していた。オーダーが入ると彼女がトントンと野菜を切る姿や、鍋を振る姿やなんかを眺めていた。ここのレストランは裏庭の池にナマズを飼つて

いて、ナマズ料理のオーダーが入ると網を持って一緒に掬いにいたりした。夜なんかは暗くて見えないのでナマズを探して30分ぐらい池の中を引つ掻き回していたこともある。何をするのにもとにかくのんびりなのだ。僕が他のレストランに行つてオーダーしたときも食材が足りなくてスタツフが買いに出かけたり、実際に鶏を殺しているのをみたこともある。豚肉の料理を注文したときも豚を捕まえに行っているんじゃないかというほど待たされることもあった。

その夜は運悪く（？）客がよく入り、なかなか彼女と話すことはできなかった。彼女は忙しくキッチンを歩き回り、使い終わった鍋や皿なんかを洗っていた。なぜだかわからないけどバリ人の男が4、5人レストランにやつてきてキッチンの近くでわいわいとしやべっていた。

僕はひとりで離れた席に座り、薄暗い店内で煙草を吸いながら開け放たれた暗い田んぼを見るときもなしに眺めていた。カエルが鳴き、虫が鳴き、煙草の煙が闇の中に吸い込まれていった。僕は少しはインドネシア語もわかるようになってはいたけど、僕に向かって気を使いながら話するときと違ってバリ人同士がしゃべっている僕には何を言っているのかさっぱりわからなかった。僕にとつてはカエルや虫の鳴き声と同じように理解できないただの「音」だった。どんなに人がいても僕がそれを理解できなければ、僕と何かを繋ぐものなどないものだ。その夜は僕はひとりで誰もいない広大で静かな世界の果てでビールを飲んでいるような気分になった。ひとたび僕が周りの何かを断ち切られれば僕は孤独な穴の中に戻るしかないのだという気がした。

彼女はその日肩のところに紐をぶら下げたちよつとお洒落なティシャツを着ていた。いつも着ているプリントした文字が霞んでしまったティシャツや店の名前の入ったものに比べるとずいぶん魅力的

に見えた。でもその紐が何かの拍子に解けてしまったのだろう。彼女は片手に包丁を持ちながら一人の男の所に近づいてゆき肩を差し出すと、その男はその紐を縛り直してあげた。僕は遠くに座っていたから何を話したのかまではわからなかったけど、彼女とその男の雰囲気の中には何か特別なものがあつた。その男はバリ人にしては少し髪が長く、わりにさっぱりとした格好をしていた。そして彼女が紐を結んでもらっている間も彼女がその男に対する気遣いというものとは全く感じられなかった。二人が近寄ったときも違和感というものではなく、まるでいつもやっていることのような自然な態度だった。彼女はその男にお礼の態度を示すわけでもなくすぐにまた料理の続きに取り掛かった。

僕はおそらくその男と彼女は深い関係であるのだろうと思った。夫なのかもしれないし、バリでは恋人が何人いてもかまわないとパンデイが言っていたからその中のひとりなのかもしれない。気が付くと店は閉店時間になっていた。僕が勘定をすませると店の照明は消され真っ暗になった。ギャラリーに戻る暗い道の中で彼女の服の紐を縛ってあげた男が、

「おい、ダユウ、行くぞ、ダユウ！」と叫んでいた。

僕がレストランを出て、宿に戻る途中にバイクのエンジンがかかる音がいくつか響き、そして重なり合うように消えていった。僕は人気のない道路を横切り、宿に向かう細い路地を進んだ。遠くで野犬が喧嘩するようなワンワンという声が聞こえた。街灯のない暗い空の中にはいくつもの星がばらまかれ、それぞれに輝いていた。

僕は彼女に渡せなかったプレゼントの箱をゴミ箱に入れ、そしてベッドに寝転んだ。広々とした部屋の中、天井ではファンが回り、そしてカエルが、虫が、気ままに鳴いていた。そしてやっぱり僕はこ

ここに戻るべきなのだろうと思った。

「結局、何も無いんだよな」と僕は久しぶりに日本語というものを発した。誰かに向けて、あるいは自分自身に向けて。

昼頃まで僕が寝ていると誰かがドアをノックした。ドアを開けるとニョマンが立っていて、クタの友達から電話だと言った。電話？と僕は思った。電話なんてこの宿にあったのかと思ったら隣の家に連れていかれた。どうやら共同で使っているらしい。ユウに以前宿の名前をメールしておいたから、クタの友達というのはたぶんユウだろうと思ったけど電話をしてきたのはダユウだった。

「ハロー、元気？」と彼女は言った。僕は混乱していてわけがわからなかったけど反射的に「元気」とだけ答えた。それ以外の言葉は出てこなかった。彼女は何かを言ったけど僕は全然聞き取れなかった。だいたいどうしてこの宿の電話番号を知っているのか、どうゆう用件なのかもわからなかった。会って話すぶんには表情や仕草で相手のことを読み取ることができるけど、電話だと何を言っているのか全然わからない。

彼女はしばらくここによこによと何かを言ってから「スーパーマーケット、イマ、イマ」と言った。

「今？」と僕は答えた。

「イマ、ナガサン、スーパーマーケット」と彼女は言った。

「今、僕がスーパーマーケットに行くの？」と僕が知っている限り

の単語を並べてそう言った。

「うん、イマ、イマ」と彼女は言って、スーパーの名前を告げた。僕は受話器を降ろしたけど、しばらく頭の中を整理しなくてはいけなかった。僕は素早くいい加減に歯と顔を洗い、ゴミ箱からプレゼントを拾ってスーパーに向かった。

閑散としたスーパーの駐車場にいと彼女がバイクに乗ってやってきた。彼女はヘルメットを脱ぎ、僕の腰に手を回して微笑んだ。二人で中に入り、飲み物を買い、店員に見られないように棚の間に隠れてキスをした。僕がプレゼントを渡すと彼女はありがとうと言って受け取った。

「ねえ、僕の宿に来ない？」と僕は言った。

「だめ、だめ、みんな、知ってるでしょ。わたし、行けないわ。それに、時間、ないの」と彼女は言い、そわそわしたように周りを気にしていた。スーパーの店員もちらちらと僕らのことを見ていた。バリ人と日本人のカップルがこんな狭い田舎の町で目立たないはずがないのだ。

「わたし、もう帰らなくちゃいけないの。ねえ、ナガサン、明日もレストランに来れる？」僕は行くよと答えた。でも僕はまだ会ったばかりだし、もっと話がしたいと彼女に言った。

「どんな話が見たいの？はやく、はやく」と彼女は言ったけど、僕には言葉がなかった。だけど僕には彼女に伝えたいことがまだたくさんあった。

「ねえ、ダユウ。手紙書くよ」と僕は言い、時間が過ぎるのをもと

かしく感じながらも持つてきた辞書で「文法」という言葉を探し、

「英語とインドネシア語の文法って同じ？」と彼女に聞いた。彼女はだいたいは同じだと答えた。

「ねえ、わたし、もう帰らなくちゃ、ナガサン、明日レストランでね」と彼女は言っただけでまたバイクの停めてある駐車場に戻った。僕はもう一度キスしたいなと思って顔を近づけると、

「だめよ、もう」と彼女は照れながらそう言い、僕の胸の辺りを突き返した。

彼女がバイクに乗って去ってしまっただけで僕はまだかなり混乱していた。一体なんだったんだろうと思った。でも考えたところではわからないのでとにかく宿に戻って手紙を書くことにした。一瞬パインディに手伝ってもらおうかとも思ったけど思い直してやめた。そんなことをすれば、ウブド中に手紙の内容を公表するようなものだからだ。一度なんて顔も見なかったバリの男に「ヘイ、ナガ、レストラン B a g u s のダユウ好きなんだろ？」と聞かれたことがあった。

できるかどうかかわからないけどとにかく自分でなんとかするしかないなと僕は思った。

ダユウへ

お元気ですか？今日は突然電話があつたのでとてもびつくりしました。どうゆう用件だったのかも僕にはさっぱりわかりませんでした。僕はあなたのことを好きだといつも言っていますが、いつもあなたは「わからない」と返事します。

おそらく僕とあなたの間ではひとつひとつの言葉が持つ意味や、その感覚が違うからでしょう。それはしかたがないことだと思えます。はっきり言って僕はあなたが何を考えているのか、そして僕が何を考えているのかお互いに全然理解できないのだから。僕はインドネシア語もできないし、あなたのことをもつと知りたいと思つても言葉で伝え合うことは難しいですものね。でも僕はあなたの温かい微笑や、澄んだ声や、花のような匂いがとても好きです。そして僕は言葉では言えないその部分に恋をしているのだらうと思います。僕はあなたの言葉を多くは理解できないけれどあなたのその迷いや、憂いや、戸惑いや、嬉しさや、切なさを感じることはできます。

僕にはあなたの生活や家庭のことは全くわかりません。バリの文化や社会がどういうものなのかもわかりません。あなたには家庭があり、そしてさまざまな問題を多く抱えていることは僕にもなんとなくわかります。ただひとつわかることは僕はあなたを求めているということです。ただ僕はあなたを求め、そして感じていたいと思います。

もし今僕が泊まっている宿にあなたが来ることができないなら僕は宿を変えようかと思っています。それじゃあ、またね。

ナガ

というような手紙を僕は書いた。僕はまず伝えたいことを日本語でパソコンに打ち込み、それを頭の中で英文に置き換え、そしてインドネシア語の辞書で単語を調べて手紙を書いた。かなりの時間がかかったけど他にすることもなかったのだ。たつぷりと時間をかけて手紙を仕上げた。でも仕上がったものを見てみるとこれで本当に彼女が理解できるか不安になった。

それから僕は新しい宿を探しに行った。あまり高くなくて、電話が付いていて、なるべく人目に付かないところが良かった。でも僕が歩いて移動できる範囲で人目に付かない宿を探すことは不可能だった。町中バイクがびゅんびゅん走っているからだ。僕はレストランから歩いて10分ぐらいの「ホテル・ポンポン」というお寺のよな感じの宿に引越すことにした。

「電話はある？」と僕が聞くと、スタッフルームにあると案内してくれた青年が言った。宿のスタッフに地図と電話番号が書いてあるカードを貰い、明日移ってくるからと言った。

僕がニョマンやパンデイにそう言うとなんか驚き、残念がった。彼らは理由を知りたがったけど、僕は一ヶ所に長くいると生活に刺激がなくなるから新しい環境に移りたいのだと言った。

僕はレストランに行き、彼女に手紙と移動先の宿のカードを渡した。そしてたぶんその宿に移ることになると彼女に言った。彼女はそのカードを大事そうに財布にしまっていた。

次の日に宿を移るため大きなリュックを担いで道を歩いていると

その横をダウがバイクに乗って通り過ぎていった。彼女はクラクションを二回鳴らし、僕に手を振った。どうやら運が向いてきたようだなと僕は思った。

僕は新しい宿に着くとオーナーとスタッフを呼んで僕がここに移ってきたことは絶対に秘密にしておいてくれと言った。彼らはわかったと言って頷いた。

移動した宿は部屋そのものはあまりかわらなかったけど、前のところから比べるとあまり綺麗とはいえなかった。以前と違うのは部屋が二階になっているということ、部屋の前にテラスがあるのではなくて、部屋の奥にはテラスに出る扉があって、テラスはベランダのような作りになっていた。

二ヶ月も住み慣れた場所から移動したのだからなかなか落ち着くことはできなかった。誰かが使った部屋であり、僕の知らない時間が流れ、見知らぬ壁が僕を阻み、天井は僕を押さえ込み、感じたことのない風がどこから吹き込んでくる。部屋の汚れひとつひとつは僕の失った過去のようにとりとめもなくそこらじゅうにへばりついている。カーテンは日に褪せ、椅子は擦れて剥げかかっているし、トイレからはざわざわと肌を這うような匂いに満ちている。でもだんだんと同じ部屋にいることに慣れてくると、そんなものひとつひとつが僕の一部であるかのような親密さを増してくる。外から帰ってきて、僕の置いた場所に灰皿が待っていてくれるし、僕の使っている石鹸が匂いを侵し始め、何時にどの窓からどうゆう角度で太陽の光が入ってくるのかわかるようになる。時間がここにあり、そして僕がここに帰ってきたということがわかるようになってくる。新しい刺激がそこにはあった。確かに新しい環境に行くということはないかな良いものだなと思った。

僕は飲み物など必要なものをスーパーに買いに出掛け、ご飯を食べて宿に戻った。そしてベッドの上に座り、今までのバリの生活を振り返った。最初の頃のドタバタを別にすれば彼女のことしか思い浮かばなかった。僕はようやくここで彼女を抱くことができるだろうと思った。

次の日の夕方、僕がレストランに向かうときにパンディに呼び止められ、

「ながさん『ホテル・ポンポン』いった、だとおもう」と言われた。とにかくオープンな文化なのだ。

僕がレストランに入ると彼女は手招きして僕を呼び、すぐに誰もいない二階席に連れていった。

「昨日、夜、わたし、ナガサン、4回、電話。ナガサン、いない」というようなことを彼女は身振り手振りで僕に言った。昨日の夜？と僕は思った。昨日の夜は彼女は仕事だと思っていた。僕は引越しをしてバタバタしていたので昨日はレストランに来なかったのだ。どうやら急にシフトが変わったようだった。

「わたし、ナガサン、にほん、帰ったと思った。カード破いた」と彼女は両手で引き裂く真似をした。今までになく、目が血走っている、声もギスギスしていた。

「昨日、夜、7時、わたし、電話」彼女は手で電話の形を作り、耳にあてた。「ナガサン、いない」彼女は僕が近づいても離れてゆくように僕と距離を置いていた。

「昨日、7時、僕はいたよ」

「いいえ、いない」と彼女は髪を揺すって言った。

僕は「いたよ」と繰り返し、彼女は「いない」と繰り返した。昨日の7時ごろ僕は何をしていたんだっけ・・・と、ものすごく真剣に考えてみたけどわからなかった。時間の感覚というものが僕にはまるでなかった。

「宿のスタッフ、いない、僕はいたよ」と僕は言った。

「いない！」と彼女は大きな目をさらに大きくして言った。

「わたし、カード、捨てた」と彼女は言った。僕は彼女に「たぶん」ホテル・ポンポンに移ると言った。でも「たぶん」というのは彼女の中に存在しない言葉だったのかもしれない。彼女が4回も電話したならそのうちの何回か僕は宿にいたと思ったけど、スタッフがいなかったら誰も電話に出ないのだ。そう思ったところで彼女にそれを伝えられるわけではなかった。僕は突然彼女が怒り出したので気が動転してすぐにインドネシア語が出てこなかった。

僕はとにかく「ごめん、ごめん」と言っただけ僕は用意しておいた部屋番号を書いておいた新しいカードをバックから出し、彼女に差し出した。

「いない」と彼女は手を振った。「わたし、ナガサン、にほん、帰った、思った。わたし、昨日、眠れない」と言っただけ奥のカウンターの向こう側に回ってしまった。

僕が感じる限り本当に彼女はもう連絡してこなくてもおかしくないほど怒っているみたいだった。しばらく重苦しい沈黙が流れ、僕は自分の額に手を当てて下を向いてうなだれた。そして鼻から深く細長いため息のようなものを吐き出した。僕がもう一度差し出したカードを彼女は受け取ったけれどもそこに両手を被せ、破る仕草をした。

「いいわね……」という彼女に僕は一秒ぐらい目を閉じて、少し首を横に振った。僕が彼女を見つめると、今彼女から目を逸らすと絶対にダメになるというほど重く、まっすぐな視線が僕に注がれていた。僕は直感的にそれを感じた。もしここで一瞬でも僕が彼女から視線を外すと、もう取り返しがつかなくなるかもしれないと彼女の目の輝きの中にはそれほど確信に満ちたものが漂っていた。その沈黙の中、カードを持っている彼女の手に僕の手を重ね、

「僕がそこに移った、ダユウのため」と僕は言った。彼女の瞳からはだんだんと不安の色が薄れて行き、やがてそこからいくつかの雫が流れ落ちた。

「昨日、わたし、電話したの。でも、ナガサン、いない。わたし、昨日、眠れない」そう言った彼女の声はもういつものトーンに戻っていた。僕はカウンターを回り込もうとすると彼女もやってきて僕の胸の中でもう少しだけ彼女は泣いた。

彼女がそんなに感情をさらけ出したことはなかったの、僕はかなり驚いていた。しかしそれからはいつものように冗談を言ったりふざけあったりして彼女の機嫌も良くなったようだった。僕が帰るときに彼女は他のスタッフに見られないようにして、

「わたし、明日、仕事、休み。電話ね、ナガサン」と嬉しそうに言

った。

次の日、僕が慣れないベッドで目を覚まして最初に思ったことは、ブラックホールのような深くて真っ暗な眠りだったなということだった。そして彼女からの電話を待つことになっていたから、早々にご飯を済ませ、そして念のため昼ご飯もテイクアウトし、わき目も振らず宿に戻った。

シャワーを済ませ、念入りに歯を磨き、そしてテラスで音楽を聴きながらまだ見ぬ希望に満ち溢れた一日の始まりを思った。遠く青々とした空を眺めながら「その時」のことを考えていた。

彼女がこの宿に来て姿を見せるその一瞬、そしておそらくは僕に笑顔を見せるその一瞬、そして彼女を抱く一瞬の刹那「その時」を夢見ながら。

僕は風に当たり、感情は流れてゆき、希望は大空に広がり、期待は僕を駆り立てた。テラスと部屋の間を何度も往復しながら僕はできるだけ焦らないように心がけながら彼女を待った。ほぼ確信した期待を待つのも悪くないもんだなとその時は思った。胸の鼓動は楽しさに高鳴り、僕の体が求めているものがもうすぐそこまで来ているのだという自分をゆっくりと感じることができるとするならば・・・。僕はテラスの椅子に座り、音楽は少し音量を上げ、僕の気持ちをリズムに乗せて空に打ち放つような開放感に浸っていた。

そんな時間が二時間ぐらい流れた後、スタッフが電話だと言って

僕の部屋に来た。僕はちょうど煙草に火を点けたばかりだったけど煙草を灰皿に置くのも面倒くさく、手に持ったまま電話のあるところに向かった。

「ゲンキ、ですか？」と彼女は日本語で言ってから少し笑った。

僕も少し笑ってから、

「元気？」とインドネシア語で答えた。声の調子からしてけっこう機嫌がいいみたいだなと僕は思った。

「今どこ？」と僕は聞いた。

「スーパーマーケット」

「来れる？」と僕は言った。

「いいわよ」と歯切れ良く彼女は答えた。

「今？」

「今、大丈夫よ」

「じゃあ、後でね」

電話が終わってから、僕は一旦部屋に戻り、もう一度軽く歯を磨き、宿の玄関の辺りに座り彼女を待つことにした。彼女が来たら一応テラスにでも座って話したほうがいいのだろうか、ご飯や飲み物は要らないか聞いたほうがいいのだろうか、それともやっぱりすぐに彼女を求めたほうがいいのだろうか。そんなどうでもいいような

ことが次々に浮かんできては、彼女が玄関の門を潜って僅かな段差を降りてくるところを待ちわびた。すぐ来るということはおそらく5分もかからないかもしれない。僕はいじらしい待ち時間を紛らすために、さっき吸ったばかりだったけどもう一度煙草を吸った。そして彼女が現れるはずの入り口の門をじっと眺めた。

煙草を吸い終わり、しばらくしても彼女は現れなかった。でも僕はこの日が来るのをずっと待ちわびていたのだ。なんでもない普通の一日に、なんでもない普通のセックスという行為をすることを。僕にとっては特別なことであっても、そこたらじゅうの人々は当たり前前にそんなことはやっているのだ。

僕はお寺の境内のようなホテルの庭で少年時代に戻った時のような親密な空気と時間に包まれていた。目の前にはざらざらしたコンクリートがあり、その隙間からは小さな雑草が顔を出している。垣根の向こうには木がそびえていて、その木の枝を切り添えているおじさんがいる。僕が座っているところには蟻が何匹がうろうろしていて、忙しそうに働いていた。そして肌を舐めて溶かしてしまいそんな強い太陽の光があたりに降り注ぎ、僕は静かにその中に含まれている一部となっている。

彼女はまだ来ない。二本目の煙草に火を点けると思い出したように木の上のほうで蝉が鳴き出した。そういえばバリの蝉はどんな姿をしているんだろうと僕は思った。

僕はどうして彼女がまだ来ないのか考えてみた。もしかしたらスーパーで買い物をしてから来るのかもしれない。僕はバイクの音が響くたびに門の向こうからちよつとだけ見える大通りに目をやり、切り取られた世界のこちら側から彼女を待った。通りの向こう側には猫が一匹どこを見てもなしに座っていたけど、しばらくするとピ

ヨンとジャンプし、塀を乗り越えて小さな視界から消えてしまった。

門を潜ってやってきたのはバリ人と西洋人の男の二人組だった。

僕は目を合わせないように門から視線を外さずにぼーっとしていたけど、僕の横を通り過ぎた時に西洋人の酸っぱい腋臭の薄めたような匂いも通り過ぎていった。

それから二人は部屋を見たあと、門の近くに腰を下ろして15分ぐらい何かを話していた。西洋人は見るからに偏屈そうなメガネをかけて、バリ人が脱いだサンダルを踏みつけているのも気づかずラベラと早口の英語で多くの質問を浴びせかけていた。僕は興味がなさそうにして、三本目の煙草に火を点けた。そしてもう考えるのは止めようと思った。彼女が来ると言うからには彼女は来るのだろう。じたばたしないで「その時」が来るのを待てばいい。簡単なことだと思ふことにした。

二人が出て行ってしまうと僕が座っている場所がだんだんと日向になっていくことに気付き、さっきの二人が座っていた日陰の場所に移動した。僕はひとりで、懐かしい夏の光のなかで彼女を待ち続けた。座っているのにも少し疲れてきたので僕はフロントのタイルの上に蟻を潰さないように気をつけながら寝転んだ。

屋根があつた。ピラミッドの中から真上を見上げるように三角に作られた屋根だった。僕は木でできたその梁の一本一本を眺め、そしてこれを作ったのかかったであろう時間を想像した。何人で作ったのか、何日かかったのか。でもそんなことはわからなかった。

おそらく僕が彼女を待っているよりも長い時間がかかったであろうということはわかった。しかし何の慰めにもならなかった。もしかしたら彼女はここの宿の場所がわからないのかもしれないと思い、

門を潜つて大通りまで様子を見に行つた。しかし僕の姿を大勢の人に見られるのは良くない。僕は彼女から電話があるかもしれないと思つたけど、電話のある部屋には鍵が掛かつていて、スタッフは誰もいないみたいだつた。

少しお腹が空いてきたので僕は買つて置いたご飯を部屋に取りに行き、同じ場所に戻つてそれを食べた。それでも彼女は来なかつた。彼女から電話があつてからどのくらい時が過ぎたのかわからなかつたけど、部屋に戻ることはできなかった。もし彼女が来ても、僕の部屋がどこにあるのか知らないし、スタッフは誰もいないのだから僕がここにいて待つてゐるしかない。

「あなたいなかつたじゃない」なんてことになったら、昨日の騒ぎではすまなくなる。

僕は部屋から本とインドネシア語の辞書を持つてきて、時間を潰そうとしたけど、そんなものに集中できるはずがなかつた。門の前を誰かが通ると、勝手に意識がそこに向かつてしまい本の話が途切れてしまうからだ。

持つていた煙草を吸い終えてしまい、買い置き of 煙草を取つて戻つてくると最初に座つていた場所は完全に太陽の光に侵され、今度は反対方向からの影がその場所を覆い隠そうとしていた。それを見た時に彼女はもう来ないかもしれないと僕は思つて部屋に戻つた。

こんなに何かを待ち疲れたのはいつぶりのことだろうと考えてベッドに倒れこんだ。彼女が部屋のドアをノックする音で目覚めたいなと思つて眠つてしまいたいと思つたけど、眠れるはずがなかつた。部屋に戻つたからと言っても彼女を待つ気持ちが変わるわけではなかつた。

僕はなぜ彼女が昨日涙を流したのかもものすごく理解することができた。そしてそれを思い出していると僕も勝手に感情が溢れ、それが涙と言う形を持ってこの三次元という世界に出てくるのがわかった。目を擦りながら僕は失いつつあるものがあるのかぼんやりとわかるような気がした。それは限られた時間であり、限られた場所であり、限られた言葉であり、限られた感情だった。僕らは互いにわかつているのかもしれない。限られたものであることを知っているからそれを大切にしたいということ。

僕はとにかくまた手紙を書くことと思って辞書を引き始めた。しかし、その一ページ一ページから言葉を探すうちに今の感情を表す言葉なんてどこにもないことに気が付いた。どんな言葉も僕の感情にぴつたりと当てはまるものなんてなかった。僕は辞書を思いっきり壁に投げつけ、言葉というものを放棄した。

僕は自分でも信じられないくらい彼女に恋をしていた。狂おしいほどに彼女を求めていた。そんなことには気が付きたくもなかったし、気が付いたところでどうにかなる問題でもなかった。結局僕は放り出した辞書を拾い彼女に手紙を書いた。

たどたどしいインドネシア語で手紙を書いてしまうと、少し気持ちが外に出て落ち着いたような気がした。それだけのことを書くのにずいぶんと時間がかかったけど、読み返してみると下らない短い手紙にすぎないような気がした。またテラスに座って音楽を聴き始めたけど、音を大きくしてもどうしても音が耳に入ってこなかった。自分でCDを選んだはずなのに何の音楽がかかっているのかよくわからなかった。

辺りが薄暗くなってきたけど、どれだけ待っても彼女は現れな

ったし、電話もなかった。もしかしたら昨日のように電話したけど誰も電話を受ける人がなくて怒ってまたカードを破いているのかもしれないと思った。昨日みたいにとえ下らない誤解であったとしても彼女が怒っていることには変わりはないのだ。そしてそれを埋め合わせることのできる言葉を僕は持っていない。

ご飯も食べに行けないし、気分転換もできない僕は煙草をひっきりなしに吸った。棚に置いてあるウオツ力を飲みたかったけど、もし彼女が来た時に酔っ払っているのも良くないのでできなかった。

昨日7時に電話したと言っていたからその辺が彼女のタイムリミットであるのだろうと僕は思った。でも7時に電話して、それから来るとして、少なくともたぶん9時過ぎぐらいまではここにいるだろう。僕は9時を自分のタイムリミットに決めた。それを過ぎたらご飯でも食べに出て、酒を飲んで寝てしまえばいい。でも朝起きた時の寂しさのことを考えると、酒を飲むことの意味のなさが後から後から襲い掛かってきた。

僕は一体どうしたらこんな下らないすれ違いを避けることができるのだろうと思った。彼女はもう一度許してくれるだろうか、求めてくれるだろうかと僕は思った。彼女がそうしたように眠れずに時間が止まってしまったような長い夜が、僕を包み込もうとしていた。僕は真つ暗なとばりの中で彼女を想い、彼女が僕を想っていることを望んだ。

僕がレストランに向かう途中いつものように「ヘイ、ナガ、調子はどうだ?」とか「トモダチ、ドコ、イキマスカ?」と声を掛けられたけど彼らに構っている余裕はなかった。

僕がレストランに着くと彼女はちょうど店の入り口で水撒きをしていたところだった。彼女は僕の姿をチラッとだけ見たけど何事もなかったかのようにホースで水撒きを続けていた。

「ダユウ、昨日はどうしてこなかったの？」と僕は近づいて言った。

「わたし、ナガサン、話したくない」と彼女は横目で僕を見てそう言った。

「どうして来なかったの？」と僕は言った。

「どうして？わたし、スーパーマーケット、ずっと、待つ。ナガサン、こない。わたし、ナガサン、話したくない」と言っただけで彼女は店の中に入って行った。

僕は彼女を追いかけて手紙を渡したけど、彼女は振り返りもせず「いない」と言っただけで断った。話にもならないような感じだった。

まずまずの出だしだと僕は思った。ようやく最初の扉が開き、ざわざわと木々が揺れ始めた。おそらくは雨が降り出して、風が強くなってゆくだろう。気象庁は警報を出しているかもしれない。

僕がレストランに二階席にいと彼女がツカツカと階段を上がってきた。

ラウンド2だ。足を使わなくてはいけない、と僕は思った。僕は彼女にもう一度手紙を差し出し、読んでくれと言った。それですべてがわかるはずだと僕は言った。彼女は手紙を受け取ると破る真似をしたので、僕は頼むから読んでくれと言った、彼女はそれをポケット

トにしまった。

「ダユウ、僕はインドネシア語ができないんだ」と僕は言い、手紙を読んでくれと繰り返し返した。

「こんなところで、読めない、他のスタッフが、いるじゃない」と彼女は言った。「ナガサン、わたし、昨日、スーパーマーケット、一時間、待った。わたし、バリ人の女性。それがどういうことなのかわかる？」と僕をまっすぐに睨みつけてそう言った。僕はわからないと答えた。

「わたし、ナガサン、もう会いたくない」と彼女は下に降りて行くとした。僕は彼女を捕まえ、とにかく手紙を読んでくれと言った。それ以外に僕が言えることはなかった。

「わたし、ナガサン、他に女いるんだと思う。ナガサン、昨日も、一昨日も、問題。わたし、もういや」と彼女はテーブルに座って言った。僕が何かを言おうとすると彼女は「もういや、もういや」と怒りに満ちた目で僕にそう言った。

そろそろ雷が鳴り出すころかもしれない。足を止めてはいけないと僕は思った。彼女は一昨日と同じようにカウンターの向こう側に回ってしまった。僕は簡単な日本語と英語ともどかしいインドネシア語を使って彼女が手紙を読んでくれるまでに10分も説得した。彼女はようやく手紙を取り出しそれを読んだ。そこにはこう書かれているはずだった。

僕は宿であなたを待っていますがあなたは現れません。どうして

こうなってしまうのか僕には全然わかりません。確かに僕とあなたとの間には多くの問題があると思います。どんな言葉をもつてしても僕の気持ちを伝えることはできません。僕は観光客でも日本人でもありません。僕はあなたを求めているひとりの男なのです。僕はただあなたを愛したいだけなのです。僕はそれ以外、何も望んではないのです。僕は神を呪い、運命を呪い、僕とあなたの間にあるすべての障害を呪います。

彼女はその手紙を読みながら涙を流していた。しかし読み終えてから彼女は言ったのは「ナガサン、わたし、できない」だった。

彼女は声を出さないように泣き続け、僕は外に広がる景色を見ていた。夕焼けの空が赤く染まり始め、海のような広大な田んぼには風がそよぎ、表面がゆつたりと揺れ、彼方に一筋の真つ白な鳥の群れがゆつくりと旋回しているのが見えた。特に何の特徴もない景色だった。ただ雄大で、自然のままに、そこに存在しているだけの景色だった。しかし誰が何と言おうと「なにもない」その景色は美しく僕の目に映った。おそらくは僕の心の中に深々と刻まれ、消し去ることのできないほど美しく汚れのない世界だった。

そしてそれを見ながら僕はこれまでに僕の人生の中で失ってきたものを思い出した。僕はこの下らない人生の中でさまざまなものを奪われ、そして失ってきた。おそらくは失う必要のないものさえ僕は失ってきた。あるいは僕は人生というそのものを僕は失ってきた。そしてどうあがいたところでそれらは僕の元には帰ってこないものなのだと思った。そう、僕は目の前に広がるこの景色と同じなのだと思った。そしてまさに今ここにいる彼女をも失ってしまうのだと僕は思った。僕はカウンターの上に両肘を付き、祈るようにして下

を向いて泣いた。

「ナガサン、やめて。ナガサン、やめて」と彼女は言い、僕の顔を上げさせ、涙を拭いてくれた。

「愛しているんだ」と僕は言った。僕が知っている言葉はそれぐらいしかなかった。

「ナガサン、わたし、できない」と彼女は言った。

僕の中の何を振り絞っても僕には言葉というものが見つからなかった。どこを見回しても僕はそれを手にしてはいなかった。

僕は空っぽのその手でカウンターの思いつ切り叩いた。

「ナガサン！」と彼女は言い、泣きながら僕の手にも何度もキスをしてくれた。

「愛しているんだ」と僕は言い、浅黒い彼女の頬に流れる涙を拭いた。彼女は色を失った目で僕を見て、小さく首を振った。

「ダユウ、愛しているんだ」と僕は言った。僕は彼女の手を取り「もう一度」と言った。しばらくしてから彼女は頷いた。

神々の怒りは収まり、ようやく世界は元の景色に戻っていった。彼女はカウンターから出てくると、

「これ以上、近づいちゃダメよ」と言って、自分の周りに円を書くような仕草をした。僕は片足を伸ばして彼女の太ももあたりに触れた。

「バカ」と言って彼女は僕に抱きつき、塩っぱいキスをした。

僕は部屋に帰って自分のベッドにどっかりと腰を下ろすと、

「運命か……」という言葉が自然に口から出てきた。

それから僕はプリペイド式の携帯電話を買った。僕は彼女に番号を教え、僕が帰国するときにプレゼントすると言った。面倒なことにならないように他の誰にも番号は教えなかったし、僕が携帯を買ったことも言わなかった。

彼女は僕にこれからはあまりレストランに来ないでと言った。もしも「トモダチ」でいいのなら毎日来てもいいけど、これ以上他のスツツに知られるのはよくないのよ、とこそそと僕に耳打ちした。僕はいつの間に恋人になっていたのか知らなかったけどわかったと答えた。

彼女との初めてのデートは僅か一時間足らずだった。僕らはスーパーで待ち合わせると中心街と逆のほうにバイクを走らせ目に付いたカフェに入った。道路を走る車は木の陰になり、走り去ってゆく音だけが耳に届いた。カフェには他の客はいなくてレジの向こうの

スペースに20歳ぐらいのバリ人の女性が毛布を地面に敷きその上で寝ていた。

僕はテーブルに座ると彼女はファントオレンジを注文したので、僕も同じものと言った。僕は他にすることもなかったのではないぶんインドネシア語を覚えて、彼女の話しきもだいぶんわかるようになっていた。

最初はいつものように楽しく話をしていた。しかし僕はその中に彼女が何かを避けたがっていることがわかった。そういう匂いや仕草は節々から感じることもできた。結局僕は新たな問題の沼の中に入っていかなければならないのだと思った。僕はこうして会っていて何か問題はないのかと聞いた。

「ねえ、ナガサン」と彼女は少し表情を固めるようにして話した。
「わたし、夫、いる、知ってた？」と彼女は言った。

僕は「あれっ」と思った。そういえば出会った時以来それについての話は全くしていなかった。僕は知っていると答えた。

「でも、わたし、夫、嫌いな。夫、他に、女がたくさんいるの。夫、他の女、一緒、連れてくる。わたし、泣く」彼女はぎこちなく微笑んでそう言った。「ナガサン、でもね、夫、機嫌、悪い、わたし、殴る」と彼女は言っ自分の右腕のところを押さえた。彼女の浅黒い肌にはよく見るとさらに黒くなったあざのようなものができていた。

「ナガサン、わたし、夫、嫌いな。わたしの顔、殴るのよ」彼女はげんこつを作って自分の顔をバシバシと叩いた。

「ナガサン、わたし全然幸せじゃないのよ、全然幸せじゃないのよ」と彼女は言った。僕は手を伸ばし、彼女のあざを指で撫でた。

「わたし、ナガサンのことが好きよ。ねえ、わたし夫が嫌いなの」彼女は俯きながら輝きが増した目で僕の撫でている腕を見つめていた。

「離婚することはできないの？」と僕は聞いた。

「ナガサン、わたし一番上の階級なの。わたし、できない。結婚もパパとママ、決めたの。バリ人、一番上の階級は離婚できないの。パパ、ママ、かわいそう、ね？ナガサン、でも、わたし、ナガサン、好きよ。夫、他に女、たくさんいるの。ナガサン、わたし幸せじゃないのよ」と彼女は溜め込んだ言葉を吐き出すようにそう言うとかの境界線を越えたように彼女は泣き出した。

「ナガサン、バリ人の男は何人とも結婚できるの。女は黙っているしかないのよ。ナガサン、わたしもう結婚してるの。もう結婚してるのよ。でもわたしナガサン好きよ。ねえ、ナガサン、これからモレストラン来てくれる？」と彼女は言った。僕が頷くと彼女は遠くの田んぼと青空が広がる景色にしばらく目をやってから、俯いてまた泣いた。

「ナガサン、わたしもう結婚してるのよ。ごめんね、ナガサン。わたし、ナガサン好きよ。でも、ナガサンもうすぐ日本帰るんですよ。わたしひとりになるのが怖いのよ」と彼女は言った。僕は店員がこつちを見ていないことを確かめてから彼女を抱き寄せてキスをした。彼女はまた電話するからと言ってすぐに仕事に行ってしまった。

それからというものは彼女がいつ電話してきてもいいようにいつでも出掛ける準備をして待っていた。朝ごはんを食べに行き、お昼のぶんも葉っぱに包んでもらってテイクアウトした。この頃には僕はバリ人のように右手を使つてご飯を食べるようになっていた。シャワーを浴び、歯を磨くとテラスのテーブルの上に電話を置き、ぼんやりと空を眺めたり、音楽を聴いたりして過ごした。

そして僕は椅子に座りながらテーブルに乗った電話をじつと見つめていた。その小さなモニターが光出し、音を鳴らし、僕の感情が自動的に膨れ上がるその瞬間をただ待ちわびた。ここには僕を引き止めるものは何もなく、その一瞬のためだけにあとのすべての時間が存在していた。

しかし彼女から電話があつてもいつも疲れたとか、雨が降つていとか（実際には雨なんか降っていない時もあつた）用事があるといつて会うことはできなかった。彼女からの電話が終わると僕は町をぶらつきあてもなく歩き続けた。もう他のカフェに通うこともなかったしパンディたちに会うことも少なくなっていた。当然のことながら僕は時間を持て余していた。バリに來た頃はのんびりした生活に溶け込んでいたけれど、もう僕はのんびりなんかしたくはなかった。彼女がいなければ僕はとくに帰国していたわけであつて、バリに対する好奇心というものは僕にはもうなかった。そこはただの住み慣れた平凡な町になっていた。新しい出会いというものがなくなり、僕にとってはつまらない日常に侵された場所になっていた。

僕の一日はただ彼女からの電話を待つだけの暮らしだった。彼女が会えないと言うと、僕は次の日に電話が掛かってくることを考え、彼女がまた会えないと言うと同じように次の日を待った。彼女は町のところどころにある電話局から電話をしてきたけど、彼女の

給料では携帯に電話をするのは高いことであるらしく、僕がどんなに期待して待っていても僅か10秒足らずの電話で切れてしまった。

一日のうちでだいたい23時間59分50秒を僕は無駄に過ごした。僕はぼつぼつといろいろなことを考えるようになり、煮え切らない想いを抱くようになっていった。そうゆう時には僕は彼女に手紙を書いた。できるだけ素直な気持ちを僕はそこに書いた。ダユウと出会えてよかったとか、恋人として何かプレゼントを贈りたいと書いた。手紙を書き終えた時だけが僕にとっての僅かな安らぎの時となった。

手紙を書き終え、そしてテラスの椅子に座って煙草を吸うと僕のもやもやした感情は手紙というものに注ぎ込まれ、一時的ではあるけれどもすすきりした気持ちになることができた。僕はぼんやりと目の前にある空間に身を置いていた。そこでは迷いはなく、嫉妬もなく、いじらしさもなく、焦りもなかった。時々鶏の鳴く声が聞こえ、鳥が飛び、風が木を揺らして、雲を運んでいた。あらゆる感情はその広い世界に飛び経ち、僕は真っ白な自分をその中に発見するだけだった。彼女への思いも燃やし尽くされ、あとに残った抜け殻の僕は風が運んでくる僅かにねっとりとした時間の中にいた。

でもレストランに行って彼女に手紙を渡してもそこには恐ろしく手応えというものがなかった。僕の気持ちが伝わっているのかどうかもわからなかった。まるで神様に手紙を送っているようなものだった。

彼女から毎日のように電話があったけど、いつも彼女は会えないと言った。僕の毎日は意味もなく流れていった。僕にとっては避け難

く辛い日々だった。何よりも辛かったのはこのバリの時間の流れが遅すぎることであった。持ってきたCDはとづくに聞き飽きてしまったし、本も読み終わってしまった。町をぶらついて僕が欲しいCDや本はウブドでは見つからなかった。僕がバリに来て2ヵ月半は経過していたけど、僕にはもう一年ほどバリにいるような気がした。

雨が降り、風が吹き、明るくなったり、暗くなったりしても時間というものは僕に何も与えず、どこにも導かなかった。バリ人が予定というものを持たない文化なので僕もそれを持つことはできなかった。とにかく僕は宿で彼女からの電話を待ち続けた。

僕はできるだけ物事を考えないように努めていた。しかし「人間とは考える輩である」と誰かが言ったように有り余る時間は僕の思考を回転させ、当然のように僕を闇の中へと連れてゆくようになった。彼女から電話があり、会えないと言われるたびに僕は一步一步そんな世界に足を踏み入れ、どんなことでもいいから自分を納得できる思考へと自分を連れてゆきたくなっていた。ある一方では僕は彼女を信じ続けたけど、ある一方からはじりじりと闇が忍び寄ってきていた。おそらくそれは文化の違いがもたらすものであり、考え方の違いが生み出すものであり、社会の仕組みが違うせいでもあった。僕は考えることを辞めたいと思った。しかしどんなことをしても時間は過ぎ去らなかったし、時間があれば僕は必然的に考えた。僕はたまらなく日本に、あるいはバリではないどこかに行きたいと思った。ドライブをしたり、料理を作ったり、本屋やレコード店をぶらぶらして、何も生み出さない時間というものを忘れたかった。でも僕は「待つ」という時間の中で無力な自分と向き合っているしかなかった。

「ナガさん、もんだい、ある、顔してる」と、どうしようもなくな

ってパンディに会いにゆくと彼はそう言った。「なにか、もんだいあるだと、おもう」とパンディは僕の顔を覗き込むように言った。

彼の店の前は相変わらず仲間たちががやがやとたむろしていて、観光客が通ると声を掛けていた。僕みたいにバリ人の中にぽつんという外国人はいなかったからときどき彼らは僕を不思議そうに見てゆくこともあった。

僕はできればパンディに相談をしたかった。僕とダユウのことを全部しゃべって、一体バリはどうなっているんだと聞きたかった。しかし、そんなことを言えば町中に噂が飛び交い、いずれは彼女の夫の耳に入るかもしれない。そして殴られるのは僕ではなく彼女なのだ。僕はとくに問題はないと答えた。

「パンディ、コーマンのことはどうなったの？」と僕は聞いた。

「コーマン、わたし、しんじない、だからね。わたし、ストレス、いっぱい、だからね。きのう、にほんじんのおんな、つかまえて、セックス」とパンディは言った。

「ふーん、けっこうセックスしてるの？」

「わたし、ストレス、だからね。コーマン、できない、だからね。ほかのおんな、セックス」と彼は言った。

「誠実はしないの？」と僕は言った。

「バリじん、あまり、せいじつ、じゃない、だからね。うそも、いっぱい、だからね。ブンカ、だからね、文化。でも、いいうそも、

わるいうそも、ある、だともう」とパンディは言った。

僕はとにかくビールでも飲もうと言い、パンディやその仲間たちと一緒にビールを飲んだ。念のため仲間たちにも日本人とやったことはあるかと聞くとみんなだいたいやったことがあると答えた。

「ニホンジン、オマンコ、スゴイネー」と彼らは言っ、手で作った輪に人差し指を入れ、

「オイシイ、オイシイ」と言いながらガハガハと笑った。

蛇のようにぬるつとした疑いというものがその日の夜からたびたび僕の元を訪れるようになった。

になった。

僕がくたびれた顔をしてレストランに行くと彼女は、

「ナガサン、怒ってるの？」と僕に聞いた。僕はべつに怒っているわけじゃないと答えた。

僕が好きだよと彼女に言うと彼女も「わたしもよ」と言ってキスをした。

しかし僕はその天使のような微笑の向こうにちらつく何かを探すようになっていた。エキゾチックで神秘的な横顔の影の中に何かが潜んでいるような気がしていた。レストランは庭の拡張工事を始めたり、新しいスタッフが増えたりしてますます二人きりで話すことは

できなくなっていた。

僕の思考はとくにトップギアに入り、メインストレートをぶちぎりで爆走していた。毎晩、僕の頭の中ではどたばたといろいろな妄想が駆け巡った。彼女からの電話にもほとんど期待しなくなってきた。僕は目前に迫ってきた帰国のことを考え、そこに辿り着けばとにかくこの混乱の渦から逃れることはできるだろうと思うようになった。

それでも僕は彼女に手紙を書いた。夜の間に最初に降り落ちる霜のように純粹に君のことが好きだとか、太陽と月の位置が入れ替わってしまうほど君を求めていると手紙に書いた。しかしどんなに星に願いをかけたところで星は僕に何かを悟らせるように黙っているだけなのだ。

僕は眠れずにベッドの上でグルグルと寝返りを打っていた。憎たらしいほど静かな夜だった。真つ暗な闇の中で時々天井裏から鼠が走り回る音が聞こえた。どこもかしこも大運動会で忙しいみたいだった。

その時、不意に僕の思考が何かに引つ掛かったような気がした。釣竿がビクンと震え、何かを捕まえたことを示した。その吊り上げた何かは見れば見るほどよくできていた。完璧と呼んでもいいくらいだった。僕は部屋の電気を点け、テーブルの上に置いてある手紙の封を切り、もう一度読み返した。

手紙の内容はいつものごとく君が好きだということを事細かに書いてあるだけだった。しかしこれはおそろくなんの役にもたたないだろうということはわかっていた。そこで僕は手紙の最期のところ、

「これ以上事態が進展しないのならもうレストランに行くつもりもないし、君に会う気もない。僕がその気になれば僕のことを気に入ってくれる人も他にいるのだから」と書き加えた。

僕は恋愛において駆け引きというものが嫌いなタイプだった。しかしこれは「作戦」だった。僕はバリ人というものはものすごく嫉妬深いということを知っていた。一度僕がレストランの一階席でいつものようにコーヒーを飲んでいると、二階席に日本人の女の子がやってきたらしくダユウが僕のところに来てきて、

「ナガサン、かわいい、日本人来てるわよ。見にいつて、しゃべってくればいいじゃない。わたし、気にしない」と言って僕にしつこく勧めたことがあった。僕はべつにいいと断った。その日本人のオーダーが入り、彼女が料理を作っている間僕はトイレに行った。トイレは二階にしかなかったから僕は必然的に二階に行ったわけだけど、一階に戻ってくると彼女がやってきて、

「ナガサン、おんな、見に行った。わたし、嫉妬、嫉妬」と言った。

僕は彼女に会いたかったし、彼女を求めている。しかし誰しもが手を伸ばせばいつでも捕まえられるものなどすぐに手に入れようとは思わない。それが逃げようという素振りを見せるから人は追いかけるのだ。

僕の欲望はもはや僕自身の純粹性でも正直さでもなく「彼女」を求めていた。僕はこの手紙によって彼女の欲望のスイッチを押すことができるだろうと思った。僕は手紙を新しい便箋にしまうと久しぶりに落ち着いて眠ることができた。

彼女は手紙を渡したその日にすっ飛んで僕の宿にやってきた。ノックの音が聞こえたので僕がドアを開くとそわそわした彼女がそこに立っていた。彼女が中に入り、僕がドアを閉じると、

「ナガサン、だめ、だめ」と彼女は言っただけでドアを開けっぱなしにした。彼女は部屋の中を見回し、ヘルメットを部屋の隅に置いた。

「ナガサン、わたし、すぐに帰らなくちゃいけないの」と彼女は言った。僕はとにかく座って話をしようと言い、部屋の中には椅子がなかったのでベッドに誘うと、

「だめ、だめ、ナガサン」と彼女は言った。

「もし、夫、わたしのバイク、見つける。夫、ここに、来る。わたし、殴られる。わたし、もう帰る」そう言った彼女は入り口のドアを潜り、辺りを見回していた。僕は彼女を連れ戻し、落ち着かせるようにしばらく手を握った。そして不安げな彼女の瞳を見つめ抱きしめた。

「ナガサン、わたし、ナガサン好きよ」と彼女は僕にキスをしたあと、見えなくなるぐらい深く僕に抱きついた。僕は彼女を抱いたまま手を伸ばして開いたままになっていたドアを押した。ドアはテラスから吹き込んでくる風に押されてドタンという大きな音をたてて閉まった。その音に彼女の体はビクッと震え、強張った顔でドアの閉まったことを見ると「ナガサン、夫、来る、わたし、怖い」と言っただけで僕を振り払い、ヘルメットを拾い上げた。僕がいるから大丈夫だと彼女に言っただけで彼女はドアを開けて辺りを見回し「帰る、帰る」と言った。しばらくそんなどこにも行き着かない会話が続いた。

僕は諦めて「また来てくれる？」と彼女に聞いた。彼女は頷いて僕を抱きしめキスをした。今までの中で最も長く、強いキスだった。僕の舌は彼女を求めてうねうねと口の中を這いずり回り、彼女のざらついた舌は僕の粘膜の中から何かを必死で探しているみたいにいっまでも動き続けた。僕は息をすることを遮られ、ただ口の中に広がる温かさだけを求めた。僕はその温かみをずっと感じ続けたいと思った。その温かさの向こうにはきつと何か素晴らしいものがあるのだということが僕にはわかった。彼女は僕の呼吸が逆戻りするくらいぎゅっと抱きしめたあと顔を離れた。彼女の目は一回り大きく見えるぐらいにキラキラと濡れ、欲情した女の顔がそこにはあった。僕はそれを求めていたし、彼女もそれを求めていた。でも彼女はそのまま帰っていった。

それでも物事は着実に前進しているのだということは僕にも理解できた。彼女と僕の間にある「障害」と呼べるものを取り除き、彼女が僕の場所に辿り着くように誘導してあげればいいのだ。しかし僕は今までにそれなりに苦労をして問題というものを掘り下げてきたけれどもまだ一番奥深く、固い岩盤には到達していないことを知っていた。

そこに僕がぶち当たったのは僕が帰国する3日前のことだった。僕は一応手紙にプレゼントを贈ると書いていたから半信半疑のまま彼女のためにネックレスを買って準備をしていた。日本円で6000円ぐらいだったけど、もしかすると彼女が持っている貴金属の中で一番高価なものになるかもしれない。

その日彼女は休日で、僕はいつものようにテラスに座り、携帯電話をテーブルに乗せて流れてゆく雲を目で追ったり、鳥の鳴き声なんかを聞いていた。どこからともなく「ナガサン」という声が聞こえ、振り返ると彼女が部屋の中に立っていた。僕はつきり電話が掛かってくると思っていたから、彼女が現実の人間に思えないぐらいに驚いた。僕はとにかくテラスの椅子に彼女を座らせ、買っておいたポカリスエットを二人で飲んだ。

「ナガサン、わたし、長くここにいけないの」と彼女は椅子の真横に座った僕の手を握ったままそう言った。僕は軽いため息をつきながらも買ってきたネックレスを彼女に付けてあげた。僕が「気に入った？」と聞くと彼女は首元をちらちらと見つめ、ネックレスを何度も撫でながら気に入ったと答えた。

「わたし、帰らなくちゃ、家庭、問題」と彼女は言った。僕はうなだれたまま彼女の手を握り返し、僕のことをどう思っているのかと聞いた。

「わたし、ナガサン好きよ。でも、わたし、もう結婚。わたし、ナガサン、他の女と結婚してほしい。でも、ナガサン、またバリに来てね」と彼女は言った。僕は今までに溜まった疲れがどつと体に流れ込んでくるような気がした。そしてダユウが僕のことを好きだとは思えない、もうバリに来るつもりはないと答えた。

「違う、違う」と祈るように彼女はそう言った。

「わたし、ナガサン好き。でも、わたし、もう結婚。だから、わたし、友達のままでいたかった。でも、ナガサン、友達、できないでしょ？」僕は頷いた。

「わたし、家庭、問題、たくさん」と彼女は俯いてしばらく黙っていた。僕はポカリスエットを彼女に渡すと、彼女はそれを一口飲んでテーブルに戻した。

「わたし、家庭、問題、たくさん。でも、誰にも話し、できない。パパ、ママ、わたし、幸せじゃない、知らない。わたし、ナガサン、話、したい」

僕が彼女の頬に手のひらを当てると彼女はなついた猫のように僕の手に頬擦りをした。

「ダユウ」と僕は今にも泣き出しそうな彼女にそう言った。「パパもママも、どこの世界でも親は子供の幸せを望むものだろ。ダユウの人生はダユウのものなんだ。ダユウが幸せじゃないとパパもママも幸せじゃないだろう?」

「わたし、問題、我慢すれば、みんな幸せ、できる。わたし、ナガサン、またバリに来てくれれば、幸せ、ね?わたし、ナガサンも、幸せになってほしい」と彼女は「私が我慢すれば」というところでとうとう泣き声になり「ナガサンも幸せに」というところで僕にキスをした。

「僕は全然幸せなんかじゃないよ」と彼女のキスに応えずに僕は言った。「僕はダユウが幸せじゃないと、僕も幸せじゃない」と彼女から顔を離して言った。

「どうして?」と彼女は僕に聞いた。

「愛しているからだ」と僕が答えると彼女は僕にしがみついて泣い

た。

「僕はダユウが幸せじゃないことをもう知っているんだ。お互いが幸せじゃないと幸せとは言えないよ」と僕は言った。

「わたし、もう結婚。バリ人、離婚、できない」

「もし、ダユウが僕のことを好きじゃないんだったら・・・」と僕が言いかけ、言葉を聞き終わる前に彼女は僕を押し返して立ち上がり、怒った顔をして「もう帰る」と言った。

僕は部屋の中で彼女を後ろから抱きしめ、

「ダユウが僕を選んでくれればそれは運命なんだ」と僕は言った。彼女は僕を振り解き、ベッドの上に座った。彼女は乾ききらない目で僕をじっと見つめていた。

「ダユウ、子供がいるんだろ」と僕が言うと彼女の顔からは一瞬にして一切の表情がなくなり僕にしがみついて小さな子供のようにわんわんと泣いた。僕は彼女の背中をゆっくりと撫でながら「愛しているんだ」と繰り返し続けた。彼女は僕がプレゼントした髪留めを付けていた。

「もし、わたし、子供、いない。わたし、ナガサン、結婚したい。一緒に日本行きたい。わたし、幸せ」と彼女は声を震わせ、引っ掛かりながらそう言った。

「ダユウ、僕と一緒に日本に行くということがどうゆうことなのかわかるの？バリもない、ヒンドゥーもない、インドネシア語もない、パパもママもない。今あるすべてを捨てなくちゃいけないってこと

なんだ。それができるの？」

「わたしも、ナガサン、愛しているのよ。ナガサン、失いたくない」

僕は彼女と唇を合わせながら着ていたシャツを脱ごうと思って襟首のところを持ち上げた。

「だめ！」と彼女は言っただけでシャツを引っ張った。「ナガサン、わたし、できない。わたし、できない」と彼女は言った。僕が「どうして？」と聞いても彼女は泣き続け、

「わたし、怖い」とだけ言った。何が怖いのかと僕が問い詰めると彼女はネックレスを外そうとしながら「もう帰る」と言い出した。

彼女はヘルメットを片手に持ち、ネックレスを引っ張りながら「これじゃない」と僕に言った。僕はアップダウンの激しい話しの展開にぐったりしてベッドに座りながら、それは君にあげるし、もう帰ってもいいと言った。

「僕はダユウと結婚したいと思うよ。でもダユウがこれ以上望まないんだったら、僕がまたバリに来ても同じじゃないか」と僕は言った。彼女はそれには答えず、ネックレスを外してくれと言って僕に詰め寄った。僕はほっそりとして彼女の美しい首元に収まっている鈍い光に触れ、

「これは僕の心なんだ」と言うと彼女は、

「ありがとう、ナガサン、ありがとう」と何度も繰り返して、僕と一緒に泣いて泣くと「やめて」と言って僕の頬を拭き取った。

「ナガサン、わたし、家、帰りたくないの。帰りたくないのよ。わたし、ナガサンと一緒にいれば、幸せ。わたし、今、一番、幸せ」と彼女は僕に抱きついたまま言った。

僕は時が流れることを拒むように彼女をしつかりと抱きしめた。

彼女の胸のトクトクという鼓動が僕の体に伝わった。僕はかつて感じたことのないほど生命というものを愛しいと思った。その規則的なリズムは僕というものを求め、僕もそれを求めていた。彼女は「帰る」と何度も言いながら僕の元を離れると振り返ってまた僕に抱きついて泣いた。そういうことが20分ぐらい繰り返された。時間は流れてゆき、僕たちは互いに限定された世界へと帰らなくてはいけないことをわかつていた。僕は時間にも場所にも限定されない居場所へと彼女を導きたかった。しかし彼女はテラスに置いてあった携帯電話の時間を見ると「もう、夫、帰ってくる。わたし、帰る」と言って手繰り寄せた最期の時間を断ち切り今度は本当に帰っていった。彼女がいなくなってしまうと世界そのものが消滅してしまつたみたいに部屋の中はものすごくがらんとした。部屋自体が世界に開いた大きな穴のような気がした。

僕はテラスの椅子に座って煙草を吸った。風に乗って鶏やお香や人々の匂いが僕の元にやってきた。彼女が生まれ、時を過ごし、育ち、生きてきた場所の匂いだった。僕にとってそれはもう「アジアの匂い」ではなく彼女の匂いだった。その匂いは彼女の不在感をより一層強めた。

青空を見上げた時にも思ってたけど、どこまで行つたところで僕は僕でしかなかった。そしてどこに行こうが僕がぶつかるものは結局のところ同じものなのだと思うた。

僕は彼女に結婚したいと言ったことを思い出した。僕は今まで結婚のことなんて考えたこともなかった。でも僕と彼女が結婚することになれば、また「ぶつかるもの」がそこに現れる。どこまで行ってもそれから逃げることはできないのだ。彼女が日本に来れば浅黒い肌の彼女はおそらく職業的女性という目で周りから見られることになるだろう。敏感な彼女がその視線に気が付かないわけがない。

僕は駆け落ちということも考えてみた。でも日本に帰ったら僕は何の仕事も持たない底辺の人間なのだ。今更僕をまともな条件で受け入れてくれる場所もないだろうし、さらに僕は組織という中で働き出すと3ヶ月でノイローゼになってしまうような人間だった。

僕が唯一できることといえば、その固い岩盤に、地球上に張り巡られた網に、小さな穴を空けることぐらいだと思った。

「？僕？はそこに風穴を空けなくてはいけない」と僕は思った。

すべての偶然を、すべての必然に変えるのだ。

そこまで考えると僕はもう考えることを止めた。遠くから延びてくる風は僕を取り巻くようにやってきた。その風はいつもより強く吹いているように僕には思えた。

僕が実家に着いたときにはもう夕方になっていた。僕はすぐに国際電話をかけた。彼女は「いま、どこ？ナガサン」と僕に言った。僕は「今、ここに、いるよ」と答えた。テーブルの上にはテレビやエアコンのリモコンがばらばらと並び、壁に架かった時計はしつかりと時間を刻んでいた。

「元気？」と彼女は言った。彼女の声は急によそよしくなったように思えた。

「ナガサン、また、バリに来てね。ナガサン、来るまで、わたし、髪切らない。わたし、待ってる、ね？ナガサン、わたし、待ってる」壁に囲まれた僕はわからないと答えた。

「ナガサン、幸せになってね。ナガサン、幸せ、わたしも、幸せ、ね？ナガサン、幸せにならなきゃだめよ。幸せになってね」と彼女は言った。彼女が今この瞬間に遠い空の下で泣いていることがわかった。

「ナガサン！ナガサン！」という彼女の泣き声が耳元の冷たい受話器から聞こえた。

僕は荷物を開けて一枚のティシャツを取り出した。それは彼女が帰国の前にプレゼントしてくれたものだった。その値札を見ると日本円で1500円ぐらいのものだったけど、それは彼女の一月の給料の約半分に値する金額だった。僕はそれを手にとってその中に彼女の匂いを探した。しかし僕の感じることでできる匂いはそこにはなかった。

僕は車に乗って海に向かった。僕はドビッシーの？月の光？をオートリピートにして走り続けた。明るい街頭や、街を歩くサラリーマン、大きな看板や、周りを取り囲むピカピカな日本車の群れからも？月の光？が聞こえているようだった。

僕は彼女と別れた最期の瞬間を思い返していた。帰国する日に彼女と「ホテル・ポンポン」の出口の門のところで僕は彼女を見送った。彼女が僕と繋いだ手を離し、彼女の最期の中指が僕の手からすり抜けていったとき、僕の何かが音をたててブツツとちぎれたような気がした。彼女の手がすり抜けていった感触と、僕の何かがちぎれた感触はいつまでも執拗に僕の体の中で木霊していた。彼女は去り難そうに振り返っては戻ってきて何度も僕にキスをしてくれたけど、宿のスタッフが現れたので僕たちは何事もなかったように振る舞い、僕は彼女がバイクの音を響かせながら遠く小さくなってゆくまでその背中を見つめていた。

僕は誰もいない海岸沿いに車を止め、そして道路を渡って海が見下ろせる淵に立った。月は出ていなくて、真っ黒な空がどこまでも続き、遠くに幾つかの町の光が見えた。その光に照らされて、真っ黒い水面が鱗のようにゆらゆらと光っていた。僕の足元からは、波が

崖に打ちつけるザバンザバンという音が聞こえた。その音の発する場所が僕に何を求めているのか僕にはわかっていた。その音は僕の死の音だった。その音は夜の静かな闇の中で木霊し、光のない空に向けて叫び声をあげているようだった。

「なあ、死よ。僕はもうどのくらい君と話をしただろう。僕は君が求めているものはわかるよ。そして、僕が求めているものもね」

遠くで車が通り過ぎてゆく音が聞こえ、また遠ざかっていった。

「ある人は君を絶対的なものとして、あるいは神として迎え入れるものもいる。そして君の美しさに魅せられるものもいる。僕はこの下らない人生というやつが一瞬であることを知っている。そして君に包み込まれるのも一瞬のことだ。僕にとってはそこに意味なんてものはないし、元々そんなものはないんだ。始まったときから何にもなかったんだ。いくらあがいたところでないものはない」

僕はガツガツと地面を蹴ってみた。硬く湿った大地はビクともしなかった。

「ただね、僕はもう何度も君とこうして会っているけれども、僕はまだ君のところへゆくわけにはいかないのだろう。だって、僕はまだ本当にそれを望んではないからさ。おそらく僕のこの体が生きているということは何かを僕が望んでいるということだもんね。それがどこにあって、いつ現れるのか、僕にはわからない。でも僕にもまだ何かができるのだということはあるよ」

僕はライターで煙草に火を点けた。

「僕は別に君を怖がっているわけじゃないんだ。はつきり言って君

よりも怖いことはこの世界にはたくさんある。でも結局すべては君の元に帰ってゆくだけだね。形のないものから生まれた以上、形のないものに戻るのは自然なことだからね。でも時々僕は君に対してとても腹が立つ。本当のところはわからないけど、毎回、毎回、僕が望むものと逆のものを君は僕に与えようとするような気がするんだ。もしくは一番欲しい？核？の部分だけを与えないとかね」

遠くの町の光がちらちらと揺れていた。その光のひとつひとつの元にはさまざまな生活があり、さまざまな感情があり、さまざまな出来事があるのだらうと僕は思った。僕は足元から聞こえる音にしばらく耳を傾けていた。

僕は煙草を吸う。鼻から煙を少しだけ泳がせ、そしてもう一度ゆっくりと吸い込む。そこにある空気を、汚れを、匂いを、つかめない意味のようなものを体の中に送り込む。

「僕はただ自然にどこかに運ばれるのを待っているだけなんだ。僕はこう思うよ。風は多くを知っているってね。大地は何かを伝えたがっているんじゃないかってね。空がどのくらい高いのか僕はいつも見ていたんだ。誰かが僕のところへやってきて連れ去ろうなんてことをしたら大声で言っただけだよ、

『ここは、僕の場所なんだ、もうどこへもいかないぞ！』ってね」

僕は吸い終えた煙草を指で弾いて飛ばした。夜の深い闇と生命の母である海はそれを飲み込み、後には何も残さなかった。それが僕と死との別れの合図だった。僕が後ろを振り向くと車が帰りを待つかのようにじっとしていた。僕は死に背を向け、車に向かった。僕はとても親しい友人との別れのように死に対してある種の寂しさを感じているのに気が付いた。死以上僕を理解してくれるものなどな

いかのように。

僕は車に乗り込み、エンジンをかけた。また新しい火が灯ったなと僕は思った。僕は闇を消し去るためにライトを点け、また走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4354e/>

メビウスという欲望の輪のなかで

2010年10月13日08時00分発行